

CONTENTS

Opening essay:
“Rebooting Memories”
Memory Inheritance Based on Communication Emerged by FLOWING Records
[Hidenori Watanabe] ——— i

Faculty Papers

A Course in Information Semiotics: Synthesis and Perspective
[Hidetaka Ishida] ——— 1
The Simplicity in the *Inside of a Cage* (1957):
the “Invention” of Television by Ben Wada and Tadashi Iijima
[Keisbo Kibara] ——— 27

Refereed Papers

IT Utilization Impact on Health Care Quality and Productivity:
Empirical Analysis on National Hospital Organizations
[Kotaro Miyake] ——— 45
Women’s Cultural Education and Occupation
in Serial Novels in the Early Showa Period:
Focusing on *Mother* by Tsurumi Yusuke(1929) [Seung-kyung Lee] ——— 61
A Review of Post-Disaster Recovery and Reconstruction
for the Elderly from the Individual Social Capital
Perspective [Hsinyi Hsueh] ——— 75
The Social Practices of Independent
Chinese Curators in the Post-Mao Era [Haiyin Chen] ——— 91
Is My Car Evil? A Review of Non-Anthropocentric
Theories of Moral Agency [Tommaso Barbetta] ——— 107

Field Review

Interactive Fabrication Technologies for
Improvisational Prototyping [Yasuaki Kakehi] ——— 123



情 報 学 研 究
JOURNAL OF INFORMATION STUDIES

学環

思考の環

- 「記憶の解凍」—資料の“フロー”化とコミュニケーションの創発による記憶の継承—
〔渡邊 英徳〕 — i

教員研究論文

- 「情報記号論」講義 —総括と展望— 〔石田 英敬〕 — 1
- 『檻の中』(1957)における単純さの追求
—和田勉と飯島正によるテレビの〈発明〉— 〔木原 圭翔〕 — 27

査読研究論文

- 医療IT化による医療の質と生産性に与える影響の研究
—国立病院機構病院における実証分析— 〔三宅 講太郎〕 — 45
- 昭和初期の『婦人倶楽部』の連載小説における女性の教養と職業
—鶴見祐輔作「母」(1929)を例として— 〔李 承京〕 — 61
- 個人レベルのソーシャル・キャピタルの視点から見た
復旧・復興過程研究の論点整理：高齢者に焦点をあてて 〔薛 欣怡〕 — 75
- 政治転換期中国におけるインディペンデントキュレーターの実践
〔陳 海茵〕 — 91
- Is My Car Evil? A Review of Non-Anthropocentric Theories of Moral Agency
〔Tommaso Barbetta〕 — 107

フィールド・レビュー

- 即興的モノづくりのためのインタラクティブなファブリケーション技術
〔筧 康明〕 — 123



思考の環

OPENING ESSAY

「記憶の解凍」

資料の“フロー”化とコミュニケーションの創発による記憶の継承



図1. カラー化した写真をもとにした被爆者と若者の対話

筆者らは、社会において“ストック”されていた資料を“フロー”化し、そこから創発するコミュニケーションによって情報の価値を高め、記憶を未来に継承する活動＝「記憶の解凍」に取り組んでいる。

戦争・災害など過去のできごとの「実相」は、多様な人々の視点を内包した多面的なものである。正確な資料を多面的に網羅したデジタルアーカイブは、この「実相」を伝えていく基盤として重要である。しかし、こうしたデジタルアーカイブは、いまだ十分に利活用されていないことが指摘されている [1]。この点を解決するためには、アーカイブされた資料が持つ価値を社会にアピールし、利活用へのモチベーションを形成することが必要となる。

現代の社会においては、“ストック”されたデータそのものに加えて、適切な情報デザインにより“フロー”を生成し、コミュニケーションを創発することに価値が見いだされる [2]。従って、過去のできごとの「実相」を未来に伝えていくためには、**デジタルアーカイブ／社会において“ストック”されている資料を“フロー”化し、コミュニケーションを創発することで情報の価値を高め、継承へのモチベーションを生み出していくことが望まれる**。筆者らは、この営みを「記憶の解凍」と呼んでいる [3]。

筆者らはこれまでに、「ヒロシマ・アーカイブ [4]」をはじめとする、戦災・災害をテーマとしたデジタルコンテンツの制作を、地元の若

者たちと協力しながら進めてきた。さらに2016年からは、社会に“ストック”されていた「白黒写真」を、人工知能技術 [5] を用いて「カラー化」する活動を進めている。さらに、カラー化写真をソーシャルメディアに共有して“フロー”をつくりだし、コミュニケーションの場を生み出している。この活動においては、白黒写真がまとう“凍った”過去のイメージを、人工知能・ソーシャルメディアが“溶かす”ことにより「記憶の解凍」が行なわれる。詳細については筆者らの論文 [3] を参照されたい。

この派生系として、カラー化した戦前の写真をもとにして、被爆者と若者たちが語り合う、

新たな記憶継承の取り組みが生まれた。筆者らと「ヒロシマ・アーカイブ」を共同制作している広島女学院高等学校の生徒たちは、「ヒロシマ・アーカイブ」の証言収録と平行して、戦前の広島の白黒写真をデジタル化し、カラー化する取り組みを進めている。筆者らが2017年11月に開催したワークショップを通して、生徒らはカラー化の技法を習得した。生徒らはその後、自発的に活動を展開し、自動カラー化した写真をもとに、被爆者との対話を重ねてきた(図1)。さらに2018年6月以降は、対話の内容をもとにした色補正を施し、カラー化の精度を向上させている。



図 2. 戦前の広島の家族（濱井徳三氏提供）の元写真・カラー化

図2に、戦前の広島の家族（濱井徳三氏提供）の元写真・カラー化写真を示す。また、このカラー化写真を、生徒らとともに閲覧した濱井氏のコメントを以下に示す [6]。（以下引用：下線は筆者）。

“今月下旬、浜井さんは同高で、カラー化された写真を受け取った。家族が一堂に会した写真に「本当にきれい。昨日のよう」。かつて広島市内にあった桜の名所・長寿園での花見の場面では、背景の青々とした杉に「杉鉄砲でよう遊んだなあ」とほほ笑んだ。「長寿園までの道に弾薬庫があって幼心に怖かった」と新たな記憶もよみがえった。”

このコメントは、カラー化によって浮かび上がった「青々とした（杉）」という要素から、「杉鉄砲」さらに「弾薬庫」についての“凍って”いた記憶が“溶か”され、甦ったことを示している。この「記憶の解凍」は、生徒たちとの直接の対話により起きたものであることも強調しておきたい。ここでは、白黒写真のカラー化が若者との対面のコミュニケーションを創発し、あらたな記憶に基づく“フロー”が生成されている。

次いで図3に、戦前の広島家族（高橋久氏提供）の元写真・カラー化写真を示す。図3の二段目は、AIによる自動色付け結果を元の白黒写真に重ね、高解像度化したものである。生徒はこの結果に基づき、植物の図鑑を参照して、写っている花を「シロツメクサ」と推測し、花畑の黄色味を弱めた（図3:三段目）。この時点のバージョンを、生徒らとともに閲覧し

た高橋氏のコメントを以下に示す [7]（以下引用：下線は筆者）。

“2年生でリーダーの庭田杏珠（あんじゅ）さん（16）は7月下旬、広島市西区の高橋久さん（89）を訪ねた。一面に咲く花の中で、両親と祖母、弟と高橋さんの5人がほほ笑む写真。「これはタンポポだった」。記憶をたぐり寄せながら高橋さんが指さした。庭田さんがシロツメクサだと思いついていた小さな花だ。”

このコメントは、カラー化写真の「色彩」と、若者との対面のコミュニケーションが、実際は「タンポポ」であったという、高橋氏の“凍って”いた記憶を“溶か”し、甦らせたことを示している。この高橋氏のコメントをもとに、さらに色補正したものを図3の最下段に示す。

なお、高橋氏は年齢を重ねるとともに口数が減っており、カラー化された家族写真に自身が写っていることを認識しているのか否かについても、判然としない状態にあった。しかし、生徒・家族とともにカラー化写真を囲む場においては、過去の記憶について、楽しそうに語りはじめた。このことから、カラー化という技術のみでは記憶は解凍されなかったこと、そして親密な対話の場こそが、“フロー”を生成し、高橋氏の記憶を甦らせるために重要な要素であったことがうかがえる。

このできごとをきっかけとして、高橋氏と生徒は、その後も親交を深めている。このつながりは、新たに生まれていく「記憶のコミュニティ」の礎となるだろう。生徒らは今後も、写真のカラー化と補正を続け、それを元にした被

爆者との対話を重ねながら、記憶を継承していく。

2018年12月には、この活動の成果発表として、対話を経て完成したカラー化写真の展覧会

[8]、国際会議での口頭発表[9]を実施した。若者の創意から始まったローカルな活動は、世界に向けて拡がりつつある。



図3. 戦前の広島家族（高橋久氏提供）：元写真・カラー化・色補正のバリエーション

注) 本稿は、筆者らの既発表の論文[渡邊 2018] (CC-BY 4.0 で公開) から一部を抜粋し、加筆修正を施したものである。

参考文献

- [1] 今村文彦, 柴山明寛, 佐藤翔輔:「東日本大震災記録のアーカイブの現状と課題」; 情報の科学と技術, Vol.64, No.9, pp.338-342, 2014 年.
- [2] ケヴィン・ケリー:「〈インターネット〉の次に来るもの 未来を決める 12 の法則」; NHK 出版, 2016 年.
- [3] 渡邊英徳: 「「記憶の解凍」: 資料の“フロー”化とコミュニケーションの創発による記憶の継承」; 立命館平和研究, Vol. 19, pp.1-12, 2018 年.
- [4] ヒロシマ・アーカイブ制作委員会:「ヒロシマ・アーカイブ」; <http://hiroshima.mapping.jp/> (2019 年 1 月 28 日参照)
- [5] Satoshi Iizuka, Edgar Simo-Serra, Hiroshi Ishikawa: “Let there be Color!: Joint End-to-end Learning of Global and Local Image Priors for Automatic Image Colorization with Simultaneous Classification.”; ACM Transaction on Graphics (Proc. of SIGGRAPH), Vol. 35, No. 4, #110, 2016.
- [6] 城戸良彰:「被爆前の営み 鮮やか 広島女学院高生 写真カラー化 記憶掘り起こし継承」; 中国新聞, 2017 年 12 月 30 日.
- [7] 土屋香乃子:「よみがえる被爆者の心の色 AI で写真カラー化→聞き取りで補正 広島の高校生」; 朝日新聞, 1 面, 2018 年 8 月 3 日.
- [8] 東京大学大学院 渡邊英徳研究室 + 広島テレビ株式会社: 広テレ新社屋完成記念展示会「記憶の解凍 ～カラー化写真で時を刻み、息づきはじめるヒロシマ～」; 2018 年 11 月 23 日～12 月 2 日
- [9] Hidenori Watanave and Anju Niwata: "Rebooting Memories: Memory Inheritance Based on Communication Emerged by FLOWING Records"; Global Policy Forum on Preservation of Documentary Heritage for Disaster Risk Reduction and Management for Sustainable Preservation of Documentary Heritage, UNESCO Headquarters, Paris, France, December 11, 2018.



この記事の著作権は著者に属します。この記事は Creative Commons 4.0 に基づきライセンスされます (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>)。出典を表示することを主な条件とし、複製、改変はもちろん、営利目的での二次利用も許可されています。



渡邊 英徳 (わたなべ・ひでのり)

[生年月] 1974 年 9 月

[専攻領域] 情報デザインとデジタルアーカイブ

[主たる著書・論文]

「ナガサキ・アーカイブ」「ヒロシマ・アーカイブ」「忘れない: 震災犠牲者の行動記録」などを制作。「データを紡いで社会につなぐ」(講談社現代新書)などを執筆。

[所属] 東京大学大学院情報学環 教授



教員研究論文

FACULTY PAPERS

「情報記号論」講義

総括と展望

A Course in Information Semiotics: Synthesis and Perspective

石田 英敬*

Hidetaka Ishida

[...] 社会のなかにおける記号の生活を研究するようひとつの学を考えてみる事ができる；
[...]；われわれはこれを記号学 (Sémiologie。ギリシャ語の *semêion* 「記号」から) と呼ぼうとおもう。それは記号がなにかから成り立ち、どんな法則がそれらを支配するかを教えるであろう。

それはまだ存在しないのであるから、どんなものになるかはわからない；
しかしそれは存在すべき権利を有し、その位置はあらかじめ決定されている。

フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』¹

0 はじめに

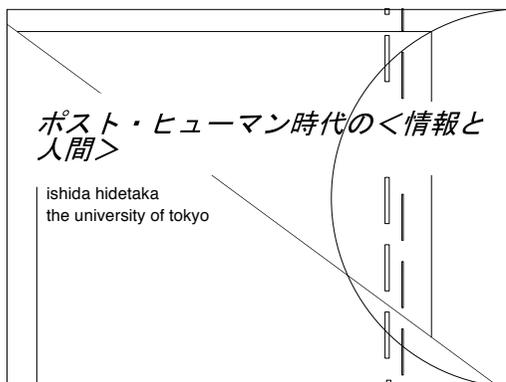


図 1. 「情報学環設立準備シンポジウム」
スライド 2000 年 3 月

2019 年 3 月末をもって東京大学を退任するにあたり、大学院学際情報学府で 2000 年以来 19 年間続けてきた講義「情報記号論」の総括を記しておこうと思う。

2000 年の情報学環・学際情報学府の発足を前に行われた同年 3 月の設立準備シンポジウムでは「ポスト・ヒューマン時代の〈情報と人間〉」の題で短い話をした²。発足当初の情報学環では「〈情報と人間〉学域」が私の担当であったからだが、人文科学を専攻する者が情報学環のような新しい組織に加わることの意義について

* 東京大学大学院情報学環教授 (大学院総合文化研究科・教養学部 兼任)

キーワード：記号論、メディア論、情報記号論、メディア記号論、文字学

話したつもりである。

情報学環設立の周知のためのシンポジウムであり入試の直前でもあったから、「もし私が試験官ならば、次のような問題を出題するだろう」と半ば冗談めかして提起した問いは次のようなものだった -

問い：

「情報と人間」の関係をめぐって、「東京大学大学院・情報学環・学際情報学府」設立の人類史上の意義を述べよ。

いかにも大げさな「出題」だが、私が示した「解答例」は、

答え：

「人類」と呼ばれた生物による文明が20世紀末から21世紀初頭に経験した三つのゆ

らぎに対する〈愚かな／賢い〉リアクション

答えの中で、私が言及した「三つのゆらぎ」とは、つぎのようなものだった—

三つのゆらぎ

その1「人間」のゆらぎ、あるいは、Post-Human

その2「知」のゆらぎ、あるいは、Interdisciplinary

その3「大学」のゆらぎ、あるいは、Interfaculty

人間のゆらぎ、知のゆらぎ、大学のゆらぎに私の講義は少しでも「賢く／愚かでなく」答えられただろうか。私自身が自分の成績表を出すべきときに来ている。

1. 「情報記号論」講義の出発点

1.1 理論的背景

「情報記号論」をテーマに講義をするという構想は、1999年に情報学環・学際情報学府設立に参画する過程で私自身が抱いたものだ。

1993年の教養学部前期教育カリキュラム大改訂以来、教養学部前期課程総合科目で「記号論」を私は担当していた。記号論は長い歴史をもつ学問であるが、東京大学で正規のカリキュラムのなかに科目として位置づけられたのはこれが最初である。同じ93年には大学院総合文化研究科に言語情報科学専攻が発足し「言語態分析」講座を担当したが、「言語態研究」とは「社

会や文化の単位としての言語活動の研究」であるという定式を与えたのも私である³。

私自身は19世紀フランスの詩人ステファーン・マラルメの詩の形成を構造主義以後の詩学の方法により研究することから出発した研究者だが⁴、1990年代はミシェル・フーコーの翻訳を責任編集し⁵、社会学者のピエール・ブルデューと研究セミナー⁶を開いたり、レジス・ドブレやベルナール・スティグレルらとメディアオロジーのシンポジウム⁷を組織したりして研究領域を拓げていく時期だったから、言語

態分析講座では、言説分析やメディア論と詩学理論とを架橋する「社会のポイエシス」をテーマに講義をおこなっていた⁸。

言語態研究は言説の実践（プラクシス）の研究であり、詩学研究は言説の創発（ポイエシス）の研究である。記号論は、言説や表象を生み出す記号要素の研究である。記号論を基礎に、言語態研究による言説の社会・文化研究、詩学研究による言説や表象の制作の研究を結ぶというフォーメーションを1990年代には組み立てていたのである。

2000年からの情報記号論の導入は、この配

1.2 情報記号論の認識論的位置

2000年度の夏学期から3年間は「情報記号論の諸問題」のタイトルで講義を行った。第一期の学際情報学府（2000年度-2003年度）のカリキュラムは各教官が全専攻生に対して入門的講義を行うというフラットな設計であったから俯瞰的な講義を行うことに適していた⁹。

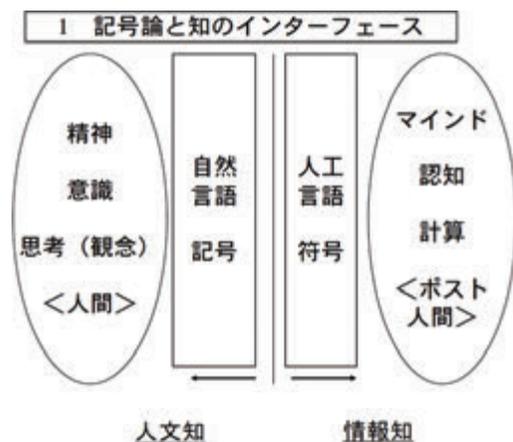


図2. 「記号論と知のインターフェイス」

置に新たな次元を加えることになった。それはメディアとテクノロジーの問題系である。

情報をキーワードにした大学院で研究教育に携わることになったとき、私のなかでは自分の理論パラダイムのうち、記号論を使って情報学と架橋すべきだという明確な判断があった。それは、ロック、ライプニッツ以来、記号論（semiotics）が、一方では現代の言説と表象の理論の基礎にある学問であると同時に、他方では現代の情報科学の源流となった知の系譜だからである。

このとき打ち出した情報記号論のテーゼに、「人間が〈記号過程〉に関わっているときに、機械は〈情報処理〉を担当している（While people participate in semiosis, machines participate in information processing）」がある。ひとの意味経験とマシンの情報処理というマン・マシンの界面に情報記号論の問いの圏域を設定したのである¹⁰。

この界面にそって、記号論の知のインターフェイスも定義される。[図2]と[図3]はそのときに提示した認識論的な配置である。

[図2]では、左側楕円に人文知における人間理解、右側楕円に情報知における人間理解を、〈精神〉vs〈マインド〉、〈意識〉vs〈認知〉、〈思考（観念）〉vs〈計算〉、〈人間〉vs〈ポスト人間〉として対比させ、人文知・情報知それぞれの形式化のモジュールを、中央の二つの矩形で、「自然言語と記号」、「人工言語と符号」という対比で示している。左側の形式化モジュール

2. <社会・文化> vs <自然・技術>のなかに埋め込まれた<関係>

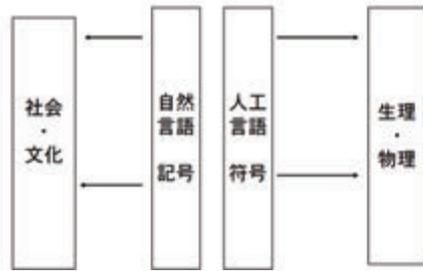


図3. 「形式化の知と諸学の関係」

ルに記号論は固有に関わっており、右側のモジュールである情報学と接するとこの時点では考えられている。

1.3 記号過程と情報処理

記号過程 (semiosis) と情報処理 (information processing) のインターフェイス関係を提示するために、私が提起したのは、ソシュールの「こ



図4. ソシュール「ことばの回路」

とばの回路 le circuit de la parole」とシャノン・ウィーヴァーの「コミュニケーション・モデル」との補完関係である。

「ことばの回路」[図4] はソシュールが1910年頃におこなった講義のなかで提示されたものである¹¹。

図から明らかのように電話モデルにもとづい

[図2]で示した形式化の知(「記号の知」と「情報の知」)が、より広く一方における人文社会科学、他方における自然諸科学と技術工学という諸学の布置のなかに埋め込まれた関係にあることを示したのが[図3]である。

2000年代初頭に示したこの認識論的な構図は、その後も私自身のなかで基本的に変わっていない。自然言語および記号をベースに人間の記号過程(セミオーシス)をとらえる記号論と、人工言語と符号化により人間の世界を計算論化していく情報学との界面に、情報記号論の問題領域を設定しようというのが、情報記号論の試みということである。

ている。言語記号のやり取りを電話コミュニケーションのモデルにもとづいて理論化したのである。

[図4]をさらに概念化した[図5]では、脳内で起こる「概念 Concept」(=シニフィエ)と「聴覚イメージ Image acoustique」(=シニフィアン)の連合作用も書き込んでいる¹²。このソシュールのコミュニケーション図式で、固有に言語学が関わるとするのは、脳内の概念(シ

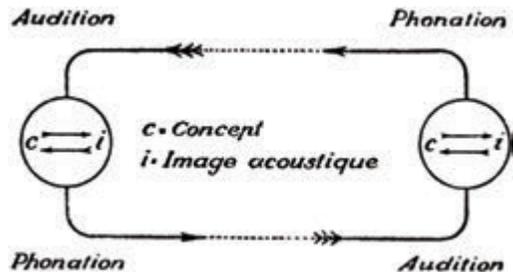


図5. 「ことばの回路」概念図式

ニフィエ) と聴覚イメージ (シニフィアン) との連合作用にかかわる心的プロセスとしての「言語体系 (ラング)」の部分であって、それ以外の脳から発話 (phonation) へ、あるいは聴取 (audition) から脳へという生理的プロセス、および発話と聴取を結ぶ音波にかかわる物理的プロセスは、言語学 - より厳密に言えば言語記号学 - にとっては非関与的であるとされる¹³。

他方、ソシュールの図式からほぼ40年をへて1948年に提出されたクロード・シャノンの数学的通信理論もまた電話モデルに基づいている [図6]。よく知られているように、メッセージが情報源から符号化をへて受信機で復号化されて受信者に届く回路の情報量計算を可能にした図式 (通称「シャノン・モデル」) である。

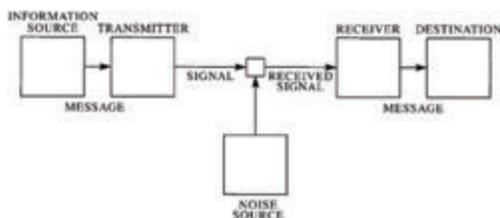


図6. シャノン「コミュニケーション・モデル」

シャノンの通信理論がもっぱら関わるのは「工学的問題 engineering problem」であり、「しばしばメッセージは意味を持っており、メッセージは何らかのシステムによって物理的あるいは概念的な一定の実体を参照する、あるいはそれらと関連づけられるものである」としても「コミュニケーションにおけるそれらの意味論的な側面は工学的問題には非関与的である」¹⁴

とされる。つまり、「情報源」と「受信者」とを結ぶ工学的回路の部分にのみシャノン・モデルは専ら関わるものであるとされる。

そこから浮かび上がるのは、ソシュールの「ことばの回路」が意味作用 (signification) の心的プロセスにもっぱら関わり生理的・物理的プロセスを切り離すのとちょうど対比的に、シャノン・モデルが意味論的プロセスを切り離してもっぱら物理的信号の伝達という工学的プロセスに専念するという相互補完的な関係が電話のコミュニケーション回路を分け合っている構図である。

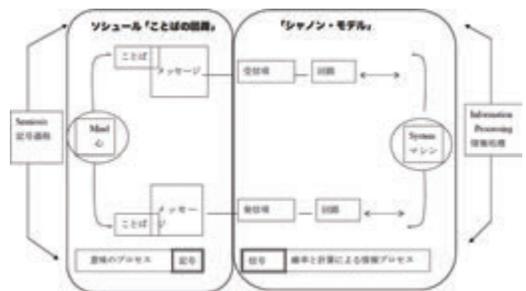


図7. 「ことばの回路」と「シャノン・モデル」

そこで、二つの図式を一つの電話コミュニケーションの回路の上にマッピングすれば [図7] のようになる。

ソシュールの「ことばの回路」は、脳を概念 (シニフィエ) と聴覚イメージ (シニフィアン) の連合が起こる心の審級とし、記号 (Sign) の発音 / 聴取によって、「ことば la parole」をコミュニケーションするパース記号論のいう「記号過程 Semiosis」の意味のプロセスである。ソシュールの「ことば la parole」は、「シャノン・モデル」では「メッセージ」に対応し、発信項 / 受信項

を端末とする電気信号回路の情報処理のプロセスへとつながっている。心とマシン、記号過程と情報処理、言語記号を単位とする意味のプロセスと、電気信号による数理的情報処理プロセスが同じメディア回路を分け合っている構図が浮かび上がる。

1900年の日付に対応し現代記号学の出発点にあるソシュール「ことばの回路」の図式と、

2. 情報記号論の展開

2.1 メディア記号論の視座

記号論と情報学のインターフェイスは、その基盤にある**メディアの問い**を提起する。上述の「ことばの回路」とシャノン・モデルの共通の基盤が電話回路であることが端的にそれを証している。「記号の知」を問うことは同時に「メディアの知」の探究でもあるのだ。私が2003年に出版した『記号の知 / メディアの知』の書名のスラッシュは、この基本的なスタンスを打ち出したものである¹⁵。

私の記号論は、**メディア記号論**としての性格をしだいに強めていくことになった。この理論的深化はむろん学問に内在的なものだったが、同時に旧社会情報研究所との合併による2004

2.2 メディアの文明圏

私は、メディアの文明圏を**記号・技術・社会の三次元のトポロジカルな結び**れとして理解することを原理論としてきた¹⁸ [図8]。

これは、1990年代の言語態の探究以来の理論態度だが、記号の本質主義との基本的な差異であり、記号の問いを技術の問いと社会の問い

50年後の1950年に位置し情報学の出発点となった「シャノン・モデル」の図式とがこのように対をなす認識論的界面の成立こそ、「人間が〈記号過程〉に関わっているときに、機械は〈情報処理〉を担当している」という情報記号論の問題圏を示すというのが、「情報記号論」講義の出発点にあった**学際的な見取り図**だったのである。

年からの第Ⅱ期情報学環・学際情報学府の発足にともなってカリキュラムが改訂され、メディア論関連科目の拡充が行われメディア論を専攻する学生が増えたこととも関連していた。私としては、いまだ明確な学的基礎付けを欠いたメディア論（media studies）という異種格闘技的な学際分野に、記号論という一般学から基礎付けを与える狙いを込めたものでもあった。

教養学部前期教育「記号論」¹⁶や学際情報学府「文化人間情報学基礎」¹⁷等の授業をとおして繰り返し提示した基本的な理論線分の幾つかを確認しておくことにしよう。

へと原理的に開くものである。メディアは記号論の応用領域なのではなく、記号が成立するための基本的エレメントなのである。

この考え方のもとには、私自身が「メディアの先史学」と呼ぶようになった進化論的な考察がある¹⁹。1990年代から一緒に研究を続けてき

メディアの文明圏

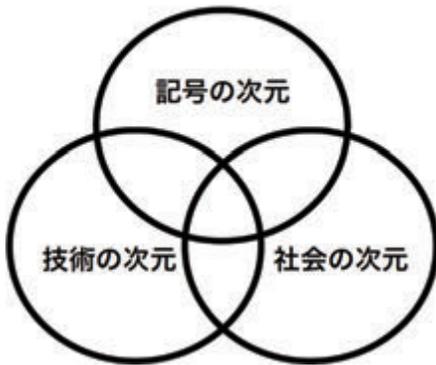


図8. 「メディア文明の三次元」

た盟友ベルナル・スティグレルの仕事に大きな示唆を受けて定式化したものである²⁰。

この原理論では、アンドレ・ルロワ＝ゲーランの『身ぶりと言葉』²¹に依拠して、直立二足歩行による、手の解放（道具発達の起源）、脳の解放（高度な言葉・表象能力の発達の起源）、顔の成立（社会性の起源）という〈ヒトの発明〉

2.3 メディアの文字学

20世紀後半以後にメディア論を語る者はマクルーハンを避けて通れない。「ゲーテンベルクの銀河系」- 活字の文明圏 - に対して自らの立ち位置を明らかにすることを求められる²³。

石田のメディア記号論の中心命題は、**メディアとは文字の問題である**というものだ。そして、記号論も - 言語の問題ではなく - 文字の問題を基本に考えるべきであるというものだ。ジャック・デリダの『文字学について』が1967年にいち早く提起したように、記号学とは文字学なのである²⁴。

からメディアの文明圏を説き起こす。

メディアの文明圏が生まれたのは手の解放に淵源する技術進化の活動系列と脳の解放に起源をもつ言語・表象活動の進化の系列がクロスするという、手の働きが脳の働きをカク（描く・書く）という出来事を俟ってである。ショーヴェ洞窟やラスコー洞窟に発見されたクロマニヨン人により描かれた洞窟壁画は絵という記号に関してそれを示すものだし、シュメール文字やエジプトのヒエログリフ、古代中国の甲骨文字は文字記号に関してそれを証している²²。いずれも筆記用具と書記記号の成立というメディア問題の起源を示す出来事であって、それ以後、人間の文明とはメディア文明ということになる。もちろんそれはメディア文明以前に、あるいはその外に、身ぶりの文化、口承の文化が存在する事実を排除しない。私が啓蒙的な機会に繰り返して述べてきたように、メディア論は「古くて新しい問題」を扱う学問なのである。

ゲーテンベルクの銀河系以後もメディアは文字の問題であり続けてきた。あるいはむしろ、ゲーテンベルク銀河系の終焉こそメディアがテクノロジーの文字の問題として浮上した出来事だったのである。そのとき文字の問題がヒトが書く文字だけの問題にとどまらず**メディアの問題として一般化した**のである。

石田記号論では、メディアは〈テクノロジーの文字〉である、と考える。活字メディア圏では、文字の書き手はヒトであり、読み手もヒトであった。文字の読み書きは、書くヒトの意識

と読むヒトの意識を媒介する**意識のサイクル**であった。メディア問題が浮上するのは、**無意識**のレベルでメディアがヒトの意識を〈書／描〉き始めたときである。

この認識を教育の場面では、「メディアと記号についての三つのテーゼ」（石田の三テーゼ）としてまとめた。

第一テーゼ： 〈記号〉は〈テクノロジーの文字〉によって書かれている。

第二テーゼ： 〈記号〉とは〈意味〉や〈意識〉を生み出す要素のこと。

第三テーゼ： 私たち人間は、〈テクノロジーの文字〉を〈読む〉ことができない。

伴立命題： 〈メディア〉とは、〈テクノロジーの文字〉の問題だ。

〈テクノロジーの文字〉という用語が表しているのは、techno-logic（技術 - 論理的）な文字化 = 文法化（仏 grammatisation / 英 grammatization）であり、仏語の grammatisation

technologique 英語の technological grammatization に対応する²⁵。文字とは痕跡技術による記号の文法化である。文法化がヒトの手を離れて機械によって担われ、人間の意識の閾以下 - 技術的無意識 - で意識を書くようになるのが〈テクノロジーの文字〉の時代である。

Photographie, télégraphe, phonograph, cinématographe というテクノロジーの文字の名がそれを示している。英 graphy / 仏 graphie のギリシャ語源 $\gamma\rho\alpha\phi\epsilon\iota\nu$ は「カク（書く・描く・搔く・画く）」であり、それらの命名においてテクノロジーの文字が文字として名づけられている [図9]。

それらの文字テクノロジー - graph-technology - が、télégraphe に始まる telephone, radio (radiotélégraphe)、television という遠隔テクノロジー - tele-technology - と組み合わせさせて人びとを囲い込んでいく [図10]。

19世紀以降に発明されたそれらのメディアテクノロジーが産業資本主義の世界化とともに文明を書き換えていったのが二〇世紀をともし



図9. 「文字テクノロジー」



図10. 「遠隔テクノロジー」

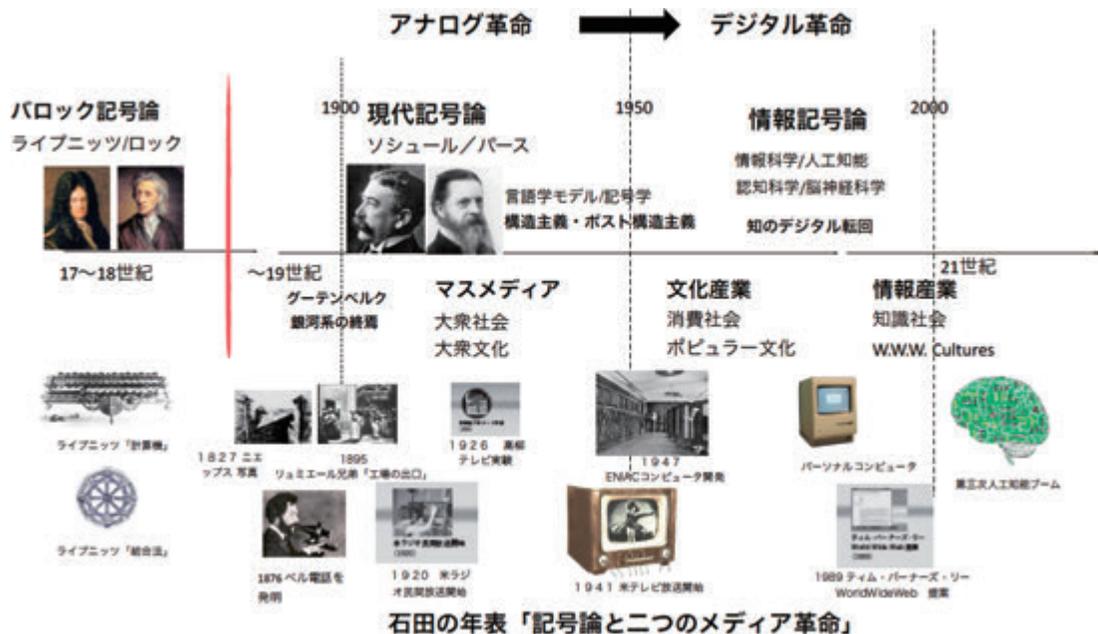


図 11. 石田の年表「記号論と二つのメディア革命」²⁷

て進化したメディア革命である。

1900 年をメルクマールの年として人類の意識生活がメディア・テクノロジーの無意識をベースに成立するようになる。フリードリヒ・キッターが「書き込みシステム 1900」と呼んだ時代の区切り（エポック）である²⁶。

20 世紀を横断するアナログ・デジタルの二つのメディア革命と、記号論および周縁諸学のパラダイムシフトをテクノロジーの変化、産業・社会・文化の変化と相関させるかたちで示したのが「石田の年表」[図 11] である。これを私は教育ツールとして教室でしばしば使った。

2.4 メディアの世紀と記号論

ソシュールとパースを祖とする二〇世紀の記

号論を、私は「現代記号論」と呼ぶことにした。ニエップスの写真を初めとして、ベルの電話、エジソンのフォノグラフ、1895 年のリュミエール兄弟による映画の発明にいたるまで 19 世紀をとおしてアナログメディア技術が発明され、20 世紀にはラジオ、テレビ、インターネットの遠隔テクノロジーの発達によって人間文明を書き換えていくようになった。1950 年に次の区切りがやってくる。シャノン・モデルの提唱 (1948)、ノルベルト・ウィーナーのサイバネティクス (1949)、フォンノイマン型計算機 (ENIAC 1945) というように 1950 年を境目として 20 世紀後半に進んでいく第二のメディア革命が「デジタル革命」である。

号論を、私は「現代記号論」と呼ぶことにした。

それは一方において構造主義やポスト構造主義へといたる文化と社会の理論の基礎理論となり、他方において二〇世紀認知科学や論理主義の基礎となった。現代記号論の認識論的な位置をメディア史との関係で捉え返してみると、現代記号論がメディア革命と無縁ではまったくないことが分かってくる。

ソシュールの言語記号学の登場は、19世紀末から二〇世紀初頭にかけてアナログメディアが音声学・音韻論を誕生させたことと関係している。キモグラフやフォノグラフが書きとめる音声から音素・音韻という記号要素が取り出されたのである。「ことばの回路」が電話をモデルにしていることもすでに上で見たとおりである（上記1.3）。映像の記号学の発達も写真や映画といった視覚メディアの発達と平行している。

パースの記号論とメディア革命との結びつきはより複雑である。パースは19世紀の後半からカントのカテゴリー論を自身の一次性・二次性・三次性のカテゴリー論に組み替える企てをはじめた。彼の計画は記号論による論理学の包摂というロックによる記号論の計画を受け継ぐ側面をもち、類像・指標・象徴の記号の三分類はイメージや感覚質のレベルにまで論理学を拡張する企てでもある。論理式や論理計算の提案は二〇世紀の認知科学や計算機科学を準備するものでもあった。パースは「アメリカのカント」とはカール・オットー・アーペルの表現²⁸だが、私は授業ではパースはエジソンの世紀のアメリカのカントだと繰り返してきた。

記号論の認識論は、そのように、二〇世紀のメディア技術と強い相関関係にあり、まさにメディアの世紀における意味世界を理解するべく登場してきた一般学なのである。それが、冒頭に引いたソシュールによる「社会のなかにおける記号の生活を研究するやひとつの学」の提唱の狙いであり、「それはまだ存在しないのであるから、どんなものになるかはわからない；しかしそれは存在すべき権利を有し、その位置はあらかじめ決定されている。」という確信に満ちた投企の意味である。

しかし、「石田の年表」に示したように、二〇世紀のメディア革命のうちアナログ革命に応えるように登場した現代記号論は、二〇世紀後半をとおして進行したデジタル革命に適応しうるヴァージョンアップを求められている。そのデジタル革命は、ロック、ライブニッツの時代のバロック記号論の延長上で実現したコンピュータの革命である。であるとすれば、二一世紀の記号論はバロック記号論の原点に立ち戻りつつ新たに生まれ変わる必要があるというのが、私が描いてきた理論戦略である。情報コミュニケーションテクノロジーにすべてが結ばれ、人の経験と思考が機械にトレースされデータ化されプログラム化される時代の記号論を「情報記号論」と呼ぶことにしたのである。この理論的更新の企ては、別のやり方で記号学を提唱したソシュールの身ぶりを繰り返すことであり、二一世紀において、情報記号論は、存在すべき権利を有し、その位置はあらかじめ決定されていると考えられるのである。

2.5 記号の正逆ピラミッド

情報記号論が扱うメディアのインターフェイスをパース記号論のアイコン（類像）・インデックス（指標）・シンボル（象徴）の三分類をもとに図式化したのが「記号の正逆ピラミッド」である。

ダニエル・ブーニユーがパースの記号論を組み替えて提示した「記号のピラミッド」の図式²⁹をさらに発展させて、その下部構造に「記号の逆ピラミッド」を加えることで、メディア・コミュニケーションにおける〈記号過程〉とメディア・テクノロジーによる〈情報処理〉のインターフェイスを概念化する記号図式である〔図 12〕³⁰。

アナログ・メディアとの界面においては、記号の痕跡は、信号化される。アナログ信号は、さらに、デジタル変換され数値化され、さらにプログラムによる計算化・アルゴリズム化のプロセスへと向かう。〈記号過程〉の痕跡は、機械によって〈情報処理〉されるようになる。

「記号の逆ピラミッド」の部分が、20世紀以後のメディア文明の「記号の生活」を支えるよ

うになった。

人間の心（mind）は、身体（body）のレベルで情報処理（information processing）のプロセスと接する生活を営むようになった。コンピュータとの界面（インタフェース）で、人間の心（mind）と機械の計算（computation）が向き合うようになった世界である。上（I.2）に述べた、人間がセミオーシス（記号過程）しているあいだに、マシンは情報処理している生活である。この図は、そのように「情報記号論」の基本図式として機能するのである。

この図式を使って、機械による情報処理のプロセスをマッピングすることができるばかりでなく、メディア・インターフェイスにおける、精神・身体・機械の関係（左辺矢印）、文字・像／痕跡・数字・式という痕跡技術との対応（右辺矢印）を示すことができる。

この図式は、さらに、知の見取り図をも与えるのであって、記号の正ピラミッドの上位には、ことばと論理の知、中位には、イメージの知、下位には、現象と痕跡の知、逆ピラミッドの情報処理のプロセスには、物理信号、二項数値化とアルゴリズム計算の知をマップすることができる。下部構造をなす逆ピラミッドの機械化のプロセス（アナログ信号からデジタル信号、プログラム・アルゴリズム化へと向かう、メディア・テクノロジーの進化）の進行が、上部構造の記号のピラミッドで起こる知の組み替え（言語学、記号論、メディア論、現象学、一般文字学の台頭と、論理学の数学化）と平行して進むことも、この記号図式から理解されるはずである。

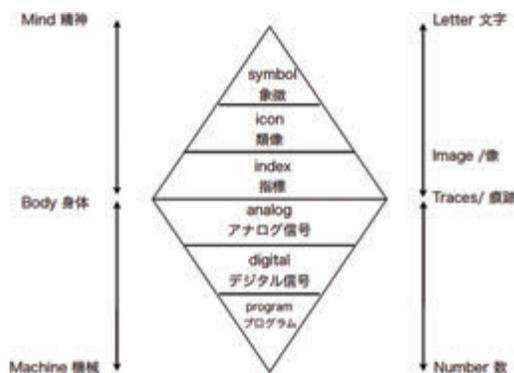


図 12. 「記号の正逆ピラミッド」

3 新しい〈記号の学〉の探究

2009年度から「新しい〈記号の学〉」をテーマに、二〇世紀以後の「人間の学」のメディア論的基礎を問い直し、情報記号論の領域を探る作業を行った³¹。そこで扱われた問題系の概略を記しておこう。私自身はこの試みを、カント、マルクスのいう批判の延長上で意味批判として

3.1 「技術的無意識」の変容

キットラーのいう「書き込みシステム 1900」は人間の感覚知覚、時間、運動、意識と無意識、言語、論理の成立条件を根本的に書き換えた。フーコーが『言葉と物』で「経験的-超越論的二重体」としての〈人間〉の消滅を予告したエピステーメの転換ともそれは対応している³²。

写真はヒトの意識の閾値以下で像を撮り、人間は視えなかった瞬間の像をもとに思い出の意識をつくる。映画の毎秒 24 コマの静止画像の流れの一コマコマを認知できないので、動きを見てとる運動視の意識が生みだされる。フォノグラフが記録した音波を物理的に聴くことができないから、意味を持った音声や物音が人間には聞こえる。見えないから見える、聞こえないから聞こえる、意識できないから意識される。メディアの世紀においては、テクノロジーの文字の無意識が人間の意識の超越論的な条件

3.2 「リビドー経済」批判

20世紀前半にはメディア・テクノロジーを基盤に大衆の意識が産業的に生産されるようになった。そのような意識の産業化を批判したのがアドルノ・ホルクハイマーによる「文化産業」

理論化してきた。記号とは意味経験の形式であり、意味は超越論的に - パース記号論の用語でいえば解釈作用の無限のセミオーシスをとおして - しか扱えないというのが、ソーシャルやパースの現代記号論においても、そして、新しい〈記号の学〉においても前提である。

となった。これがメディア記号論のエピステモロジックな位置である。

しかし二〇世紀後半のデジタル革命によってその技術的無意識のあり方が変容する。テクノロジーの文字が数字となり計算論的無意識 - the computational unconscious - の問いが浮上する。

メディアはヒトに密着して感覚チャンネルが多様化し、デジタル化によりサイバネティクス化・再帰化する。記号の正逆ピラミッド図式の逆ピラミッド部分の技術進化によってメディア自体が記憶し計算し確率論的に予測するようになる。二一世紀にはコンピュータが生普遍的な無意識となる「記号の生活」を人びとが生き始めているのである。「カメラをもった人」の無意識から、「計算機をもった人」の無意識への変容と私はこの変化を表現した³³。

論だった³⁴。アドルノ・ホルクハイマーはカントの図式論を援用することで「大衆欺瞞としての啓蒙」による意識の産業的図式化を批判した。

二〇世紀のアメリカ型資本主義は、生産サイドにおけるイノベーションとしての1)フレデリック・テイラーによる「科学的管理法」と2)テイラーシステムの産業的実装としてのフォーディズム、消費サイドにおけるイノベーションとしての3)ハリウッドという「夢の工場」(Dream factory)、そして4)フロイトの甥エドワード・バーネイズが体系化したマーケティングを柱とした。文化産業批判はこの3)と4)の柱に関わっていた³⁵。

二〇世紀の資本主義批判には、マルクスの経済学批判とフロイトのリビドー経済論を組み合わせる理論が求められた。マルクス主義のサイドからそれに応えたのがフランクフルト学派だった。

他方で、第二次世界大戦後の資本主義世界が消費社会への爛熟を迎えたところに構造主義・ポスト構造主義の批判パラダイムをもたらしたのが現代記号論だった。ボードリヤールの『記号の政治経済学批判』³⁶やドゥルーズ・ガタリの『資本主義と分裂症』³⁷がそれを表している。日本における記号論の受容が1980年代から

3.3 「心の補助具」と「記号接地」

「フロイトへの回帰」をテーマにフロイトの「心的装置」論の再検討を入り口にして、「心の補助具」とヒトの「心」の関係を問うセッションを数年間続けた。メディア・インタフェースの問題や心脳問題の議論と結びつくテーマである。

ソシュール、フロイト、フッサールらの仕事は、メディアを人間の心のモデルを書くための文字としているところに特徴がある。そのモデ

1990年代のいわゆる「バブル経済期」に集中したこともそれを証している³⁸。

二一世紀の情報記号論には、デジタル・メディア時代の情報資本主義の批判を可能にする理論パラダイムの更新が求められている。情報資本主義は「注意力の経済」(ハーバート・サイモン)³⁹の性格を強めているが、その原因は「記号の正逆ピラミッド」図式で示したような、メディアのマトリクス化・サイバネティクス化・アルゴリズム化である。インターフェイスのリアルタイム常態化(「24/7の資本主義」⁴⁰)、身体化、接触型化について体系的な理論をつくることも情報記号論の役割となる。二〇世紀のような欲望の同一化モデルによるリビドー論ではなく、モジュール化、ハイパーコントロール型の欲動理論、統計学的な情動のコントロール理論へとリビドー経済批判を転換させる新しい批判パラダイムである。それは記号と情報のインターフェイスの深化を理論化し、リビドーとテクノロジーが絡み合う現代資本主義の批判のための視座を提供することである。

ルはフロイトにおいて「心の装置」と呼ばれた。**心はメディアの形をしている**、というのは心がテクノロジーの文字で書かれる時代に必然的な認識論的メタファーなのである。

フロイトにおいては、さらに、**心は脳のかたちをしている**という、フロイトの第二局所論が示す脳神経科学的なメタファーとも心のモデル化は重なっている[図13]⁴¹。19世紀後半以後、メディア・テクノロジーの発達とニューロンが

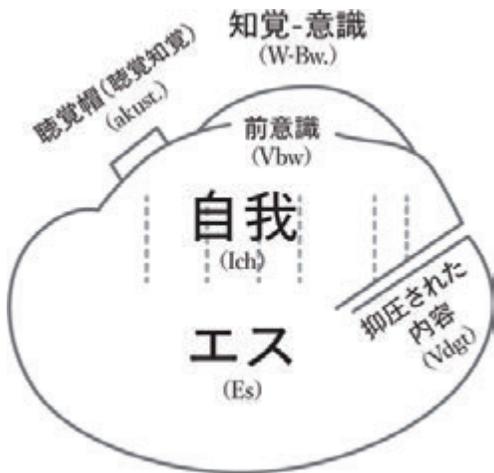


図 13. フロイト第二局所論

発見され脳の機能中枢が発見されていく過程とは同時に進行する。メディア・テクノロジーと脳神経科学のこうした平行関係のなかで、心を理論化する認識の配置は、その後の二〇世紀後半の認知科学から人工知能まで継続しているといえる。

脳とメディアが出会うとき、心の問題は、こうした知と技術のインターフェイスにおいて理論化される。フロイト以降の二〇世紀思想の主体パラダイムは基本的にこの構図のなかで描かれてきた。

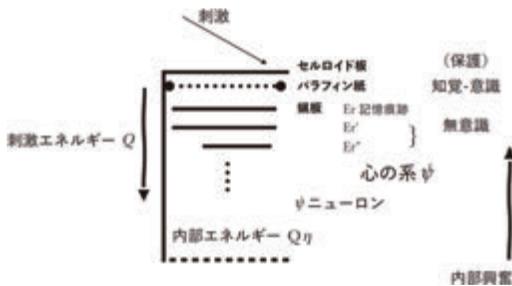


図 14. 「不思議メモ帳」と「心の装置」

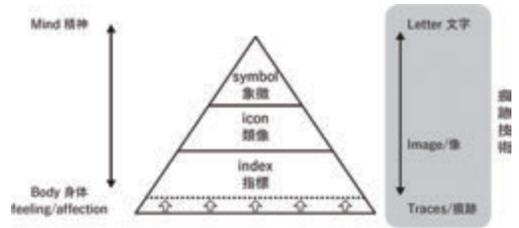


図 15. 「記号の正逆ピラミッド」と「記号接地問題」

フロイトの論文「不思議のメモ帳 についての覚え書き」で取り上げられた筆記用具 Wunderblock がフロイト局所論の図と近似していたように [図 14]⁴²、マッキントッシュ iPad のようなメディア端末はヒトの「心の装置」とますます相似を深めつつある。

心の装置と心の補助具が一对一で対応する日常生活へと人びとの生活は移行しているのである。

メディア・インターフェイスとの関係がこのように密着していくと何が起こるのか。心の補助具が心と同形化してアヴァター化し、人間の心とマシンとの境界の画定が焦点化してくる。記憶と外在化されたメモリー、リアルとヴァーチャル、意識化とデータ化、等の原理的対比が逆にクロースアップされてくる。情報処理の論理と記号過程の論理が記号のピラミッドのボトムの部分で認識論的な突き合わせを求められるようになる。パース記号論のいう「基底」や「感覚質 (クオリア)」、フッサール現象学のいう「意識流」や「時間性」、デリダ文字学のいう「原エクリチュール」や「差延」などの理論的射程が、人工知能の「深層学習」や「記号接地問題」等との対比であらためて問われるようになるのである [図 15]⁴³。

3.4 コミュニケーション批判

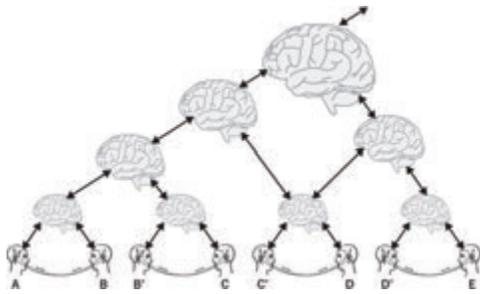


図 16. ソシユールの「ラング」と「集団脳」

アナログメディア時代のテレ・テクノロジーは、電話線で結ばれるような一対一（あるいは一対多）のコミュニケーションを基本としていた。

上述したようにソシユールはことばのコミュニケーションを電話モデルで理解したが、それは同時に脳に中枢をもつ記号のお互いの脳への相互記入という集団脳の成長の図式であったと

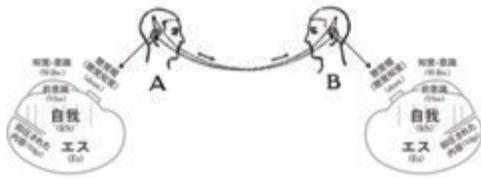


図 17. ソシユール「ことばの回路」とフロイト「心の装置」

3.5 批評のプラットフォーム

テクノロジーの文字で書かれるメディア現象を批判・批評するとは具体的にはどのようなことなのだろうか。

私たちは上で (2.3) メディア現象の技術的

も理解できる [図 16] ⁴⁴。

ソシユールの図式にフロイトの脳の局所論モデルを組み合わせると、無意識のコミュニケーションという問題の次元が現れる [図 17] ⁴⁵。二〇世紀のメディアコミュニケーションはアナログメディアにおいてもすでに集団心理学的な問題次元を伴っていたのである。

ハイパーリンクによる、デジタルメディアのコミュニケーションでは、多対多のネットワーク型コミュニケーションへと移行した。ソーシャルメディアのようにアルゴリズムがコミュニケーションを自動化することにより、断片的なメッセージが指数級数的に増殖する。メディア・テクノロジーの高度化により接触性・即応性が増し、身体の深いレベルにまでコミュニケーションが侵入して、無意識のレベルでの模倣と感染のコミュニケーションが技術的にサポートされるようになった。

このようなテレ・テクノロジーのデジタル化と普遍化もまた情報記号論の研究アジェンダである。「情動論的転回」が主張され、タルドのミクロ社会学やドゥルーズ・ガタリの「言表行為の集団的連鎖」が再評価され、あるいはルネ・ジラルールの模倣理論が参照される背景にはこのようなテレ・テクノロジーのデジタル転回の理論化という課題が浮かび上がる ⁴⁶。

無意識について指摘した。映画やフォノグラフ、テレビジョンが生み出すメディア現象はフッサール現象学のいう「時間対象」として成立している。人間の認知能力に対して、それら



図 18. 「テレビ分析の知恵の樹」

の時間対象は人間の認知を超えたスピードで流れるので私たちはそれを生みだしている仕組み（映画の一コマ一コマの分節）を識別できず、どのように意味が生みだされているのかをつぶさに検証することができない。他方で、メディア現象が生みだす意識は膨大で人間の記憶能力を超えアーカイヴがなければ過去の経験を捉え返すことができない。アナログ・メディアの時代には、映画を見るという経験は、映画ライブラリーから当該フィルムを取り出し映画のフィルムを検証するというような膨大な努力を払う以外に記憶と印象批評しか方法がなかった。

しかし、現在のデジタル・メディアの時代に

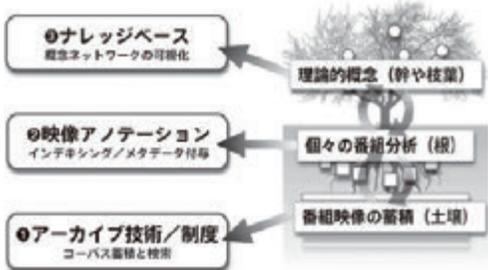


図 19. 「批評プラットフォーム Critical Plateau」

は、時間対象にメタデータを付けコメントする批評行為は容易である。コンピュータに十分なメモリがあればアーカイブ化も容易であり、時間対象についての批評ははるかに容易である。

こうした考え方に立って、1) テレビ番組デジタル・アーカイブ、2) ハイパーメディア型理論事典「テレビ分析の知恵の樹」、3) 映像インデキシングとメタデータ付与、3) 知識共有ネットワークからなる、「批評プラットフォーム Critical Plateau」を制作する科研費研究プロジェクトを石田英敬研究室では三期(2005～2013)にわたって行った〔図 18,19〕⁴⁷。文学テキストの批評が、ライブラリーの成立、対象テキストと批評のメタ言語との結合、引用、辞書知識の参照、ピアレビューによる検証と知識共有という批評の手続きからなるように、メディア・テキストを意味批判のメタ言語プラットフォームに載せる研究である⁴⁸。

また、その延長上で、新図書館計画のためのハイブリッド・リーディング環境を構想したりもした⁴⁹。電子書籍の端末を媒介に書物の知とメディアの知を往還させるハイブリッド環境をデザインするプロジェクトである。いずれも、デジタル環境をベースに、メディア現象を文字ベースの知と結びつけて批評環境を生み出すプロジェクトである。これらは人文学の知とデジタルメディア環境を結びつけるデジタル・ヒューマニティーズの追求と位置づけられる。

以上の批評プラットフォームやハイブリッド・リーディング環境の設計は、メディアのテクノロジーの文字が生み出す意味・意識の経験－セミオーシス－をデジタルなテクノロジーの文字を活用して批評・批判することを可能にす

る。

だが他方で上記3.4であげたようなテレテクノロジーがハイパーリンクで結びついていくようなメディア現象や、アルゴリズムのセミオーシス、ビッグデータと呼ばれるような大量なデータの集積がどのような意味の星雲を形成し

4. 文明の療法としてのメディア記号論

4.1 「メディア文明のなかの居心地悪さ」

私はメディア文明についての所見をもとめられるたびに、フロイトの『文化の中の居心地悪さ *Das Unbehagen in der Kultur*』の一節を引用して「メディア文明のなかの居心地悪さ」を語ってきた⁵⁰。

人間はいつてみれば一種の「補助具をつけた神」、補助器官をまよえばたしかに目覚ましいが、人間とともに成長したわけではなく、しばしば危難を人間にあたえる補助器具をまとった神となった。⁵¹

現在では、人類の過半数がインターネットに接続しモバイル端末を携行して日々生活している⁵²。情報通信機器という補助具をまよえば世界中のどこからいつでも遍在的コミュニケーションに参加することができる。人間はたしかに「補助具をつけた神」に近づいたといえよう。しかし、それらは「人間とともに成長したわけではなく、しばしば危難を人間に与える補助具」である⁵³。

メディア・テクノロジーには、人間の意識がテクノロジーの無意識によって生みだされるこ

ているのかを批評・批判することを可能にするわけではない。今後のデジタル・メディアの批評・批判はそのような現象を扱いうるデータ解析や統計学的視点をも組み込んだ方向へと研究方向を拡げていくことが考えられる。

とにともなう、人間にとっての抜きがたい不安 – まさしくフロイトのいう「居心地悪さ *das Unbehagen*」 – がつきまとっている。人間の意識の自律的コントロールを外れたところで、テクノロジーの無意識が社会を結びつけ集団的な意識/無意識をつくり出している。二十世紀前半のアナログ革命にいち早く適応して台頭した政治勢力はファシズムやナチズムだった。近年のソーシャルメディアをめぐる様々な問題や世界的なポピュリズムの台頭を見るにつけ、デジタル革命がもたらしつつある変化もまた同じような深刻な「危難」をもたらしつつあるようだ。

日常の生においてもまた、メディアは私たちの精神の自由を脅かしつつある。最終年度の今年、情報記号論講義で、私は次のような中間レポート出題をおこなった。

ジャン・ジャック・ルソーは『社会契約論』の緒言で、「人間は生まれながらにして自由である、しかし、いたるところで鎖に繋がれている（*« L'homme est né libre et partout il est dans les fers. »*）」と述べていた（Jean-Jacques ROUSSEAU, *Du contrat*

social 1762)。

しかるに、人類の現状を鑑みるに、「人間は生まれながらにして自由である。しかし、いたるところでネットに繋がれている」と

言えるのではないか。この情報文明を私たちはどう考えるべきか？ どう生きるべきか？ どのような知が求められると思うか？ 自由に論述せよ。

4.2 「情報」のニヒリズム

「砂漠が広がる、災いなるかな内に砂漠を秘めたる者は！ Die Wüste wächst： Weh dem, der Wüsten birgt!」とはニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』の一節である⁵⁴。

この引用で「砂漠」は虚無あるいはニヒリズムを差している。ニーチェが十九世紀末に診断したニヒリズムは、加速する産業社会における情報と無関係ではない。

19世紀には1832年創設のHavas通信社（現AFP）を嚆矢としてReuterなどの通信社により、ヨーロッパの投機市場のために、最初は伝書鳩のリレーによって、つぎには電信電報の伝達ネットワークを通じて、世界中から「情報」が届けられ、輪転機が「鑄流し記事」として「ニュース」を大量に印刷するようになる。世界はこのころからメディアによる「同時性」のコミュニケーションに結ばれてゆき、世界からもたらされる情報の増大によって、ヨーロッパ市場の株価が大きく変動する時代に突入した。19世紀前半からすでに世界は「情報資本主義」へと進んで来たのである。

産業化していく世界におけるエントロピーの増大に比例して、世界中に虚無が蔓延してくる。ここでいう「エントロピー」には二つの意味がある。資源の搾取・加工・流通・消費に関わる熱力学法則のいうエントロピーがそのひとつ。もうひとつは情報の拡散に関わる情報量と

してのエントロピー（クロード・シャノンの情報理論のいう「情報量」）である。そして、その両者は深く結びついている。

市場が発達し産業革命が進行しエネルギー消費が増大するほどに、地球環境は破壊されてエントロピーは増大し、文字通り砂漠が広がる。他方で、市場に世界からもたらされる情報が増大すればするほど情報エントロピーは増大し虚無が広がる。すべてが情報化していくと、人間文化の意味は短期間に消費され、ニュースは翌日には無に帰し無価値になる。その果ての「ポスト・トゥルース」とはニーチェが診断したニヒリズムの時代なのである。

ヴァレリーは「石油や小麦や金」と同じ意味での「精神」の市場価値の「下落」を語ったが⁵⁵、彼が警告したのも、情報エントロピーが増大し続けて、世界が虚無にのみ込まれていく「精神の危機」である⁵⁶。情報が氾濫すると言葉の価値は短期的に変動し、心に砂漠が広がる。

私がかつてパリ大学で博士論文を献げたヨーロッパ世紀末の詩人マラルメは情報エントロピーの増大に抗して、「骰子の一擲は偶然を廃さず UN COUP DE DÉS JAMAIS N'ABOLIRA LE HASARD」という〈反-新聞〉の〈詩〉を制作した⁵⁷。「世界は一冊の美しい書物に到達する Le monde est fait pour aboutir à un beau

livre.」として、一冊の書物を世界の虚無に対置しようと企てた。詩とは、情報エントロピー

4.3 〈補助具をつけた人間〉のコギト

ヒトと機械、意味と情報との界面に「情報記号論」の問題領域を私は設定した、機械がヒトの意識下で意識をつくりはじめると〈人間〉がゆらぐ。〈無意識〉が露呈する。二十世紀の人間科学はその断層の上に**無意識の知**として生まれた。〈記号〉の問いはこの**人間のゆらぎ**に発している。

記号はテクノロジーの文字によって書かれ、ヒトによって事後的に認知される意味および意識の要因である。二〇世紀以後、人間にとって意味・意識はつねにすでにテクノロジーの文字に遅れてやってくるようになったのである。

この遅れはしかし、意味の知/意識の知の無効化を意味しない。そうではなく、むしろ意味の知/意識の知の根本的な更新 - 人文知の更新 - を私たちに求めて記号を送ってきているのである。人文学者としての私が「情報記号論」によって応えようとしたのは、そのような記号論の要請だったと私は考えているのである。

その記号論の問いは、例えば、次のように〈補助具をつけた人間〉の問いを問うときにすぐさま露呈する - 私がカメラのシャッターを切り写真をとるとき、〈写真を撮る私〉とは〈誰〉なのか？

脳神経学的な知見と自由意志との関係を問題提起したのものとして、「リベットの実験」が有名だ⁵⁹。〈私〉が写真家であるとして、写真を撮る〈私〉が、〈自由意志〉によって意識的に〈い

の増大に抗する「マクスウェルの魔」のような企てなのである⁵⁸。

ま〉シャッターを切ったと考えるとしよう。そのときの時間プロセスは、リベットの実験の論争点をふまえれば次のようになる。

I 〈私〉がシャッターを切る実際の指の〈行為〉の〈いま〉よりも八〇〇ミリ秒前に脳神経でシャッターを切る〈準備電位〉が始まっている。

II 〈私〉が「シャッターを切る〈意欲〉を持ったと〈私〉が事後的に意識する〈時点〉は、シャッターを押す指の動きの200ミリ秒前である。

III 脳活動の電位変化の観測からみれば、〈私〉がシャッターを押す〈意欲〉を持つのは、じっさいにはそれよりも遅く、指の動きの150ミリ秒前である。

IV そして、シャッターが切られる。

リベットの実験が教えてくれる、シャッターを切るという決断と行為をめぐる脳神経学的な時間プロセスはだいたい以上ようになる。

しかし、写真のシャッターチャンスの場合、時間と意識の問題はそれだけにはとどまらない。写真機のシャッターはヒトの意識の知覚閾の下で時間幅で時間を切り取るので、メディアの「技術的無意識」と呼んだ問題系が介在することになる。ヒトは写真機が撮った〈いま〉の瞬間を、事後的にしか視ることができない。「写真は誰がいつ撮ったのか？」という、極めて複雑な問いには、1) 脳神経学的な無意識と時間性、2) 技術的な無意識と時間性、さらに、3) 撮った瞬間を視ることは出来なかったが、撮ら

れた写真を前に、事後的に「〈私〉が撮った」という事後的な時間意識においてその像を捉え返す、写真を撮る〈私＝主体〉が総合されるという、複雑な時間経験が介在していることになる。

これが「カメラをもった人」という〈補助具をつけた人間〉の cogito - Je photographie, donc je suis. 我撮影ス、故ニ我アリ - をめぐる問題状況である。

この複雑なオペレーションを通して、写真技術 photography という〈テクノロジーの文字〉を書く「自由な」表現主体と、記号表現としての「写真 photograph」が文化的に成立するのである。メディア時代の表現とはそのような神経学的・技術的・文化的な人間の営為なのである。

「コンピュータをもった人」もまた「カメラをもった人」と同じようなテクノロジーと無意識の問いを前にしている。しかし、彼女／彼の判断力の行使にはさらに「計算論的無意識」の問題が加わっている。インターネットのサイトを訪れるたびにあなたはそのサイトの情報オントロジーに招き入れられる。あなたのブラウザの cookies に応じてあなたに向けたサービスが提案される。あなたがネットをブラウズしている間に表示されるターゲット広告は、あなたのプロフィールに応じて、クリックの0.1秒の間に競売にかけられて競り落とされて表示されている。そのように、アルゴリズムによってあなたは Web メディアのセミオーシスのなかに編入されるようになっていく。デジタル革命以後のメディア経験においては、人間の意識下の時間幅でアルゴリズム計算が働くようになっていく。

たのである。

では、コンピュータに補助されて〈思考スル cogitatio〉とはいったい〈誰〉の〈私ハ考エル cogito〉なのか？いったい誰がいつどのように検索し推論し知識を得て思考しているのか。〈コンピュータをもった人〉の〈理性〉には、それまでにはなかった計算論的・確率論的な技術的無意識の次元が新たに加わったのである。あなたがコンピュータをもった人としての〈思考〉をとおして〈自己〉でありつづけるためには、コンピュータのメモリーに支援され、検索アルゴリズムに誘導されて実行される自分自身の思考プロセスをも捉え返しうる、〈自己のプラットフォーム〉を形成しえていることが不可欠なのである。

〈補助具をつけた人間〉の自律と自由を思考しうる知のみが、二〇世紀以降のメディア文明における存在の耐えられない居心地悪さを思考しえて、ついに〈人間の知〉を回復することができる。それこそが、「情報記号論」講義の深い動機となった「情報と人間」の問いの核心であり、一九年間の講義がめざして進んできた新しい思考の在り方であったように私には今思えている。

機会あるごとに、私は2000年に始まった情報学環の企てを航海譚に喩えた⁶⁰。全学から多様な知・多様な表現・多様な技をもつ乗組員を募って船を組み、新たな真理の「金羊毛」を持ち帰るアルゴナウタイの冒険譚。あるいは、それは知のオデュッセイアともいうべきかもしれない。ホメロスにおいて、オデュッセイウスの呼び名は、polymetis (多くの知恵の人)、polytropos (多くの表現の人)、polymechanos (多

くのデバイスの人)である。

学際の知 polymetis、意味の知 polytropos、テクノロジーの知 polymechnos…。私の情報記号論講義は、少しでも、知のオデュッセイア

への呼びかけに応えることができただろうか。

次の冒険のサイクルは、新たなアルゴナウタイの勲 (gestes) にかかっている。

註

- ¹ Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, édition critique par Rudolf Engler, tome 1, éd. Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1989, p.48 石田による訳
- ² 東京大学大学院情報学環・学際情報学府設立準備シンポジウム 2000年3月5日 山上会館ホール
- ³ 石田英敬「言語態とは何か」、山中桂一・石田英敬編『シリーズ言語態 1 言語態の問い』、東京大学出版会 東京 2001、pp.1-7
- ⁴ *La formation de la poésie de Mallarmé : des oeuvres de jeunesse à "Igitur"*, thèse de doctorat présentée à l'Université de Paris-X-Nanterre, année universitaire 1987-1988, soutenue en janvier 1989 avec mention "très honorable à l'unanimité", devant le jury composé de Ms.et Mme les professeurs Nicole Bouléstreau, Michel Arrivé, Henri Meschonnic, Jean-Claude Matthieu, 1,000 p., éditée sous forme de microfiche (A.N.R.T, Université de Lille, 89,13,08152/89)
- ⁵ 『ミシェル・フーコー思考集成』(蓮実/渡辺監修)、責任編集 石田英敬・小林康夫・松浦寿輝 全10巻 筑摩書房 東京 1998-2001年
- ⁶ « Genèse et structure du champ littéraire », seminar with Pierre Bourdieu, Univ. of Tokyo, with PierreBourdieu, Hasumi Shiguéhiko, Komori Yoichi, Kobayashi Yasuo Nov 11.1994 (「文学場の生成と構造」『文学』(岩波書店) 1994年冬号、pp.54-65として刊行)
- ⁷ « Le Colloque Franco-Japonais sur la Médiologie », Univ. of Tokyo, with Régis Debray, Bernard Stiegler, Daniel Bougnoux, Masachi Osawa, Osamu Nishitani, Yoichi Komori, Shūnya Yoshimi Nov11 1995
- ⁸ この講義については、「詩の言語と数の言語 ～『社会のポイエーシス講義』への補論～」『言語・情報・テキスト』vol 25-1.2018.12.20 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻 [編] pp.1-14 を参照されたい。
- ⁹ 2003年度の講義は東大OCWで公開されている。https://ocw.u-tokyo.ac.jp/course_11301/ (2019.01.31.20:00 JST アクセス)。
- ¹⁰ コンピュータをメディアととらえてコンピュータに媒介された記号の生活を研究する記号論の研究はコンピュータ記号論、サイバー記号論などの呼称で二〇世紀末から研究が進められてきた。その系譜は、ジェイ・デイヴィッド・ボルターの『ライティング・スペース』(黒崎政男、伊古田理 他訳 産業図書 東京 1994 原書初版 1990)あたりを出発点にして記号論やポスト構造主義を援用しつつ発展し、ANDERSEN, Bøgh Peter の *A Theory of computer semiotics* (Cambridge University Press Cambridge 1991) がコンピュータをメディアとして扱う記号論としてその方向を初期に明確に打ち出した代表的著作である。人とマシンのインタフェースに情報記号論の問いを設定しようという石田の情報記号論はこうした系譜から出発している。
- ¹¹ Ferdinand de Saussure *Cours de linguistique générale*, éd. critique par Tullio de Mauro Payot Paris, 1972, p.27
- ¹² 同書 p.28
- ¹³ 同書 pp.28-29
- ¹⁴ Claude E. Shannon and Warren Weaver *The Mathematical Theory of Communication*, The University of Illinois Press Chicago1963, p. 31; 邦訳 クロード・E・シャノン、ワレン・ウィーバー『通信の数学的理論』植松智彦訳 ちくま学芸文庫 東京 2009 p. 22
- ¹⁵ 石田英敬『記号の知/メディアの知 - 日常生活批判のためのレッスン』、東京大学出版会 東京 2003、第4章「メディアとコミュニケーションについてのレッスン」を参照。
- ¹⁶ 東京大学教養学部前期課程総合科目「記号論」
- ¹⁷ 東京大学大学院学際情報学府「文化人間情報学」
- ¹⁸ 『記号の知/メディアの知』前掲書 第4章3「メディアの文明圏」を参照。
- ¹⁹ 石田英敬編『知のデジタル・シフト - 誰が知を支配するのか?』弘文堂 東京 2006 第一章「<人間の知>と<情報の知> : 人間の学としての情報学を求めて」(pp.16-49)を参照。
- ²⁰ ベルナルド・スティグレール『技術と時間 1 エピメテウスの過失』石田英敬監修 西兼志訳 法政大学出版局 東京 2009を参照。

- ²¹ アンドレ・ルロワ＝グーラン『身ぶりと言葉』 荒木亨訳 ちくま学芸文庫 東京 2012
- ²² 石田 英敬 (編集), 吉見 俊哉 (編集), マイク・フェザーストーン (編集)『デジタル・スタディーズ2 メディア表象』 東京大学出版会 東京 2015 第1章「新ライブニッツ派記号論のために --『中国自然神学論』再論」(pp.13-44) を参照。
- ²³ マーシャル マクルーハン『グーテンベルクの銀河系—活字人間の形成』 森常治 訳 みすず書房 東京 1986
- ²⁴ Jacques Derrida *De la grammatologie*, éd. du Seuil Paris 1967 p.74
- ²⁵ Sylvain Auroux *La révolution technologique de la grammatisation* Mardaga Liège 1994 を参照。
- ²⁶ Kittler, Friedrich, *Aufschreibesysteme 1800/ 1900*. Fink, Munich, 1985. (English edition : *Discourse Networks 1800 / 1900*, with a foreword by David E. Wellbery, Stanford University Press Stanford 1990)
- ²⁷ 「石田の年表」画像等権利関係は以下の通り：
 [*]：著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要がある。
 (CC)：著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用可。
 (PD)：パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できる〔URL アクセスはいずれも 20190131 12:00 JST〕：
 1 ライブニッツ肖像 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Gottfried_Wilhelm_Leibniz_Bernhard_Christoph_Francke.jpg
 2 ロック肖像 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:John_Locke.jpg
 3 ライブニッツ 計算機 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Leibniz_Stepped_Reckoner_mechanism.png
 4 ライブニッツ 結合法 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Fotothek_df_tg_0005486_Mathematik_%5E_Kombinatorik.jpg
 5 ニエップス写真 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:View_from_the_Window_at_Le_Gras,_Joseph_Nicéphore_Niépce.jpg
 6 リュミエール兄弟 「工場の出口」 (PD)
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Sortieusinelumiere.jpg>
 7 ソシユール肖像 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ferdinand_de_Saussure.jpg
 8 パース肖像 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Charles_Sanders_Peirce.jpg
 9 高柳健次郎 テレビ実験「イ」 (*)
 10 米ラジオ民間放送 (PD)
https://en.wikipedia.org/wiki/Brox_Sisters#/media/File:BroxSistersRadioTeddyBear.jpg
 11 ENIAC コンピュータ (PD)
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Eniac.jpg>
 12 米テレビ放送開始 (PD)
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:OTVbelweder-front.jpg>
 13 Macintosh 128K (CC)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Macintosh_128k_transparency.png
 14 WorldWideWeb (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:WorldWideWeb_FSF_GNU.png
 15 第三次人工知能ブーム (CC)
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:ArtificialFictionBrain.png>
- ²⁸ カール＝オットー・アーペル『哲学の変換』、磯江景孜訳、二玄社 東京 1986 p.68
 Karl-Otto Apel *Towards a Transformation of Philosophy*. Routledge & Kegan Paul Boston 1980, p.80
- ²⁹ ダニエル・ブーニュー『コミュニケーション学講義——メディアオロジーから情報社会へ』、西兼志訳、書籍工房早山 東京、2010, p.60
- ³⁰ 石田英敬『大人のためのメディア論講義』ちくま新書 筑摩書房 東京 2016, p.129

- ³¹ この探究については、その成果を『一般記号学講義 1 新しい〈記号の学〉』として東京大学出版会より刊行予定である。
- ³² Michel Foucault *Les mots et les choses* Gallimard Paris 1966, chap. IX « l'homme et ses doubles » 邦訳 ミシェル・フーコー『言葉と物』佐々木明・渡辺一民訳 新潮社 東京 1974, 第九章「人間とその分身」を参照。
- ³³ 石田英敬・東浩紀『新記号論 脳とメディアが出会うとき』ゲンロン 東京 2019、「補論」を参照。
- ³⁴ マックス・ホルクハイマー、テオドル・アドルノ『啓蒙の弁証法—哲学的断想』徳永恂訳 岩波文庫 岩波書店 東京 2007
- ³⁵ 石田英敬『大人のためのメディア論講義』前掲書 第三章「現代資本主義と文化産業」を参照。
- ³⁶ Jean Baudrillard *Pour une critique de l'économie politique du signe*, Paris Gallimard 1972 ; 邦訳 ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』今村仁司 塚原史 訳 紀伊國屋書店 東京 普及版 1995
- ³⁷ Gilles Deleuze et Félix Guattari *Le capitalisme et la schizophrénie 1 : l'Anti-Œdipe Minuit Paris 1972; Le capitalisme et la schizophrénie 2 : Mille Plateaux*, Minuit Paris 1980 ; ジル・ドゥルーズ、フェリクス・ガタリ『アンチ・オイディプス 資本主義と分裂症』上/下 宇野邦一 訳 河出文庫 河出書房新社 東京 2006 ; 『千のプラトール 資本主義と分裂症』上/下 宇野邦一 訳 河出文庫 河出書房新社 東京 2010
- ³⁸ 私自身も東京大学に移るより前の 1980 年代後半のバブル期には同志社大学で「ポストモダンの思想」や「欲望論」を講じていた。
- ³⁹ Simon, H. A. (1971) "Designing Organizations for an Information-Rich World" in : Martin Greenberger, *Computers, Communication, and the Public Interest*, Baltimore, MD : The Johns Hopkins Press, pp. 40-41
- ⁴⁰ ジョナサン・クレリー『24/7—眠らない社会』、岡田温司監訳、石谷治寛訳、NTT 出版 東京 2015 を参照。
- ⁴¹ フロイト「自我とエス」『フロイト全集 18 1922-24 年 自我とエス みずから語る』岩波書店 東京 2007 所収。図 13 は邦訳 p.20 の図にフロイト原典の略号と「聴覚帽 (akust)」の原意「聴覚知覚」を石田が補って記入したものである。
- ⁴² フロイト『「不思議のメモ帳」についての覚え書き』同書 pp.317-323。図 14 では、フロイトの論文の指摘する「不思議のメモ帳」の構造を、『夢解釈』第 7 章「夢過程の心理学」で提示される第一局所論の「心の装置」の図式（『フロイト全集 5 1900 年 夢解釈 II』岩波書店 東京 2011）および「心理学草案」（『フロイト全集 3 1859-99 年 心理学草案 遮蔽想起』岩波書店 東京 2010）で示された神経学的知見を記入して重ね合わせることで、フロイトが理論化する心の装置と不思議メモ帳という心の補助具の対応関係を示している。この対応関係について、石田英敬「〈テクノロジーの文字〉と〈心の装置〉—フロイトへの回帰」石田英敬・東浩紀 前掲書 第二講義「フロイトへの回帰」（石田英敬、吉見俊哉、マイク・フェザーストーン 編集『デジタル・スタディーズ 2 メディア表象』東京大学出版会 東京 2015 第 4 章 pp.95-131）；及び、石田英敬・東浩紀 前掲書「第 2 講義 フロイトへの回帰」を参照されたい。
- ⁴³ これらの問題について詳しくは、石田英敬・東浩紀同書「第 3 講義 書き込みの体制 2000」を参照されたい。
- ⁴⁴ 「ラング（言語システム）」の中核は脳にあると考えていたソシュールの記号コミュニケーション観を説明した図。ソシュールによる「ことばの回路」（上記 図 4）を複数化して、対話者相互の脳への記号の相互記入による、「集団脳」と「ラング」の成長として説明することができる（石田による作図）。
- ⁴⁵ ソシュールの「ことばの回路」（上記 図 4）とフロイトの第二局所論（上記 図 13）を組み合わせた図（石田による作図）。二つの図を組み合わせることによる、欲望や抑圧のコミュニケーションを説明することができる。
- ⁴⁶ 石田英敬・東浩紀 前掲書 第 3 講義を参照。
- ⁴⁷ 文科省科学研究費補助金 基盤研究 (B) 「テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究とハイパーメディア型理論事典の作成」2005 年度～2007 年度 研究代表者 石田英敬 研究分担者 吉見俊哉 水越伸
文科省科学研究費補助金 基盤研究 (B) テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究と批評プラットフォームの制作 2008 年度～2010 年度 研究代表者 石田英敬 研究分担者 吉見俊哉
文科省科学研究費補助金 基盤研究 (B) テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究とハイパー・アーカイブの制作 2011 年度～2013 年度 研究代表者 石田英敬 研究分担者 吉見俊哉 西兼志
- ⁴⁸ 「テレビ分析の〈知恵の樹〉」（石田英敬、西兼志、高畑一路、阿部卓也、中路武士）、『東京大学大学院情報学環紀要』、No.70, 2006 年 1 月、pp.3-64; 「批評プラットフォーム〈クリティカル・プラトール〉」、石田英敬・西兼志・中路武士・谷島貫太『情報学研究：東京大学大学院情報学環紀要』、No.79, 2010 年 11 月、pp.1-46 を参照。
- ⁴⁹ 石田英敬「新『人間知性新論』〈本〉の記号論とは何か」、『ハイブリッド・リーディング 新しい読書と文字学』日本記号学会編 新曜社 東京 2016、pp.82-101、を参照。
- ⁵⁰ 例えば次のシンポジウム 基調講演：“Le malaise dans la communication”, 13-14 February 2002 Komaba Le colloque international « Colloque franco-japonais autour de la Médiologie ” ;with Régis Debray, Daniel Bougnoux, Monique Sicard,

Louise Merzeau, Karine Douplitzky, Jean Marc de Biasi, Nishigaki Toru, Watanabe Moriaki, Yoshimi Shunya, Hara Hiroyuki, Ito Mamoru

- ⁵¹ 石田による訳、『フロイト全集 第二〇巻 一九二九 - 三二年——ある錯覚の未来 文化の中の居心地悪さ』高田珠樹監修 岩波書店 東京 2011,p.100 に対応。「補助具をつけた神」と訳した原語 Prothesengott (邦訳は「人工義神」と訳)について、邦訳は「義足や義歯などのように、欠損した身体器官を補う人工補装具を意味する Prothese と神を意味する Gott からなる複合語」と解説している(編注(44) 同書 p.302)。
- ⁵² “ITU releases 2018 global and regional ICT estimates For the first time, more than half of the world’s population is using the Internet “(<https://www.itu.int/en/mediacentre/Pages/2018-PR40.aspx>; 2019/01 /31 18:00 JST アクセス)。
- ⁵³ デリダヤスティグレルが言うように、メディアという補助具が示しているのはプラトンの『バイドロス』に語られた「ファルマコン」問題なのである。プラトン『バイドロス』藤沢令夫訳『プラトン全集 5 饗宴 バイドロス』岩波書店 東京 1974 参照。
- ⁵⁴ Friedrich Nietzsche *Also sprach Zarathustra* Bd.4 „Unter Töchtern der Wüste“; 『ツアラトゥストラはかく語りき』第四部 「砂漠の娘たちのもとで」石田による訳
- ⁵⁵ Paul Valéry « La liberté de l’esprit » in *Regards sur le monde actuel* Librairie Stock, Paris, 1931, p.178; 邦訳 ポール・ヴァレリー 「精神の自由」、『精神の危機』恒川邦夫訳 岩波文庫 2012 所収
- ⁵⁶ Paul Valéry « La crise de l’esprit » Paul Valéry *Œuvres*, tome 1, Ed : Pléiade, 1957, pp. 988-1014 邦訳 同書所収
- ⁵⁷ 石田英敬「詩の言語と数の言語 ～『社会のポイエーシス講義』への補論 ～」前掲を参照。
- ⁵⁸ マラルメの詩の言語とエントロピーとの関係については、サイバネティクスを援用して論じたヘーゲル学者イボリットの次の卓抜な論を参照: Jean Hyppolite « Le ‘Coup de dés’ de Stéphane Mallarmé et le message » in *Figures de la pensée philosophique* II éd. P.U.F. 1971。マラルメと偶然の問題については、最近のものとしては次の研究が秀逸である: Quentin Meillassoux *Le Nombre et la sirène : un déchiffrement du ‘Coup de dés’ de Mallarmé*, Paris Fayard 2011
- ⁵⁹ リベット実験とリベット自身の論考については、ベンジャミン・リベット『マインド・タイム 脳と意識の時間』下條信輔訳、岩波書店、2005。問題の整理として、近藤智彦「脳神経科学からの自由意志論」(信原幸弘・原朔編『脳神経倫理学の展望』勁草書房、2008、第九章)が役に立つ。ここでの整理は、この論文に負っている。
- ⁶⁰ 「思考の幹 fluctuat nec mergitur」『東京大学大学院情報学環紀要』、No.72, 2007 年 7 月, pp. iii-v; 「思考の環 Polymetis, Polytropos, Polymechanos: 知のオデュッセイアのために」『東京大学大学院情報学環紀要』、No.93, 2017 年 10 月, pp. i-iv



石田 英敬 (いしだ・ひでたか)

[生年月] 1953 年 10 月

[出身大学または最終学歴] パリ第十大学大学院 人文科学博士

[専攻領域] 記号論 メディア論

[主たる著書・論文]

『記号の知/メディアの知-日常生活批判のためのレッスン』(東京大学出版会、2003)

『大人のためのメディア論講義』(ちくま新書、2016)

『新記号論 - 脳とメディアが会おうとき』(東浩紀との共著)(ケンロン、2019)、他 多数

[所属] 大学院情報学環 (大学院総合文化研究科 兼任)

[所属学会] 日本記号学会、日本マスコミュニケーション学会

A Course in Information Semiotics: Synthesis and Perspective

Hidetaka Ishida*

I have taught the course in “Information Semiotics” since the Graduate School of Interdisciplinary Information Studies at the University of Tokyo was founded in 2000. This article is a review of nineteen-years of teaching and research in the chair “Information and Man” which I held until March 2019.

I situated information semiotics at the interface of human sciences and informatics, formulating its problematic as follows: “While people participate in semiosis, machines participate in information processing”. The origin of this epistemological interface can be illustrated by comparing Saussure’s “speech circuit (le circuit de la parole)” with Claude Shannon’s communication schema.

I inscribe information semiotics in a broader perspective for a semiotics of media. The media are part of the fundamental structure of the human being articulating three dimensions of civilization: *technique* (the hand), *cognition* (the brain) and the *social* (the face). The media involve writing (*écriture*) in the sense of grammatology and grammatization. With the end of the Gutenberg era, there has been a generalization of *technological writing* with *graph technology and tele-technology* in the 20th century. After the revolutions of the analogue and digital media, the semiotics of media studies the “life of signs in society (la vie de signes dans la société)” (Saussure) mediated by analogue and digital writing.

The axes of teaching and research of information semiotics consist in:

- (1) An epistemology of information semiotics
- (2) An analysis of the “life of signs” in the media society: criticism of the industrialization of consciousness and analysis of modern capitalism.
- (3) A methodology of criticism through the use of cognitive technologies.

* Professor, the Graduate School of Interdisciplinary Information Studies and the Graduate School of Arts and Sciences, the University of Tokyo

Key Words : Semiotics, Media Studies, Information Semiotics, Grammatology

Information semiotics addresses a problematic of civilizational and cultural therapeutics. Contemporary man lives his life on the basis of the technological unconscious, equipped with communication artifacts and in permanent connection with information networks: hence the *malaise of civilization of the prosthetic man*. Information semiotics is this prosthetic man's science for life, the knowledge of his consciousness and unconscious. The most crucial matter at stake is the autonomy and freedom of the prosthetic man who cannot *not* communicate through information and signs.

『檻の中』（1957）における単純さの追求

—和田勉と飯島正によるテレビの〈発明〉—

The Simplicity in the *Inside of a Cage* (1957) :
the “Invention” of Television by Ben Wada and Tadashi Iijima

木原 圭翔*

Keisho KIHARA

1. はじめに

NHK が本放送を開始した 1953 年から始まる日本のテレビ史において、1958-59 年というのは最初の重要な転換期とみなすことができるだろう¹。例えば、フランキー堺主演の『私は貝になりたい』（1958 年 10 月 31 日放送、KRT、岡本愛彦演出、橋本忍脚本）は、現存する 1950 年代のテレビドラマとしては最もよく言及されるものの一つである。テレビドラマ史を論じた文献の多くがこの作品の芸術性と歴史的意義を強調するように、生放送を基本としていたテレビに VTR を導入するという画期的な試みは、視聴者のみならず、テレビ業界内部の関係者たちにも大きなインパクトを与えた（志賀 2008：40-47）。テレビの受信契約数が 100 万台を突破し、電波塔である東京タワーが完成したのも、1958 年のことである。また翌 1959 年には、皇太子ご成婚パレードの中継という一大メディアイベントが、一般家庭へのテレビ受像機の普及を後押ししたこともよく知られている。さら

に同年には、すでに開局していた日本テレビと KRT（現・TBS）に続き、日本教育テレビ（現・テレビ朝日）とフジテレビが放送を開始し、現在まで続く日本のテレビ放送体制が確立されていく。すなわち、放送技術、芸術性、産業構造など、いずれの領域においてもテレビがメディアとしての成熟を明確に示したのがこの時期であった。1958 年に入館者数がピークを迎えた映画産業に取って代わり、テレビは日本の大衆娯楽文化の新たな担い手として急成長しつつあったのである。

本稿が対象とする NHK ディレクターの和田勉（1930-2011）にとっても、1959 年はとりわけ重要な年であった。当時から独創的なテレビ・ディレクターとしてすでに注目されていたが、作家の安部公房との出会いが和田に大きな転機をもたらす。「ラフトラック（笑い声）」の挿入などを施した実験作として知られる『円盤来たる』（1959 年 2 月 6 日放送、NHK、安部公

* 東京大学大学院情報学環特任研究員

キーワード：和田勉、飯島正、テレビドラマ、NHK、テレビ論

房脚本)の出来に満足した安部は、「今後、あなたの演出なら、優先的に書くことにしましょう」(『大テレビドラマ博覧会』129)と述べ、結果的に4本の和田作品に脚本を提供することになった。とりわけ、『日本の日蝕』(1959年10月9日放送、NHK、安部公房脚本)は、今なお初期テレビドラマの傑作として名高い。和田の代名詞とも言えるクロースアップを多用した同番組は芸術祭奨励賞を受賞しているが、和田と安部の共同制作はここで一つの頂点に達する。その後も和田は、1960年代半ばまでに椎名麟三、野間宏、開高健、谷川俊太郎、寺山修司といった錚々たる面々に脚本を依頼していく。作家との共同作業によって多くの実験作を発表していたこの時期が、和田にとっての最初の黄金期と言えるかもしれない。「一億総白痴化」とも言われたこの時代は、一方で多くの作家や知識人によってテレビの芸術的可能性が盛んに議論された時代でもあった。和田もまた、雑誌等で自ら積極的な発言をするとともに、作品を通してテレビ独自の可能性を追求し続けていた。

しかし、1953年にNHKに入社した和田は、『日本の日蝕』へと至るまでに、少なくとも35本のテレビドラマの演出を担当している。NHK在籍時(1953-1988年)におよそ140本の演出を手がけた和田の全作品リストと照らし合わせてみても、4分の1を占めるその初期の本数は決して無視できるものではない。もちろん、『日本の日蝕』以前の作品が注目されてこなかったことには、それなりの理由がある。それは芸術祭奨励賞を受賞した『石の庭』(1957年11月22日放送、NHK、有吉佐和子脚本)を

除き、番組の映像がどれも現存していないからである。和田作品に限らず、知りたくとも知る術がほとんどないという厳しい現実が、初期テレビ研究を行う者には常に突きつけられる。初期の和田作品に関する論考の中で瀬崎圭二も指摘するように、『石の庭』には後の和田を特徴づけるクロースアップがほとんど見られない(120)。したがって、同作を含めたこの時期までの作品が、われわれの知る和田勉以前の習作として軽視されてきたとしても、ある意味では致し方なかったと言えるかもしれない。

本稿の目的は、1957年9月13日に放送された『檻の中』(NHK、飯島正脚本)という単発作品を手がかりに、和田が自身の初期テレビドラマ作品で試みた実験的演出の実態をより厳密に精査することである。映像の現存がないことを主な理由に、初期の和田の実践は「アップのベン」といったキーワードによって安易に簡略化されてきてしまった。あるいは「テレビ的」であることを追求する彼の姿勢から、従来の和田勉理解は映画との断絶を強調する傾向にある。しかし、和田はテレビ的であることを追求するに際して、他の芸術の知見を排除するような態度を示すことは決してなかった。1950年代後半から、上述したような有名作家らの協力を仰ぎつつ「芸術的テレビドラマ」(瀬崎)を模索するように、映画もまた、先行する映像芸術として最初期の和田にとっては重要な着想源の一つであった。映画評論家の飯島正(1902-1996)によって脚本が執筆された『檻の中』という作品は、そうした問題を考察するうえで大きなヒントを与えてくれるだろう。

まず次節において、『日本の日蝕』に至るま

での和田の初期テレビドラマ作品と彼のテレビ論を概観し、続く第3節では、和田のテレビ思想に多大な影響を与えた飯島正のテレビ論を概観する。第4節では、飯島が脚本を執筆した『檻の中』（1957）という作品を例に、和田が初期においてどのような実験を試みていたのかを、

2. 和田勉の初期テレビドラマと批評活動

現在、1950年代に和田勉が演出した作品は、1954年11月25日放送の『うどん屋』から、1959年10月26日、11月2日放送の『出口あります——ある職業安定所にて』（全2回）までの36本と推定されている²。単発作品が24本、2話以上の連続ドラマが12本である。1955年7月24日放送の『さるのこしかけ』からは、概ね1～2ヶ月に一度のペースで演出を担当している³。脚本などから作品の詳細がわかるものもあるが、基本情報しか判明していないケースが大半である。また前述したように、1950年代で映像が現存しているのは、『石の庭』と『日本の日蝕』のわずか2本にすぎない。いずれも芸術祭奨励賞を受賞しており、その意味では当時から評価の高かった例外的な作品である。要するに、芸術祭用に制作された大作だけが残されているのであり、両作品だけでこの時期の和田作品全般の特徴を判断することは難しい。しかし残念ながら、生放送時代の映像が新たに発見される可能性は極めて低いと言わざるを得ない。世界初の家庭用録画ビデオである「1/2インチオープンリール」が発売された1965年以降、あるいはカセット型の「Uマチック」が発売された1971年以降については、今後も新

残された資料群の中から考察していく。最終的に明らかになるのは、和田と飯島が共にテレビの可能性を「単純さ」に見出していた一方で、その単純さに対する理解には両者の間で根本的なずれがあり、作品にはそのずれが創作上の葛藤として刻み込まれているという事実である。

しい和田作品の映像が見つかる可能性はあるが、50年代についてはそうした期待はあまり持てないだろう。したがって、最初期の和田作品に関しては、種々の関連資料に加えて、本人の証言がとりわけ大きな意味を担ってくる。

『テレビ自叙伝』（2004）をはじめとする和田本人の文章には記憶違いも多く、事実情報については慎重な判断を要するが、自作解説には作品の実態を知るうえでの重要な手がかりがいくつも含まれている。とりわけ、後に『演技と人間』（1970）として出版されることになる書籍には、和田が1950-60年代に発表した主要な論考が収録されており、本稿が対象とする時期の作品を理解するうえでは欠くことのできない証言である。

和田のテレビ論の基底にある思想は、一般的な意味での物語の否定であると言ってよいだろう。「さいしょの発見」（1958）と題された最初期の論考では、「スター（俳優）」と「物語」でドラマを見せることを批判し、人間の身体そのものに着目し、それを「断片のクローズ・アップ」によって細分化し、積み重ねていくという方法論を提起している。そこで見出されるのは「小さなものの魅力」であって、日常において

はごく些細な物や行為がもつ可能性を「ちょうど俳句のように表現してみせるのがテレビドラマというもののミソ」(22)であると述べている。この時期、テレビドラマはその独自性を生中継に見出そうとしていた。例えば、東京と大阪にまたがる4元生中継を実現したドラマ『追跡』(1955年11月26日放送、NHK、永山弘演出、内村直也脚本)は、初期テレビドラマの実験的作品としてよく知られている。同作は、カメラ11台を駆使した大作であり、和田勉もスタッフの一員として参加していた。しかし、同年から翌年にかけて、和田は全く逆の考え方をテレビに抱いていた。すなわち、中継によって物語を外部へと拡張していくのではなく、より少ない場へと限定していくこと、いわば内部への進入という発想である。和田は「テレビ演出論——攻撃の論理について」(1959)において、演出家としての自身の出発点を依田義賢脚本の「西鶴シリーズ」(1955-56)に見出しているが、そこでの一例として以下の場面設定を挙げている。

こうして依田義賢氏の最初の脚本に現われた世界は、西鶴「世間胸算用」のうちから〈質屋の朝から晩まで〉を集中的に描くことであった。そこにはあくまで(質屋という)同一シーンの中に、カメラが飛びまわることなく逆に外から(そこへ)さまざまな人物が入り出てくることによって、(最初の・異色の)変化をつけることができたのである。しかもドラマは、(質屋という設定から)それだけでもう十分な人間のドラマをたたき出すことができたのであつ

た。(33 強調は原文)

こうした設定は舞台上で行われる劇においてもよく見られるものであり、必ずしもテレビ的であるとは言えないし、「人間のドラマ」などという表現からは未だ物語の問題を重視している姿勢が窺える。しかし、こうした場の限定による「単純さ」への志向は、初期の和田作品の形式を徐々に規定していくことになる。

依田の脚本にヒントを得て生まれた内部へというベクトルは、和田にとって単に場の問題としてだけでなく、必然的に人間の内部、すなわち心理描写という問題に対する考察を導いていく。「テレビ演出論——攻撃の論理について」で次に和田が言及する『帰って来た人』(1957年3月28日、飯島正脚本)は、まさにそうした作品であったと言えるだろう。本作は飯島正が脚本を担当した初の和田作品であるが、和田はこの作品に対して、「ほとんどこの一作のなかに、〈テレビドラマとは〉という方法的なものの芽を大なり小なり全部含んでいた」と述べている。すなわち、「まずそれは原則としてアップ・ショットのモノなのであり、そういうことから、ドラマは俗に言う、絵ヅラの〈動き〉を追って見せるという方向にではなく、逆に内側へ内側へと心理を(顕微鏡的に)拡大分解していくものであるということ」(37-8)を発見したのである。『帰って来た人』は主人公を二人へと限定することで、劇的な物語の要素を最小限にする一方で、登場人物の内面に生じる「心理的变化」(飯島「テレビレイについて」31)を重視したものであった。

そして、そうした物語の否定を最も突き詰め

た例として挙げられているのが、飯島との2作目の共同制作となった『檻の中』という作品である。和田は本作がいかに物語（ストーリー）とは別の観点からの実験作であったのかを、次のように説明している。

私はいまここで、このドラマのストーリーを述べることにほとんど興味が無い。というのは、(映画)「抵抗」がそうであるように、あのストーリーは一体しゃべってお話できるという種類のものであろうか、ということを考えてもらえばいいのである。あそこにはただ一つ、脱出という行為だけが存在したのであり、檻の中についてもこれと同じことがいえたのである。そこには四十五分間を通じてただ一つ、一人の主人公が閉じ込められた貨物車からいかにしてぬけ出すかということの〈行為〉がテーマとしてあっただけである。(「テレビ演出論——攻撃の論理について」42)

和田が言及している『抵抗』(ロベール・ブレッソン監督、1956年)は、戦時中にドイツ軍に捕らえられたフランス人中尉が監獄からの脱出を試みる作品だが、和田は別の論考の中で、当時この作品に強い感銘を受けたことを表明している(「テレビ演出論——解放の論理について」50)。本作からの影響については次節以降であらためて触れるが、上記引用において重要なのは、『檻の中』のテーマが物語はおろか、もはや主人公の内面に生じた心理的变化ですらなく、脱出するための人間の行為そのものの追求であったと述べている点である。

同論考において、和田は『檻の中』に続いて『石の庭』に触れ、後者の試みが映像よりもむしろ「コトバ」の扱いに関するものであったことを回想している(44-45)。この「コトバ(台詞)」の重視への移行は、これまで頑なに否定してきた物語要素に対する再考を意味している。事実、『石の庭』は龍安寺の石庭の制作をめぐる兄弟の愛憎という明快な物語が展開されており、視聴者を混乱させる難解な映像表現はほとんど見られない。有吉佐和子が脚本を執筆した『石の庭』の成功により、ここから和田は作家との共同作業という新たな創作段階へと移行していくことになる。したがって、『石の庭』直前の『檻の中』は、物語の否定という実験のいわば集大成だったと言えるだろう。本作を読み解くことこそが、最初期の和田勉作品の思想を理解する鍵となるはずである。

しかし、実のところ、残された資料が示すのは必ずしも和田の実験精神そのものではない。たしかに、台本を読む限り、和田が強調するような脱出という行為が『檻の中』では仔細に描かれている。しかし、それだけが作品全体にわたって展開されているわけではなく、むしろドラマ自体は典型的なミステリーと言ってもよいものである。そこには脚本を執筆した飯島の意向が明確に反映されている。さらに、脱出場面においても、飯島は必ずしも行為それ自体の意義を重視してはいない。では、飯島は『檻の中』においてどのようなテレビドラマを作ろうとしていたのか。それを知るためには、まずはじめに飯島のテレビ論から確認していく必要がある。

3. 飯島正とテレビドラマ

映画評論家として著名な飯島正は、早くからテレビに対する強い関心を抱いていたことが知られている。和田が決定的な影響を受けたとする飯島の「テレビ方法論ノオト」は『放送文化』の1956年11月号に発表されたものだが、50年代半ばの時点で飯島はすでに独自のテレビ論を構築しつつあった。そして、1958年に発刊された先駆的なテレビ批評誌『季刊テレビ研究』では、「テレビのイメエジの特質について」と題した論考を3回に渡って連載し、テレビ論をめぐる理論的考察をさらに徹底して推し進めていく。先述したように、この時期になるとテレビの芸術的可能性をめぐる言説は急増するが、飯島のテレビ論を特異なものにしているのは、日本でテレビが放送される前からその問題に着目していたという事実である。すなわち、飯島は文献を通して欧米のテレビ論に精通しており、雑誌等で積極的に最新動向の紹介を行っていた。志賀信夫の証言によれば、飯島はすでに1951年の段階で『TVガイド』や『ヴァラエティ』といったアメリカの専門誌を取り寄せ、大学院の講義に利用していたようである(志賀 2007: 171)。

「テレビ方法論ノオト」を筆頭に、飯島の主要なテレビ論は『映画 テレビ 文学』(1957)としてまもなく書籍にまとめられたが、その後も多くのテレビ論を精力的に執筆していた。とりわけ、作品受容の証言として貴重であるにもかかわらず、見過ごされてきたのが飯島のテレビ時評である。『映画評論』で1958-59年にかけて連載していた「TV談義」(1~11)は、

最近視聴したテレビドラマに加え、芸術祭作品の講評なども行なっている。しかし、この連載は必ずしも時評ではなく、上述したような諸外国のテレビ論の紹介がなされる場合もあった。比較的知られていたアメリカの状況だけでなく、フランスのテレビ論の紹介などは、当時としてはかなり貴重な情報源となっていたことだろう。また飯島は、1977-78年にかけても『放送文化』に「テレ吉の弁」(1~18)と題したテレビ時評の連載を行なっている。連載冒頭で飯島は「われながらテレビ・ドラマをよく見るものとおもう。毎晩平均二時間以上は見る」と述べているように、70年代に入ってもテレビ作品に対する興味を飽くことなく継続させていた。飯島のテレビ論は、単なる最先端の議論の紹介でも抽象的な理想を掲げた規範的理論でもなく、こうした時評を通して培われた極めて実践的なテレビ思想であった。

飯島のテレビ論の具体的な特徴は、映画とテレビを区別せず、いずれも「イメエジ(映像)」であるという端的な事実を議論の出発点としている点である。この主張は一見すると乱暴かつ素朴なものに見える。また、飯島自身がこうした両メディア間の差異の無効化に対しては常に慎重であったのも事実である。しかし、この差異の無効化が、テレビの特質として「生放送」を重視しないという、当時としては異例の立場を前提としている点は重要である。飯島にとって、「生放送」という放送形態はドラマにおいては単なる限界であって、テレビの本質ではなかった。飯島は後にテレビドラマにおいて主流

となった「連続ドラマ」という形態を批判するようにもなるが、現在、「テレビ的」なものとして一般に理解される特質に反対する姿勢が示すのは、テレビの本質を見誤った映画評論家の偏見ではない⁴。むしろ、そこには萌芽しつつも消え去っていったテレビの潜在的可能性が透けていると捉えるべきである。

和田は飯島が執筆した「テレビ方法論ノオト」に強い感銘を受け、飯島の研究室を訪ねることになる（飯島「ぼくの明治・大正・昭和」235）。脚本家としては素人である飯島に対して、和田が脚本執筆の依頼を最初から想定していたかどうかは不明だが、この訪問をきっかけに以後6本の共同作業が行われることになる。映画評論家にテレビ脚本を執筆させることになった「テレビ方法論ノオト」に、和田はいかなる可能性を見出していたのだろうか。

「テレビ方法論ノオト」では、テレビがもつ画面の小ささと放送時間の短さという二つの「制約」が重視されている。この制約を欠点ではなく、メディアを規定している本質として捉え、その可能性を追求すべきだというのが飯島の基本的な主張である。そこからロングショットよりもクロースアップが効果的であること、場面転換の多い複雑な展開よりも単純な物語の方が良いこと、人間ドラマが中心となるゆえに台詞も重要であることなどの方法論が次々と導かれていく。現代の視点からすると、飯島の主張はテレビの特性に関して正鵠を得ているが、必ずしも独創的なものではない。むしろ、理論としては凡庸とさえ言えるかもしれない。しかし、和田は飯島の方法論をいわば飯島以上に徹底して突き詰めることで、その可能性の萌芽を

育成していくことになる。

「テレビ方法論ノオト」をきっかけとして、飯島はまず『帰って来た人』の脚本を執筆する。飯島は自らの方法論の実践編として本作を捉えていたが、和田は飯島の方法論をさらに徹底させようとしていた。特に重要なのは、登場人物の削減である。この点については両者とも別の論考でそれぞれ触れているが（飯島「テレビプレイについて」30-31、和田「テレビ演出論——攻撃の論理について」33）、削減の過程は残された飯島正旧蔵台本からも事実として確認することができる。すなわち、第一稿には「美加子」という名の妹が登場人物の一人として登場し、主人公二人の状況を説明する台詞が数多くあるのに対して、第二稿では「美加子」自体が削除され、主人公二人だけの物語となっている⁵。

飯島脚本のキーワードは「心理的变化」である。しかし、『帰って来た人』は飯島にとって初めての脚本ということもあり、その点に関して「欲ばりすぎた」と後に反省をしている（「テレビプレイについて」31）。和田による登場人物の削減指示は、物語全体を引き締めることに成功したが、それでも二人の心情を30分の中で上手く変化させていくことは容易なことではなく、視聴者からは分かりにくいという反応が散見されたようだ。そして、飯島は続く『檻の中』が、前作での失敗を踏まえた発展的な創作であったことを、次のように述べている。

これでもまた、ぼくは心理的变化にこだわった。だが四十五分でも、やはりこれは無理であった。どうも、わかいときからフランスの小説や戯曲にしたしみすぎたせい

か、「心理」がすきでこまるとおもう。以前にこりず、これでもモノロウグで解決しようとした。これがやはり和田さんには説明的にみえたにちがいない。演出上これは相当カットされたが、そのかわり、貨物車内の『抵抗』流の、「手のうごき」は印象的になった。（「テレプレイについて」31）

この引用には、飯島と和田の作品に対する考え方の違いが明確に示されている。飯島の「心理的变化」に対するこだわりは必然的に物語を要請する。しかし、究極的には物語を拒否する和田は、心理という内面よりも「手のうごき」という行為それ自体を描こうとした。そして、ここでふたたびブレッソンの『抵抗』が言及されている。1960年、和田はブレッソンの『抵抗』とそれに対する言説を出発点にした論考「テレ

4. 『檻の中』の単純さ

前述のように、1950年代の和田作品で映像が残されているのは『石の庭』と『日本の日蝕』だけであり、『檻の中』についても現存は確認されていない。したがって、本作を分析するにあたり、本稿が参照したのは主に以下の資料である。

- (1) 台本2冊（早稲田大学演劇博物館所蔵）
 - ・『檻の中』決定稿（飯島正旧蔵、資料番号：タ063603）（以下、決定稿①）
 - ・『檻の中』決定稿（高橋和彦旧蔵⁶、資料番号：タ05237）
- (2) 飯島正旧蔵スクラップブック（早稲田大学

演劇博物館所蔵、資料番号：飯島正24-1）
後に収録された『演劇と人間』からは削除されているが、本論考の初出である『現代テレビ講座』には、受像機を撮影した一枚の写真が掲載されている（101）。不鮮明な写真ながら、鉄格子の間から外部を見つめる男性の顔が確認できるが、この画像こそ、『檻の中』の主題として和田が論じていた脱出場面の一部である。この画像の構図が『抵抗』を参考に行っていることはまちがいない。しかし、『抵抗』と『檻の中』の関連はすでに飯島正の脚本に認められるものである。ここでも和田は飯島脚本が持っていた可能性を飯島以上に徹底して追求していたと考えられる。その実態を明らかにするためには、台本に残された脚本家と演出家の葛藤の痕跡を精査しなければならない。

演劇博物館所蔵、資料番号：飯島正24-1）

飯島は、自身が脚本を手がけたテレビやラジオに関するスクラップブックを作成していた。新聞評、関連雑誌記事、和田勉からの手紙などの文字資料に加えて、放送中の受像機を撮影した「画面写真」が貼り付けられている（『大テレビドラマ博覧会』130）。

- (3) 『檻の中』創作ノート（個人蔵）

初期の和田は、自身の番組に関する情報を極めて詳細に記録しており、『檻の中』に関しても創作ノートが残されている。制作スケジュールや新聞評に加えて、知人や視聴者からの感想の手紙も貼り付けられている。また、飯島のス

クラブブックと同様の画面写真もあり、具体的な演出の工夫を垣間見ることができる。

『檻の中』は「テレビ・プレイハウス」という45分の番組枠において、1957年9月13日(金)20:45～21:30に生放送された。決定稿①からは、美術の岩野音吉、効果の辻好雄、音楽の小倉博など、初期和田作品の常連スタッフの名前を確認することができる。主人公の上田昇を高桐真、昇の元恋人である伊達明子を小沢咲子が演じている。和田作品での両者の共演は『岐路』(1956年9月18日放送、NHK、依田義賢脚本)以来2度目であるが、高桐真は初期和田作品の常連俳優であった。まずは決定稿①を元に、本作のあらすじを確認しておきたい。

主人公の上田昇(高桐真)は、会社の社長命令で列車の二等車にいる土井専務(内田朝雄)が持つ重要書類を奪おうとしている。その任務を遂行しようとする最中、会社の同僚でかつての恋人である伊達明子(小沢咲子)に遭遇する。しばらく二人で会話をした後、明子が席を外した隙に昇は専務の下へと向かい、首を絞めて殺害し、書類を奪い取る。すぐに列車を降り、向かいの貨物列車の中に逃げ込んだ昇はそこで一休みをするが、突然扉が閉まり、列車内から抜け出せなくなってしまう。上方の鉄格子から外を眺めながら、自らの境遇を「檻の中」だと嘆きつつも、近くにある針金や縄を巧みに使い、かろうじて脱出に成功する。だが気がつくところでは先ほどいた二等車であり、昇は自分が単に夢を見ていただけなのかわからなくなってしまう。そこへ刑事がやってきて、重要書類の入った鞆について昇に質問をする。明子にも嫌疑が

かかることを懸念した昇は、観念して事の顛末をすべて刑事に打ち明ける。しかし、実は専務の死因は昇が首を絞める直前に起きた心臓麻痺のショック死であった。さらに警察は以前から専務の不正を調査しており、鞆を奪い取った昇の行動はむしろ大きな手柄となった。形式的な事情聴取のため警察署に向かう車の中で、昇と明子は安堵の表情を浮かべている——(終)。

『檻の中』という題名が示すように、本作の核心は主人公が閉じ込められた貨物列車内の場面にある。脱出という状況設定の類似や本人の発言等に鑑みて、和田自身が明確に意識する以前から、飯島が『抵抗』を一つの参照項として本作を執筆したことは疑いない。しかし、その志の高さとは裏腹に、新聞等に掲載された時評の多くは本作を評価しなかった。とりわけ『日刊スポーツ』(9月19日付)に掲載された記事は「アップで無理な迫力(参考になる場面もあったが)を持たせるこの方法のドラマを二度と見たいとは思わない。ましてラストの解決は落語のオチだ」と手厳しい。「オチ」に対する批判は他にも見られ、朝日新聞夕刊(9月15日付)にも「最後の被害者は心臓マヒで死んだなどと警察官にいわせるあたりは特に苦しい」という投書が寄せられている。

実際、飯島自身も同時代に自作を振り返った論考の中で、『檻の中』については物語の「オチ」——実は主人公が殺す直前に、専務は心臓麻痺でショック死していた——をどのようにするのか、最後まで悩んだと述べている⁷。興味深いことに、その肝要な「オチ」の部分は決定稿にも印字はされておらず、専務がショック死であったことを主人公に伝える刑事の説明台詞

が手書きで書き込まれている（決定稿① 95）。しかし、この付け足しは単なる「オチ」の追加にとどまらず、物語全体に極めて大きな変化をもたらす。当初の脚本は、元恋人に対する主人公の内面の変化を辿る心理劇の側面が強い。つまり、昇が殺人を犯したかどうか最終的には問題とならず、愛し合う二人の気持ちが結びついていく過程が重視されている。しかし、専務は心臓麻痺のショック死であったという「オチ」の追加は、主人公を殺人者だと思っていた視聴者には軽い驚きを与えることになるだろう。つまり、物語全体がこの最後の「オチ」を目指した構成へと変貌するのである。飯島はこうした物語の「オチ」が、映画以上にテレビにおいて有効であることを認識していたが、この可能性を特に『ヒッチコック劇場』（*Alfred Hitchcock Presents*, 1955-62）の手法から学んでいる。

すでにアメリカでは人気番組となっていた『ヒッチコック劇場』は、1957年6月25日から日本でも放送が開始された。ヒッチコックのテレビ番組とあって当初から話題であったが、とりわけ第4回に放送された「生と死の間」（*Breakdown*）は飯島が高く評価した作品である。自動車事故によって、全身不随状態に陥った男を描いた本作は、正味25分の物語の大半を主人公演じるジョセフ・コットンが微動だにしない映像で占められている。体が動かせない反面、頭ははっきりとしており、様々な心の声がヴォイス・オーバーのかたちで視聴者には聞こえてくる。飯島は「^マ肝腎なもののクロウス・アップを中心にして、余計な話や描写は一切ぬきにした緊張の三十分であった」（『世界の映画

1958年版』20）と述べ、この実験的作品をテレビドラマの可能性を示す極めて重要な事例として評価した。「生と死の間」は、死亡したと勘違いされた主人公が死体安置所に輸送される間一髪のところ助かるが——無慈悲な実業家が涙を流すことで生存が確認されるという「オチ」——、『ヒッチコック劇場』のトレードマークがまさにこうした意外な「オチ」、すなわち、結末部分に準備された「どんでん返し（twist ending）」であった（木原『『サイコ』における予期せぬ秘密』29-32）。

和田の創作ノートによると、飯島から『檻の中』の第一稿が届いたのは8月20日であるが、「生と死の間」のテレビ放送が7月16日、『抵抗』の日本劇場公開が7月20日である。飯島は劇場公開前に試写で『抵抗』を見たと思われるが、いずれにしろ、『檻の中』が『抵抗』流の脱出劇を基底としつつ、飯島版『ヒッチコック劇場』を目論んでいたことは大いに考えられるだろう。

『檻の中』はこうした「オチ」の面白さ——残念ながらそれは失敗に終わったようだが——を強調した一方で、飯島自身は心理劇としての側面も最後まで捨て去ることはなかった。「オチ」とともに、台本に手書きで加えられた数少ない追加文言の一つは、最後に事件の顛末を振り返る主人公の以下の独白である。

（上田の声）こうなったのもみんな自分のせいだった。それはわかっている。しかしそれが、明子と再会し、話しあい、たとえどんなおもしろい事件があったにもせよ、こうして二人がむすびあわされ、おな

じ運命におちいったことを、私は永久にわすれまい。(決定稿① 99)

この台詞の追加は、ドラマ全体を物語上の単なる「オチ」では終わらせたくない、主人公の心の変化を重視した飯島の意図を明瞭に示している。『檻の中』の台本冒頭には「危機が私を成長させた。——私が殺人を犯し、逃れ、つかまる迄の四十五分間」という「製作意図」が記されているが、危機的状況が生み出した主人公の心理的变化の描写こそ、飯島の主眼だったと言えるだろう。

このように、飯島の台本はブレッソン、ヒッチコック、彼が好んだ心理劇など、様々な要素を組み合わせたテレビドラマとなっている。先述したように、初期作品に対して飯島は「欲ばり」すぎたという反省の弁を漏らしていたが、同時代のテレビや映画が提起した方法論を貪欲に吸収した本作には、テレビの制約を意識した「単純さ」の美学を読み取ることができる。

しかし、一方で和田は、第1節での引用が示すように、そもそも本作の物語自体は重視せず、ブレッソンの『抵抗』を独自に参照しながら、脱出という行為そのものの描写に全力を注いでいる。決定稿には多くの書き込みがあるが、その大半が追加ではなく台詞の削除である点は重要である。主人公の独白を中心とする説明的台詞の大胆な削減は、物語の「単純さ」に対する理解が、飯島と和田の双方では異なっていることを示唆する。そのことをより明確にするために、本作の要となる脱出場面を見ていきたい。

脚本の該当部分(決定稿① 36-65)には、「鉄

格子のはまった小窓(外部から)／そこへ、上田の顔があらわれる。／小窓の鉄格子(内部)をガタガタやる上田」(45)というト書きがあり、貨物列車の内部に閉じ込められた主人公を外部から捉えるショットは、すでに飯島によって想定されていたことがわかる。和田は飯島の指示をそのまま採用したと考えられるが、この時、すでに両者間で『抵抗』における鉄格子のイメージが共有されていたことはまちがいないだろう。しかし、ブレッソンという共通項はあったものの、飯島と和田とでは脱出の意義に関して異なる認識を抱いていた。飯島は脱出場面のト書きに、興味深い注意書きを括弧の中に加えている。

針金をのばしたり、まげたり、たばねたり、それに縄をつけてみたりする上田の手。(以下、この細工は、かならずしも、見るひとにわかるようにする必要はない。せりふの時間に合わせるだけでよろしい。)おなじように針金と縄の細工をしている手。おなじように、針金と縄をひねくっている手。針金をたばねて、しばり、さきをカギ型とし、その柄のほうの部分に縄をむすびつける。細工の手がうごかなくなる。上田、針金と縄をもって立ち上り、カギ型にまるめた針金のさきを、掛金のかかっている上の部分の隙間から外部にとおし、ぐるりとその先が、掛金の下から手前にもどってくるようにした。針金の柄の部分につけた縄を戸の上のなにかひっかかるものにひっかけて、縄を引く。それで掛金が上に引かれて、はずれる。(ただしこれは、それほど見る

ひとに正確に見せなくてもいい。苦心のほどがわかればいいのである。) (決定稿① 55-59 強調は引用者)

このト書きからは、飯島が脚本の段階で明確に主人公の「手」を意識していたことがわかる。これもまた、『抵抗』が念頭にあったと考えてよいだろう。しかし一方で、針金や縄をいじる主人公の行為それ自体に大きな意味を持たせる必要がないということが明記され、そうした行為はむしろ台詞のための単なるつなぎとして理解されている。実際、このト書きの部分には主人公の長い独白がヴォイス・オーバーのかたちで挿入されている。閉じ込められた恐怖から、昇は明子が扉の向こう側にいる幻想を見たりするが、そうした中、明子に対するかつての愛情をあらためて想起し、そのすれ違いを嘆く(決定稿① 54-57)。飯島の脚本では、主人公はここで自らの内面を見つめ直し、明子に対する愛情をふたたび強くしていく。すなわち、貨物列車という「檻の中」は、飯島が重視した「心理的变化」を生み出す、物語上きわめて重要な場面として設定されている。

これに対して和田は、そうした「心理的变化」ではなく、俳優の身体の動きそのものを描くことに注力した。和田は『檻の中』の脱出場面について、次のように述べている。

テレビドラマでの表現というものが人間の〈躰〉でしかないことは、例の「抵抗」の各ショットがどんなデテールにはいっていても、必ずあの若い主人公の手足の(一部分の) フレーム・インによって〈つなが

れていた〉ように、これは徹底的にそういうことを意識して集大成してみた。(「テレビ演出論——攻撃の論理について」43)

飯島が昇と明子の恋愛劇という側面を強調しようとしていた一方で、和田はそうした物語は重視せず、それを意図的に分解したうえで、檻の中にいる主人公の脱出という行為そのものの意味を追求した。実のところ、決定稿①に記された先述の「製作意図」には、ページ全体に大きなばつ印が付けられている。この書き込みが飯島と和田のどちらの手によってなされたかは判別できないが、主人公の成長を心理的变化によって描くという飯島の意図が、和田によって拒否された一つの証左とみなすことはできるだろう。

残された複数の画面写真を見る限り、実際に放送された作品は飯島の脚本を最大限尊重したものになっていたと思われる。それはわかりにくいなりに、物語の外見をしっかりと保持していたであろう。しかし、後に和田は鉄格子の間から顔を覗かせる男を写した一枚の写真にこの作品の意義を集約させることで、本作が持っていた物語性を否定する⁸。ここで主張したいのは、こうした和田の回想に含まれている「歪曲」を歴史的に修正することではない。むしろ、和田の言説は、テレビに対する飯島との差異を明確に示しているという点で貴重な証言である。つまり、『檻の中』はテレビにおける「単純さ」の追求という志においては繋がっているものの、より根本的な次元においては脚本家と演出家の思惑のずれが亀裂として刻み込まれている。そうした意味で、本作は必ずしも成功作と

は言えないだろう。少なくとも、「悪評嘖嘖」であったという本作に対する飯島の証言を信じるならば、大半の視聴者の拒絶反応には一抹の真理があったのではないだろうか（「テレプレ

5. おわりに

和田は飯島のことを「先生」と呼べる数少ない人物として、生涯尊敬の念を抱き続けていた（「テレビをあける」120）。初期作品を理解するうえで、飯島が和田に与えた影響は計り知れない。しかし、残された飯島の脚本を読むと、和田が望んでいたようなものとして出来上がってきたとは必ずしも思えない。むしろ、脚本に反映された飯島のテレビ思想との格闘を通して、和田はテレビに対する自らの信念をより明確にしていったのではないだろうか。そうした意味で、飯島と和田のテレビ論は漠然と同一視すれば済むものではなく、その微細なずれこそを精査しなければならないのである。

初期の和田は『檻の中』で追求したような「単純さ」の思想を徐々に捨てていく。志賀信夫は椎名麟三が脚本を執筆した『その男』（1959年5月8日放送、NHK）に対する批評の中で、和田作品の変化を次のように述べている。

和田君の演出は、一九五七年文部省芸術祭の奨励賞を得た有吉佐和子作『石の庭』あたりから成長し、石川達三原作の『巷塵シリーズ』や最近の安部公房作『円盤来たる』などと、演出テクニックの上ではきわめて斬新さをしめしてきたが、かつて依田義賢とくんだ『西鶴シリーズ』（55）や飯島正

イについて」32）。しかし、そうした失敗こそ、テレビの可能性を根源的に問う際に必然的に生じる意義ある事態だとも言えるだろう。

とくんだ『帰って来た人』（56）『檻の中』（57）の時代の素朴なイメージの追究がたりないのが惜まれる。（1959：105）

飯島脚本の作品に対しても難解であるという批判は散見されるが、映像が現存しているものを見る限り、『日本の日蝕』以降、その難解さは60年代半ばまで続く。しかし、瀬崎圭二も指摘するように、『小市民』（1966年11月24日放送、NHK、山田信夫脚本）や『小さな世界』（1967年11月16日放送、NHK、山田信夫脚本）といった作品は、過剰で風変わりではあっても核家族の日常を描いた「ホームドラマ」には変わりなく、物語の難解さは影を潜めていく（138）。飯島が和田に脚本を提供するのは、『城の風景』（1963年1月30日放送、NHK）が最後となるが、この時期に二人の共同作業が終わりを迎えるのはおそらく偶然ではないだろう。『城の風景』は音声が現存しているが、『一匹』（1963年1月16日放送、NHK、寺山修司脚本）や『鋳型』（1963年10月27日放送、NHK、須川栄三脚本）など、映像が現存する同時期の和田作品と比較すると、同作の物語のわかりやすさ（素朴さ）は明白である。ドラマ制作において、和田はすでに別の局面に突入していた。このように、60年代までの初期の和田作品は、

単純さと複雑さのあいだを時代ごとに逡巡しながら、「アップのベン」の一語には収まりきらない独自の世界観を模索していたのである。

飯島が脚本を執筆した和田作品は、いずれも現存が確認されていない。またその後のテレビ史における「連続ドラマ」の隆盛や、「日常性」という美学の発達は、和田の単発ドラマが示す多くの実験的な試みを覆い隠してしまう。テレビがまだ何ものでもない時代の中で、新たなテ

レビドラマを〈発明〉しようとした彼らの試みは、いわばテレビそれ自体によって歴史から抹消されたままである。残されたわずかな資料群から初期和田作品を考察すること、すなわち、テレビに対する「抵抗」からテレビ史を再考することで、埋もれたままにあるテレビの未知なる可能性を今後も掘り起こしていかなければならない。

謝辞

本稿執筆にあたり、ワダエミ氏と和田翼氏からは、『檻の中』の創作ノートをはじめとする多くの未刊行資料の閲覧を許可していただいた。深く感謝申し上げます。

研究助成に関する記述

本稿は、2016年度第4回NHK番組アーカイブス学術利用トライアルに採択された課題「『アップのベン』再考——和田勉の初期テレビドラマ作品における演出技法の特性」の研究成果である。

註

- ¹ 本稿は参照する資料（飯島正旧蔵資料）の記述に関して、拙論「和田勉＝テレビという存在論的不安——飯島正旧蔵資料をめぐる」（2017）と一部重なる部分があるが、『檻の中』の分析に主眼を置いた別論文である。
- ² 演出家デビュー作とされる『うどん屋』（NHK、秋田実脚本、ミヤコ蝶々、南都雄二主演）については、本人の回想から番組の存在自体は確実視されていたものの、1953年と1955年の二説があり、正確な番組情報はこれまで不明のままであった。しかし今回、各紙の新聞テレビ欄とNHK放送博物館が所蔵する「番組確定表」（放送終了後、実際に放送した番組情報を記録する資料）を調査した結果、1954年11月25日（木）19：30-20：00に放送されたことが判明した。和田勉演出作品リスト作成のための調査にあたっては、太田美奈子氏に多大なご協力をいただいた。ここに記して感謝する。
- ³ 『さるのこしかけ』については、その制作過程が詳細に記された和田の創作ノートが現存している。今後、和田の初期活動を理解するうえで、綿密な検証が必要とされる資料である。本資料の概要に関しては拙論「和田勉と起源のテレビドラマ」を参照。
- ⁴ 飯島は「連続ドラマ」をドラマの「特殊な形態」であるとして、「いっそこれをドラマではないと考えてもいい」とまで述べている（『テレ吉の弁1』1977.7：28）。飯島が連続ドラマという言葉で根本的に想定しているのは、おそらく「ホームドラマ」である。飯島によれば、それはドラマというよりも、「俳優をドキュメンタリー的に見せる口実のセミ・ドラマ形式」（『テレ吉の弁4』1977.10：28）である。これは中継をテレビの本質として理解しないという飯島が当初から主張していたテレビ論が、この時点でもなお存続している証しとも言えるだろう。飯島にとっては、完結したフィクションを作品として提起する単発ものこそがドラマの根幹であった。こうした飯島の姿勢は、一般的に理解されるテレビの特性への反論を辞さないという意味で、テレビの「日常性」を厳しく批判した和田とも共通する（和田「テレビ演出論——解放の論理」）。
- ⁵ 早稲田大学演劇博物館所蔵の台本を参照した。同博物館には飯島旧蔵資料が多数保管されているが、飯島が担当した和田作品の台本に関してはそのすべてが所蔵されている。
- ⁶ 中表紙に「飯島先生」という言葉が書かれているため、最初は和田が飯島に送った台本だと推測される。寄贈印に記されている「高橋和彦」は『私は貝になりたい』のテクニカル・ディレクターとして知られる人物で、和田や飯島とは近い関係にあったと思われる。演劇博物館所蔵の飯島台本が飯島以外の人物から寄贈されている例が散見されるため、飯島の手から主要な関係者に配布されたという経路が考えられる。なお、決定稿①とは書込みの有無において若干の差異が見られるものの、ほぼ同一内容である。

- ⁷ 「一つにはそう悪人でもない主人公が気の毒だという気もあったし、一つにはオチずきなほくが、主人公がジタバタした結果がこんなになったと、つまり「檻の中」に意味をつけようとしたためでもあったが、たしかにこれは見るひとのまじめな気もちをハグラかした点で、おこられてもしかたがない」（「テレビレイについて」32）。
- ⁸ 和田自身が提供したと思われるが、江原順の論考にも『現代テレビ講座』と同一の画面写真が掲載されている（45）。

参考文献

- 飯島正『はくのみつ・大正・昭和』青蛙房、1991年。
 ——「テレ吉の弁」（1～18）『放送文化』1977年7月～1978年12月号。
 ——『世界の映画 1958年版』白水社、1958年。
 ——「テレビレイについて」『映画評論』1958年9月号、30-33頁。
 ——「TV談義」（1～11）『映画評論』1957年9月号～1958年10月号。
 ——「テレビ方法論ノオト」『映画 テレビ文学』清和書院、1957年。
 江原順「和田勉 TV 演出家——あるいはわたしのテレビ礼賛」『美術手帖』1961年12月号、34-35、45頁。
 木原圭翔「和田勉 = テレビという存在論的の不安——飯島正旧蔵資料をめぐって」『大テレビドラマ博覧会 テレビの見る夢』早稲田大学演劇博物館、2017年、108-113頁。
 ——「和田勉と起源のテレビドラマ」WASEDA ONLINE、2017年。
 （<https://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/culture/170712.html>）最終アクセス 2019年2月18日。
 ——「『サイコ』における予期せぬ秘密——『ヒッチコック劇場』と映画観客」『映像学』第97号、2017年、24-43頁。
 志賀信夫『テレビ番組事始——創生期のテレビ番組 25年史』NHK出版、2008年。
 ——『テレビ文化を育てた人々——作家・文化人・アナなどのバイオニア』源流社、2007年。
 ——「『その男』と和田勉演出」『映画評論』1959年6月号、104-105頁。
 瀬崎圭二「和田勉の演出技法——芸術的テレビドラマの探求」『人文学』第199号、同志社大学人文学会、2017年、109-148頁。
 和田勉『テレビ自叙伝 さらばわが愛』岩波書店、2004年。
 ——「テレビをあける 飯島正先生」『ドラマ人間テレビ語り』講談社、1980年、120-123頁。
 ——「さいしょの発見」『演技と人間——テレビジョンの思想』毎日新聞社、1970年、15-23頁。
 ——「テレビ演出論——攻撃の論理」『演技と人間——テレビジョンの思想』毎日新聞社、1970年、25-48頁。
 ——「テレビ演出論——解放の論理」志賀信夫編『現代テレビ講座』（第3巻ディレクター・プロデューサー編）ダヴィッド社、1960年、99-119頁。
 『大テレビドラマ博覧会——テレビの見る夢』早稲田大学演劇博物館、2017年。
 『和田勉演出作品リスト』放送文化基金助成金事業「和田勉関連資料を中心とした初期テレビドラマに関する実証的研究」（代表・木原圭翔）、2018年。
 飯島正旧蔵スクラップブック（早稲田大学演劇博物館所蔵、資料番号：飯島正 24-1）
 『檻の中』決定稿（早稲田大学演劇博物館所蔵、資料番号：タ 06 3603）
 『檻の中』決定稿（早稲田大学演劇博物館所蔵、資料番号：タ 05 237）
 『檻の中』創作ノート（個人蔵）
 『帰ってきた人』第一稿（早稲田大学演劇博物館所蔵、資料番号：タ 05 214）
 『帰ってきた人』第二稿（早稲田大学演劇博物館所蔵、資料番号：タ 05 215）



木原 圭翔 (きはら・けいしょう)

[生年月] 1984年10月

[出身大学または最終学歴] 慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了、早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了 博士(文学)

[専攻領域] 映画理論、テレビ論

[主たる著書・論文]

『「サイコ」における予期せぬ秘密——『ヒッチコック劇場』と映画観客』『映像学』第97号(2017)

[所属] 東京大学大学院情報学環 特任研究員

[所属学会] 日本映像学会、美学会

The Simplicity in the *Inside of a Cage* (1957) : the “Invention” of Television by Ben Wada and Tadashi Iijima

Keisho KIHARA*

Just after NHK (Japan Broadcasting Corporation) started to television broadcasting in February 1953, Ben Wada, one of the most acclaimed Japanese television directors, also began to make a number of unique television works. Although his early works have often been criticized for being esoteric, its uses of ingenious close-ups have brought him great fame.

This article analyzes one of the Wada’s earliest television works, *The Inside of a Cage* (*Ori no Naka*, 1957, considered a lost work) to investigate his vision of Japanese television. According to Wada, the whole story was not essential for this work because the main theme was a man’s escape from the “cage” in the middle of the story just like Robert Bresson’s masterpiece *A Man Escaped* (1956), which made deep impression on him. However, the scriptwriter Tadashi Iijima, who was a famous film critic, put a high priority on the story which includes Hitchcockian twist ending and main character’s change of feeling toward ex-girlfriend. Although they both pursued the simplicity in this work which only television could accomplish, there was a subtle difference between their viewpoints on storytelling of television. In investigating the existing scripts and other materials of the work, we can find some traces of their conflict.

* Project Researcher, Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo

Key Words : Ben Wada, Tadashi Iijima, Television Works, NHK, Television Theory.



查讀研究論文

REFEREED PAPERS

医療 IT 化による医療の質と生産性に与える影響の研究

— 国立病院機構病院における実証分析 —

IT Utilization Impact on Health Care Quality and Productivity:
Empirical Analysis on National Hospital Organizations

三宅 講太郎*
Kotaro Miyake

1. 緒言

超高齢社会を迎えた日本は、毎年1兆円規模で増加する医療費の適正化や疲弊する医療提供体制の維持などの社会課題に直面している。国民医療費の高い水準の伸びに伴い、医療保険財政は慢性的な赤字に陥っており、健康・医療分野における抜本的な構造改革が急務となっている。厚生労働省の社会保障給付費の見通しによれば、国内の医療消費の指標となる国民医療費は、1990年の20.6兆円から2025年には60兆円を超えると推計されている（前田、2018）。

日本の国民医療費の50%以上は、65歳以上の高齢者の医療費であり、高齢者の一人当たり医療費は他の世代と比較しての約5倍のコストである。2060年には、日本における高齢者が総人口に占める割合は4割に達すると予想されており、医療保険財政を支える現役世代の負担が今後も高まることが予想され、経済に与えるマイナスの影響も懸念されている（石橋、2013）。アメリカでは1980年代に医療費の急増

に対抗して医師の裁量権への国の介入により医療費は抑制された。その結果、医療は市場原理に基づく競争にまきこまれ、保険会社によりマネージされた管理医療が広がることとなり、医療の効率化や医療の質の向上が求められてきた。日本でも保険制度の違いはあるが、医療費はこのまま増加を続ければ財政の破綻をきたすことが容易に想像される。医療機関には医療の効率化による医療費の抑制が求められ、さらに医療事故報道の増加などにより医療の情報公開が叫ばれ、質のよい医療を提供する努力も求められている（佐藤、2001）。

医療を効率化するためには、診断や治療を正確かつ迅速に、適正な費用で行う必要がある。医療の効率化において収支を考えることは必要なことであり、これまで医療の効率化では、医療材料、医薬品費、人件費などのコストの削減を中心に考えられてきた。しかしながら、在院日数の延長や長い待ち時間も患者にとっては損

* 東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：IT技術の活用、医療の質、生産性、国立病院機構

失であり、時間もコストの要素と考えれば、診断・治療にかかる時間の短縮はコスト削減と同等であると解釈できる（佐藤、2001）。また、医療の効率化においては医療の質の改善が伴わなければならない。¹⁾

日進月歩で発展する IT をはじめとした技術は、近年、モバイル化の進展やクラウドサービスの普及等により、ネットワーク活用の可能性が広がりつつあるとともに、ビッグデータやオープンデータといった情報の活用について、新たな付加価値創造への期待が高まっている。日本政府は、平成 13 年に高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部（IT 戦略本部）を設置して以来、こうした技術を活用した高度な IT 利活用社会の実現に向けた議論を続けてきた。医療等分野において、IT を適切に活用することにより、より質の高いサービス提供の実現に資することができる可能性が報告されている。2001 年、厚生労働省より「保険医療分野の情報化に向けてのグランドデザイン」が出され、以降、多くの医療情報化の IT 化が進められてきた。²⁾ IT 化されたデータを駆使することにより、症状の重症化を未然に防ぎ、検査・処方重複を回避できるため、不要不急の受診を抑制し、医療費の削減につながる（石橋、2013）。また、2018 年度からの段階的運用、2020 年度からの本格運用を目標に、医療保険のオンライン資格確認のインフラを活用し、医療機関等間の患者情報の共有や、医学研究におけるデータ管理等に利用可能な「医療等分野の情報連携に用いる識別子」を導入することが予定されており、マイナンバー制度のインフラと健康保険の既存インフラをうまく組み合わせる

ことにより、資格確認を確実に実施することが検討されている。マイナンバーシステムと医療関連のシステムを連動することは、医療の現場における医療情報の共有により医療の効率化を可能にし、集積された病気や治療に関する個人の医療データを活用することで、各患者に対する医療の質の向上、医療機関のサービスの最適化、地域医療資源の管理－機能分担の最適化、医療政策・制度の改善につながる事が期待されている（後魚谷・武富・藤井・根岸、2015）。IT の活用は医療分野を含む様々な分野において生産性に影響を及ぼすことが報告されているが、病院業務における生産性にどのように影響するかは明らかでない。

本研究の意義は、医療現場における IT 技術の活用が医療の効率性と質、病院における生産性にいかなる効果を与えるのかを実証的に示すことにある。これまでに国立病院のみならず、自治体病院において、医療の効率性と病院における生産性との関連を検証した報告は存在した（足立、2013）。しかしながら、医療における IT 技術の普及が、生産性の変化や医療の質、医療の効率性に及ぼす影響を分析した研究は存在しない。国立病院機構では、臨床評価指標を用いた医療の質評価に取り組んでおり、その結果はホームページ上で公開されている。³⁾ 「領域別指標（疾患特異的な指標）」と「病院全体指標（領域に関わらず共通に評価可能な指標）」が存在し、疾病横断的指標は急性期の 17 領域（循環器、呼吸器、脳卒中、がん、骨・運動器等）とセーフティネット系の 5 領域（重症心身障害者、神経・筋、結核、精神等）とで構成されている。また国立病院機構内のための

診療情報データベースとして国立機構病院全体のデータがNHO 診療情報データバンク (MIA: Medical Information Analysis Databank) に登録されており、医療の質を公開されたデータを用いて評価可能であり、他の要素との検証を行う上で非常に有用である。また、国立病院機構では、平成 26 年に閣議決定された「世界最先端 IT 国家創造宣言」に基づいて、平成 27 年より「電子カルテデータ標準化等のための IT 基盤構築事業」が実施され、標準化されたデータの収集により、医療の内容とその結果を比較・分析することが可能であるため、IT 技術

の普及が医療に及ぼした影響を検証することが可能である。

本研究においては、国立病院機構における IT 技術の活用が、国立病院機構全体で医療の質と生産性に及ぼした影響について分析するとともに、機能別にグループ化した場合の医療の質と生産性についても比較することにより、臨床現場において、IT 技術活用の効果と医療の質、生産性の向上に対する影響を検討し、IT 基盤事業の前後で生産性と医療の質がどのように変化したかについても検証を行った。

2. 分析対象と分析方法

2.1 分析対象

分析対象は独立行政法人国立病院機構病院の財務諸表および臨床評価指標や各病院のホーム

ページ、厚生労働省公表データなどを用いた。対象年度は平成 22-28 年度とした。³⁵⁾

2.2 分析方法

独立行政法人国立病院機構の平成 22-28 年度の公表データを用い、以下の指標を算出した。臨床評価指標である「医療の質」は、分析対象から「臨床評価に関する指標」を算出した。対象期間の国立病院機構の財務諸表を用いて「生産性」を算出した。国立病院機構全体の IT 化投資額の入手は困難であったため、IT 投資による資本蓄積と技術革新による TFP (Total

Factor Productivity: 全要素生産性) の上昇率が経済的な成長に寄与しているとの報告を鑑み、TFP 上昇率を IT 化の指標とすることとした (Solow, 1957)。TFP 上昇率は対象期間の財務諸表を用いてコブ・ダグラス型生産関数を仮定して計測し算出した (Cobb and Douglas, 1928)。

2.2.1 生産性指標

病院に業務における生産性指標として、労働分配率、付加価値率、病床利用率、平均在院日数、紹介率、逆紹介率を選定した。非財務指標

として、人的資源の投入と算出の関係に着目し、病院経営の中心的な資源である人材の活用程度や病床管理において診療収益等を左右する

と思われる機能性を測る指標を選定した。

2.2.2 臨床評価指標

「医療の質」を測る指標として臨床評価指標を定義する。ここでは、Donabedian が示した Donabedian Model「Structure（構造）」、「Process（過程）」、「Outcome（成果）」を用いる。Structure は医療を提供するための体制、Process は医療者により実施された診療やケアの内容の評価、Outcome は診療・ケアにより実際に得られた効果を評価するとされている（Donabedian, 1968; 1980）。従来の医療の質評価においては Structure の評価が中心であり、例えば病院機能評価も主に Structure に関して評価が行われていたが、本研究では Process や Outcome を数値化して評価する臨床評価指標を医療の質を測る指標として定義する。2012年度医療の質評価・公表推進事業における臨床評価指標に基づく、全体指標、領域別指標、患者満足度指標の内容は以下の通りである。臨床評価指標は、国立病院機構「医療の質の評価・公表推進事業における臨床評価指標」をもとに平岡らの評価法と同様の方法を用いた。

<病院全体指標>

- ・手術ありの患者に対する肺血栓塞栓症の予防対策の実施率
- ・手術ありの患者に対する肺血栓症の発生率
- ・退院患者の標準化死亡比（国立病院機構全体のみ）

2.2.3 各生産性指標の計測

* (労働分配率) = (付加価値額) / (人件費)

* (付加価値率) = (付加価値額) / (売上高)

<領域別指標>

- ・急性脳梗塞患者に対する早期リハビリテーション開始率
- ・急性脳梗塞患者に対する入院2日以内の頭部CT撮影もしくはMRI撮影の施行率
- ・急性脳梗塞患者における入院死亡率（国立病院機構全体のみ）
- ・急性心筋梗塞患者に対する退院時アスピリンあるいは硫酸クロピドグレル処方率
- ・PCI（経皮的冠動脈インターベンション）を施行した患者（救急車搬送）の入院死亡率（国立病院機構全体のみ）
- ・乳がん（ステージI）の患者に対する乳房温存手術の施行率
- ・人工関節置換術 / 人口骨頭挿入術における手術部位感染予防のための抗菌薬の術後3日以内の中止率
- ・人工膝関節全置換術患者の早期リハビリテーション開始率
- ・出血性胃・十二指腸潰瘍に対する内視鏡的治療（止血術）の施行率

<患者満足度指標>

・入院患者における総合満足度

・外来患者における総合満足度

* (付加価値額) = (経常利益) + (人件費) + (賃借料) + (減価償却費) + (金融費用)

+ (租税公課)

* (労働生産性) = (付加価値額) / (従業員数)

2.2.4 TFP 上昇率の算出

TFP 上昇率の算出には、経済産業省が発行している「中小企業白書」に掲載されている TFP 上昇率の計測を参考にし、TFP 上昇率を計測した。

* (TFP 上昇率) = (付加価値額増減率) - (労働分配率 × 期末従業員数増減率) - (資本分配率 × 有形固定資産額増減率)

TFP 上昇率算出に用いた指標の算出は以下のように規定した。

* (労働分配率) = (給与総額) / 付加価値額

* (資本分配率) = (1 - 労働分配率)

TFP レベルにはコブ・ダグラス型生産関数を用いて計測を行った。各変数には、それぞれ Y に各企業の付加価値額、L に各企業の期末従

業員数、K に各企業の有形固定資産額を用いた。また、労働分配率 a については、「中小企業白書」の定義どおり、(給与総額 / 付加価値額) を用いた。給与総額は (期末従業員数 × 平均年間給与) で計測した。資本分配率は $(1 - a)$ で求めた。⁶⁾

$$Y = AL^a K^{1-a}$$

A の部分を TFP レベルとする。この式を変形し、A について整理すると TFP レベルを算出する式となる。

$$A = Y/L^a K^{1-a}$$

この生産関数を対数変換すると

$\log A = \log Y - a \log L - (1 - a) \log K$ となる。

2.2.5 TFP 上昇率とその他の各因子の相関の検討

TFP 上昇率と、労働分配率、付加価値率、病床利用率、売上高、人件費、平均在院日数、紹介率・逆紹介率、入院患者・外来患者における総合満足それぞれの関連について検討するために、平成 22-28 年度の TFP 上昇率と各因子の相関を検討した。TFP 上昇率、労働分配率、付加価値率、病床利用率を算出した。売上高、

人件費、平均在院日数、紹介率・逆紹介率、入院患者・外来患者における総合満足は独立行政法人国立病院機構病院のホームページから入手した。^{3,4)} TFP と各因子の相関分析を行った。本研究の有意水準はそれぞれ 5% とした。統計処理は、統計ソフト (JMP 10、SAS Institute Japan、Tokyo) を用いて行った。

3. 結果

3.1 国立病院機構全体での分析

3.1.1 生産性の推移と TFP 上昇率との関連

国立病院機構全体における売上高、従業員数は経年で増加していた。平成 22 年度の売上高

は 8,152 億円、平成 28 年度は 9,255 億円、従業員数は 52,303 人、平成 28 年度は 61,096 人であっ

た。人件費は平成 22 年度が 4,588 億円、平成 28 年度が 5,266 億円と 688 億円増加したのに対して、付加価値額は平成 22 年度が 5,895 億円、

平成 28 年度が 6,070 億円と 175 億円増加していた（図 1a, b）。

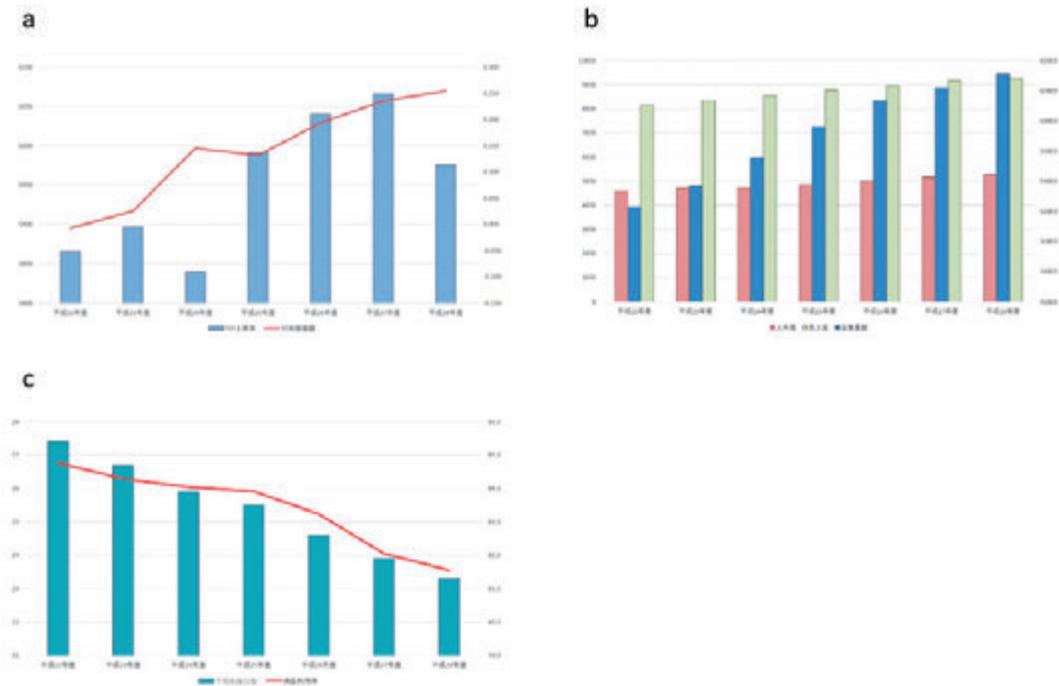


図 1. 生産性の推移と TFP 上昇率， a: TFP 上昇率と付加価値額、出所) 筆者作成， b: 従業員数と売上高・人件費・付加価値額、出所) 筆者作成， c: 平均在院日数と病床利用率、出所) 筆者作成

労働生産性は、平成 22 年度 1.12 億円、平成 28 年度 0.99 億円、付加価値率は、平成 22 年度 0.723、平成 28 年度 0.656 と経年で低下、労働分配率は、平成 22 年度 0.778、平成 28 年度 0.868 と経年で上昇していた。平均在院日数平成 22 年度 27.4 日、平成 28 年度 23.3 日、病床利用率は平成 22 年度 84.8%、平成 28 年度 81.6% と経年低下、紹介率・逆紹介率はそれぞれ平成 22

年度 59.0、46.8、平成 28 年度 73.0、59.5 とやや増加していた（図 1c）。

労働分配率は TFP 上昇率と相関、労働生産性、付加価値率、平均在院日数病床利用率は TFP 上昇率とは逆相関であった。紹介率、逆紹介率は、それぞれ、TFP 上昇率と相関していた。付加価値率、平均在院日数、病床利用率は TFP 上昇率とは逆相関を示していた（表 1）。

表 1 : TFP 上昇率との相関係数（病院機構全体）

因子	相関係数	p値 (t値)
付加価値額	0.694	0.012 (3.045)
売上高	0.809	0.002 (3.820)
人件費	0.779	0.003 (4.258)
従業員数	0.817	0.001 (4.481)

因子	相関係数	p値
労働分配率	-0.772	<0.001 (-3.844)
付加価値率	-0.830	<0.001 (-4.699)
病床利用率	-0.686	0.014 (-2.981)
平均在院日数	-0.753	0.005 (-3.624)
紹介率	0.735	0.007 (3.424)
逆紹介率	0.768	0.004 (3.793)
入院患者における総合満足度	0.645	0.023 (2.670)
外来患者における総合満足度	0.707	0.010 (3.164)

出所) 筆者作成

3.1.2 医療の質の推移と TFP 上昇率との関連

病院全体指標の医療の質として、肺血栓予防実施率が平成 22 年度 93.9%、平成 28 年度 91.7%、肺血栓症発生率が平成 22 年度 0.14%、平成 28 年度 0.20%、退院患者死亡比 1 未満の割合は平成 22 年度 46.7%、平成 28 年度は 62.5% であった。

領域別指標の医療の質として、脳梗塞関連項目は、急性脳梗塞患者に対する早期リハビリテーション開始率は平成 22 年度 72.8%、平成 28 年度 89.3%、急性脳梗塞患者に対する入院 2 日以内の頭部 CT 撮影もしくは MRI 撮影の施行率が平成 22 年度 94.9%、平成 28 年度 95.9%、急性脳梗塞患者における入院死亡率は平成 22 年度 2.24%、平成 28 年度 1.50% であった。心筋梗塞関連項目は、急性心筋梗塞患者に対する退院時アスピリンあるいは硫酸クロピドグレル

処方率は平成 22 年度 92.3%、平成 28 年度 67.9%、PCI を施行した患者の入院死亡率が平成 22 年度 2.64%、平成 28 年度 2.50% であった。その他の項目として、乳がん（ステージ I）の患者に対する乳房温存手術の施行率が平成 22 年度 78.7%、平成 28 年度 67.9%、人工関節置換術 / 人口骨頭挿入術における手術部位感染予防のための抗菌薬の術後 3 日以内の中止率が平成 22 年度 65.0%、平成 28 年度 82.3%、人工膝関節全置換術患者の早期リハビリテーション開始率が平成 22 年度 94.8%、平成 28 年度 97.2%、出血性胃・十二指腸潰瘍に対する内視鏡的治療（止血術）の施行率が平成 22 年度 69.7%、平成 28 年度 64.2% であった。医療の質は病院全体指標、領域別指標ともに TFP 上昇率との関連は認められなかった。

3.1.3 患者満足度の推移と TFP 上昇率との関連

患者満足度としては、入院患者における総合満足度は平成 22 年度 45.6%、平成 28 年度 45.9%、外来患者における総合満足度は平成 22

年度 41.2%、平成 28 年度 41.6% と大きな変化は認められなかったが、経年では上昇しており、TFP 上昇率との関連が認められた（表 1）。

TFP 上昇率と付加価値額、売上高、人件費、従業員数、労働分配率、付加価値率、病床利用率、平均在院日数、紹介率、逆紹介率、入院患者における満足度、外来患者における満足度と

の相関係数は、それぞれ 0.694、0.803、0.770、0.817、0.772、-0.830、-0.686、-0.753、0.735、0.768、0.645、0.707 であった。

3.2 病院機能別分類

国立病院機構全体の IT 化が全国 143 国立病院の医療の質と生産に及ぼした影響を病院機能別分類に検討するために、国立病院機構 143 病院を機能別に 6 グループ（①一般病床 500 床以上 13 病院、②一般病床 350～499 床 23 病院、

③一般病床 349 床以下 14 病院、④障害医療 45 病院、⑤精神医療 14 病院、⑥複合医療 33 病院）として分類し、一般病床を有する 3 グループの病院を評価の対象とした。病床数による分類は平岡らと同様に分類した。

3.2.1 生産性の推移と TFP 上昇率との関連

病床数別の平成 22 年度と平成 28 年度売上高と人件費は以下の通りであった。① 500 床以上の病院では売上高 155 億円、175 億円、人件費 66 億円、82 億円、② 350～499 床の病院では、売上高 88 億円、105 億円、人件費 39 億円、52 億円、③ 349 床以下の病院では売上高 46 億円、55 億円、人件費 22 億円、29 億円であった。

平成 22 年度と平成 28 年度の付加価値額、労働分配率、付加価値率は、① 500 床以上の病院

ではそれぞれ付加価値額 91 億円、97 億円、労働分配率 0.728、0.849、付加価値率は 0.587、0.552、② 350～499 床の病院では、付加価値額 53 億円、63 億円、労働分配率 0.787、0.857、付加価値率は 0.599、0.606、③ 349 床以下の病院では、付加価値額 27 億円、34 億円、労働分配率 0.875、0.881、付加価値率は 0.580、0.625 であった（図 2）。

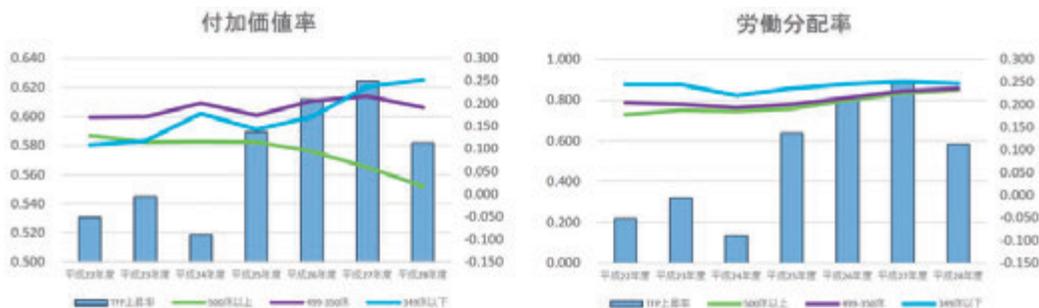


図 2. 病床別の付加価値率と労働分配率、出所）筆者作成

500床以上の病院、350-499床の病院において労働分配率の増加を認めた。付加価値率は、350-499床の病院、349床以下の病院では増加

しており、TFP上昇率と相関していたが、500床以上の病院の付加価値率が減少しており、TFP上昇率と逆相関であった（表2）。

表2：TFP上昇率との相関係数（病院機能別）

	付加価値率	労働分配率
500床以上	-0.541 †	0.749 **
499-350床	0.556 †	0.689 *
349床以下	0.543 †	0.617 *
全体	-0.830 **	0.772 **

†=0.1, *p<0.05, **p<0.01

出所) 筆者作成

3.2.2 医療の質の推移とTFP上昇率との関連

病床数別の平成22年度と平成28年度の病院全体指標の医療の質は以下の通りであった。

① 500床以上の病院では肺血栓予防実施率は92.7%、92.4%、肺血栓症発生率は0.16%、0.21%、② 350-499床の病院では、肺血栓予防実施率は94.2%、91.5%、肺血栓症発生率は0.23%、0.22%、③ 349床以下の病院では肺血栓予防実施率は97.8%、90.2%、肺血栓症発生率は0%、0.21%であった。領域別指標の医療の質として、脳梗塞関連項目は、急性脳梗塞患者に対する早期リハビリテーション開始率は、① 500床以上の病院、② 350～499床の病院、③ 349床以下の病院ではそれぞれ、平成22年度は71.7%、72.0%、75.7%、平成28年度は92.6%、91.7%、80.8%、急性脳梗塞患者に対する入院2日以内の頭部CT撮影もしくはMRI撮影の施行率は平成22年度97.3%、95.6%、85.0%、平成28年度96.2%、94.9%、95.7%であっ

た。心筋梗塞関連項目は、急性心筋梗塞患者に対する退院時アスピリンあるいは硫酸クロピドグレル処方率が平成22年度94.0%、90.7%、97.6%、平成28年度85.6%、83.8%、73.2%であった。その他の項目として、乳がん（ステージI）の患者に対する乳房温存手術の施行率は平成22年度77.0%、77.5%、81.4%、平成28年度66.6%、65.4%、73.4%、人工関節置換術/人口骨頭挿入術における手術部位感染予防のための抗菌薬の術後3日以内の中止率は平成22年度81.5%、60.4%、33.4%、平成28年度88.1%、70.9%、87.6%、人工膝関節全置換術患者の早期リハビリテーション開始率は平成22年度93.8%、96.3%、100%、平成28年度97.2%、96.8%、98.2%、出血性胃・十二指腸潰瘍に対する内視鏡的治療（止血術）の施行率が平成22年度69.9%、68.5%、56.9%、平成28年度69.5%、65.7%、60.1%であった。医療の質は病

院全体指標、領域別指標ともに病床数別では明らかな違いは認めなかった。脳梗塞 CT/MRI 施行率は 349 床以下の病院において比較的強い

相関を示し、人工関節置換術の抗菌薬中止率は全体と比較して 349 床以下の病院において TFP 上昇率と強い相関を示していた（表 3）。

表 3：TFP 上昇率との相関係数（病院機能別）

	肺炎症予防 実施率	肺炎症発生率	脳梗塞/ハビリ	脳梗塞CT/MRI	心筋梗塞 アスピリン処方	乳がん温存術	人工関節置換術・ 抗菌薬中止率	人工関節 リハビリ	胃十二指腸 止血術	入院患者満足度	外来患者満足度
500床 以上	-0.554 †	0.492	0.758 **	-0.126	-0.813 **	-0.828 **	-0.283	0.402	-0.098	0.549 †	0.850 **
499- 350床	-0.750 **	0.437	0.608 *	-0.967 **	-0.788 **	-0.873 **	-0.405	0.090	-0.277	0.568 †	0.670 *
349床 以下	-0.727 **	0.491	0.583 *	0.557 *	-0.545 †	-0.006	0.718 **	0.124	—	0.674 **	0.287
全体	-0.782 **	0.427	0.741 **	0.097	-0.538 †	-0.892 **	0.249	0.323	-0.247	0.645 *	0.707 *

† $p < 0.1$, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

出所) 筆者作成

3.2.3 患者満足度の推移と TFP 上昇率との関連

病床数別の平成 22 年度と平成 28 年度の病院全体指標の医療の質は以下の通りであった。① 500 床以上の病院では入院患者における総合満足度が 45.7%、45.6%、外来患者における総合満足度が 41.8%、41.8%、② 350-499 床の病院では、入院患者における総合満足度が 45.5%、46.2%、外来患者における総合満足度が 40.7%、41.8%、③ 349 床以下の病院では入院患者にお

ける総合満足度が 45.5%、45.7%、外来患者における総合満足度が 40.3%、40.9%であった（図 3）。患者満足度と TFP 上昇率との相関は、入院患者満足度は病床別では大きな違いは認めなかったが、外来患者満足度は、大規模病院ほど TFP 上昇率との相関が認められ、349 床以下の病院では弱い相関であった（表 3）。

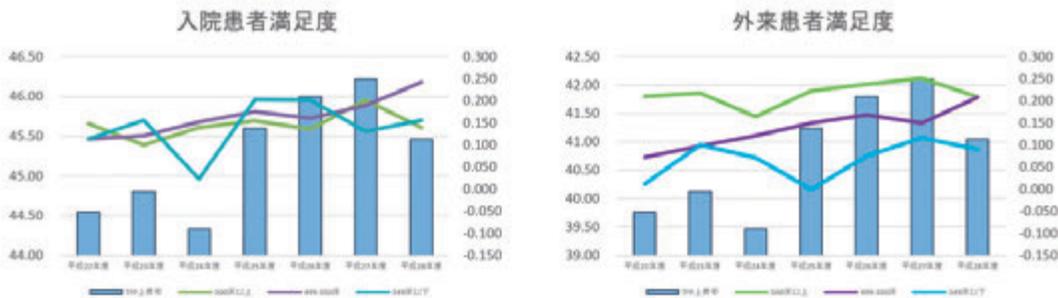


図 3. TFP 上昇率と医療の質（患者満足度）、出所) 筆者作成

4. 考察

近年、IT 技術の発展は著しく、モバイル化の進展やクラウドサービスの普及により、ネットワーク活用することにより、大規模なデータを有効に活用でき、多くの分野において新たな付加価値を生み出している。医療の分野においても、適切な IT 技術を用いて、社会資源を有効に活用し、より質の高い医療を提供することが期待されている。

IT 技術の活用は、さまざまなイノベーションを誘発する力を有しており、医療の分野において、医療情報連携ネットワークの普及や介護サービスの客観的な評価とサービス内容の向上に資する取組を通じた、効果的・効率的で高品質な医療・介護サービスの展開や、健康増進、医療・健康情報等の各種情報の活用推進により、健康長寿社会の実現を目指すことが可能である。一方、医療分野における IT 技術の活用は、基盤整備に一定の費用がかかるとともに、取り扱う情報はプライバシー性の高い情報が多いため、慎重に施策を進める必要がある。医療における IT の利活用は、コストに見合う有効性と臨床現場におけるデータの共有のセキュリティ上の不安もあり、データの標準化を含む医療情報データベースの共通プラットフォームの作成が順調に進んでいるとは言い難い。さらに、医療 IT は医療コストの削減と医療ミスの減少を通じた医療安全の確保を目的とて導入が進められてきた（和田、2010）。経済的なコストの削減はある一定の効果が認められているが、医療の本質である医療の質やコストに現れ

ない様々な生産性についてのこれまでほとんど報告されていない（中医協、2006）。

本研究では、国立病院機構内のためのホームページ上に公開されている業務実績と財務諸表から算出した指標を用いて、IT 技術の活用が国立病院機構全体における生産性と医療の効率性の指標としての医療の質への関連を検討した。さらに、国立病院機構全体の IT 化が全国の一般病床を有する各国立病院の医療の質と生産の関連を病院機能別分類に比較検討した。

今回の検討では、2000 年以降の電子カルテやデータベースの普及が進み、医療の現場における IT 技術の活用が全国の病院において成熟したと思われる時期と、平成 22 年から平成 28 年にかけての効率的な医療の提供を行うために、医療の質の評価が国立病院機構において行われた時期において、医療の現場において IT 化が国立病院機構全体と国立病院の各病院における、医療の生産性の上昇や医療の質を向上、医療の効率化に関連することを検証した。平成 27 年度には、国立病院機構において「電子カルテデータ標準化等のための IT 基盤構築事業」が実施されており、事業の前後での医療の質と生産性に変化があることを予想して検証を行った。まず IT 化の指標として用いた TFP 上昇率が IT 基盤構築事業後の平成 28 年に低下している理由については明らかでないが、事業により導入されたシステムが機能するまでに時間を要するのか、もしくは本研究における IT 技術活用の指標としての問題かは今後検証

する必要がある。ただ、平成 28 年度の TFP 上昇率は平成 25 年度と同程度であり、今後の経過を見ていきたい。次に、国立病院機構における IT 技術の活用により、機構全体の付加価値額は上昇し、いくつかの指標において、医療の質の向上が認められた。患者満足度は上昇し、平均在院日数は減少していたが、病床利用率は低下していた。IT 活用は、医療の現場における効率化に寄与し、在院日数の減少により、病院利用率が低下した可能性もあるが、このことは病床数が病院の実際の機能と比較して過剰であり、病床数を減らすことにより、コストの削減を含む生産性の向上をさらに目指すことが可能であることを示唆していると思われる。

病院機能別に見た場合、医療の質において病院全体指標、領域別指標に病院の規模別には大きな違いは認めなかったが、350-499 床と 500 床以上の病院において入院、外来ともに患者の満足度の上昇が認められた。個別のシステムにより、患者満足度が変化するものではないが、一つの可能性として、中小規模病院では、継続的な入院患者の確保が難しく、入院患者の平均在院日数を短期間、延長することで病床利用率を維持し、一定の診療報酬を得ており、早期の退院や他院へのスムーズな紹介が患者満足の上昇に寄与していない。一方、350 床以上の急性期病院では平均在院日数が短く高額な診療報酬が見込める急性期医療の提供が効果的であり、一定の入退院が可能になるよう、スムーズな退院システムの構築が役になった可能性がある。機構全体の平均在院日数の減少や病床利用率の低下や紹介率の上昇から、機構全体における

IT 技術の導入と活用により、早期の退院や転院が可能となり、患者満足度が上昇していることが想像される。

治療内容の観点から考えると、中小規模病院では、検査が効率的で、処置、手術は非効率であることから、慢性期への治療が病院の生産性の上昇に寄与するが、大規模病院では処置、手術を行うことにより効率的に売り上げが増加するため、急性期の治療が重要であることが予想される（足立、2013）。実際に、病院全体指標と領域別指標で見た医療の質の変化においては、規模ごとの明らかな違いは認められなかったが、外来患者の満足度の変化は大規模病院と比較して中小規模病院において顕著であり、中小規模病院において重要な役割である外来診療における質の向上に寄与していると考えられた。

生産性について、500 床以上の大規模病院では、平成 26 年度以降に付加価値率の低下認められており、IT 技術の活用の指標として用いた TFP 上昇率とは -0.541 と逆相関を示していたが、中小規模病院では TFP 上昇率と付加価値率は正の相関を示していた。平成 27 年度より実施された国立病院機構における「電子カルテデータ標準化等のための IT 基盤構築事業」の効果含めて、大規模病院における IT 化は、サービスの付加価値向上に貢献していないことを意味しており、今回検討した臨床現場における IT 技術の活用は、大規模病院よりも中小規模病院において、より医療のサービスや質の改善に有用であることが示唆された。

5. 結語と今後の課題

今回の検証では、国立病院機構における IT 技術の活用が、機構全体、病床別に見た場合でも、医療の効率化の結果として医療の質の改善につながる可能性が示された。機構全体での労働生産性の低下や労働分配率の上昇から、IT 技術の活用は人員コストの削減や個々の労働者の業務量減少にはつながらない可能性も示されたが、臨床現場である病院への本格的な IT 技術の導入が開始されてから 20 年経過しておらず、初期費用や技術に対する慣れの期間が必要であることを考えると、今後、人件費の削減や個々の生産性の上昇により、病院での労働生産性の上昇が期待できるのではないかと考えている。病床別に見た場合の付加価値率の違いは、IT 技術の活用が、より規模の小さい病院において付加価値を生み出し、利益を出しやすい体質になることを意味しており、治療や手術、入院よりも外来、検査等の業務の効率化に有効であると予想できる。各病院の正確な IT 技術活用の指標が明らかになれば、より精度の高い分析が可能になると考えている。最後に、今後の課題として 2 つ挙げる。本稿では IT 化の指標として TFP（全要素生産性）を用いた。本研究において最も苦慮したのが、IT 化の指標として何を用いるかということである。我々は以前に、日本国内における大手製薬産業の IT 技術の活用が製薬企業の生産性や臨床試験に及ぼす影響について検討したが、その際には全売上高の 1% を IT 投資と仮定して検証を行った（投稿中）。病院であれ企業であれ、IT 化のコスト

のみを公表していることはほとんどなく、IT 化のコストや IT 技術の活用を測るためには、何らかの代替指標を用いる必要があると考えており、今後の課題として、適切な指標を探していきたい。次に、病院における IT 化の定義についてである。病院での IT 技術は受付システム、オーダーリングシステム、電子診療録システム等、多岐にわたり、過去には、電子診療録システムを IT 化の指標としている報告も存在する（沢田、2002; 川淵、2006; 高橋、2007; 長谷川、2009）。我々はそれらのように個別のシステムのみで IT 化の評価を行うことには懐疑的であり、その理由として、一つのシステムのみによる効率性の改善が起こるような業種は存在せず、複数の IT システムの相互作用により、業務の効率化は起こると考えているからである。今回の検討でも、ある部分のみに注目すれば、患者満足度の改善などは受付システムに電子診療録システムによる患者のストレスの軽減が考えられ、また、手術申し込みの電子化等による、手術期間の短縮や電子機器の高度化による手術時間の短縮が手術成績の向上につながっていると考えられる。今回の検証では、医療現場において複数の IT 化により、医療に関連する複合的な要素が最終的なアウトプットとしてどのような結果をもたらすのかを調べることを目的とした。病院業務における IT 化の業務の効率改善やアウトプット向上を調べた研究はこれまでに存在しないと考えている。医療現場におけるさまざまな IT 関連システムの病院業務

に及ぼす影響を調べるために、様々な IT システムをまとめて評価するために本文のような手法を用いたが、病院業務における IT システムをどこまで含めるかについても今後の課題としたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、東京大学・須藤修教授からは、本研究の期間を通じて熱意あるご指導を頂いた。この場を借りて厚くお礼申し上げたい。なお、本稿における主張・誤りは全て筆者に帰するものであり、ご指導を頂いた先生やご意見を頂いた方々の見解を示すものではない。

註

- 1 井上通敏：日本の医療改革と医療情報学，第3回日本医療情報学会シンポジウム。 <http://www.onh.go.jp/enkaku/shiryo/iryoukaikaku.html>, 1999 (2018.8.22 参照) による。
- 2 厚生労働省保健医療情報システム検討会：保健医療分野の情報化に向けてのグランドデザイン
平成13年3月28日より保健医療情報システム検討会において検討を開始し、保健医療分野の情報化に関する理念と目的、現状、将来像と、それに向けた現在の目標と課題などについて総合的に取り上げ、同年8月8日に第一次提言として、その基本的な考え方が示され、その後、平成13年9月25日に、厚生労働省の医療制度改革試案が公表された。この改革試案においては、医療保険制度改革のみならず、今後の医療のあるべき姿についても別添「21世紀の医療提供の姿」の中で示されるなど、21世紀のわが国の医療に関する総合的・包括的な制度改革案となっている。この中で、保健医療分野における情報化についても重要な柱の一つと位置づけられ、これを着実に実施するため、グランドデザインを策定することが表明された。 <http://www.mhlw.go.jp/shingi/0112/s1226-1a.html>, 2001 (2018.8.22 参照) による。
- 3 国立病院機構 ホームページ、診療事業、臨床評価指標から本研究の対象項目となる病院全体指標、領域別指標を用いた。年度、病院のより評価していない項目がある場合は、評価病院のみの値で検討を行った。 https://www.hosp.go.jp/treatment/treatment_rinsyo.html (2018.8.22 参照) による。
- 4 国立病院機構 ホームページ、情報公開、財務諸表 https://www.hosp.go.jp/disclosure/disclosure_zaimu.html (2018.8.22 参照) による。
- 5 厚生労働省 ホームページ、施設概要表を参照し、本研究の対象のみ抽出して用いた。 <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001u23a-att/2r9852000001u908.xls> (2018.8.22 参照) による。
- 6 経済産業省「2018年版 中小企業白書」 http://www.chusho.meti.go.jp/pamflet/hakusyo/H30/PDF/h30_pdf_mokujityuu.htm (2018.8.22 参照) による。

参考文献

- C. W. Cobb and P. H. Douglas (1928) "A Theory of Production" *American Economic Review*, Vol. 18, No. 1, pp. 139-165.
- Donabedian A (1966) "Evaluating the quality of medical care" *Milbank Mem Fund Q*, 44(3): 166-203.
- Donabedian A (1980) "The definition of quality and approaches to its assessment" *Explorations in quality assessment and monitoring (Volume 1)*. Health Administration Press.
- Solow R, (1957) "Technical Change and the Aggregate Production Function" *The Review of Economics and Statistics* vol39, No.3, pp312 - 320.
- 足立泰美 (2013) 「自治体病院の効率性 - 医療機関機能分化と地域医療連携 -」『会計検査研究』第 47 号 pp.169-180.
- 石橋未来 (2013) 「超高齢化社会効率化を考える -IT 化を推進し予防・健康・相談を中心とした包括的な医療サービスへ-」『大和総研 経済社会研究班レポート』No.14.
- 川渕孝一 (2006) 「医療 IT の経済性評価」に関する研究報告 保健医療福祉情報システム (JAHS) 委託研究.
- 御魚谷武、武富真理子、藤井宏紀、根岸大夢 (2015) 「健康・医療戦略における ICT 政策動向」『FUJITSU』, 66(2), pp.9-15.
- 小酒井正和、関谷弘幸 (2015) 「病院における経営管理と It 戦略の関係性」『玉川大学工学部紀要』, 第 50 号, pp.33-42.
- 佐藤弥 (2001) 「医療の効率化と医療の質」『山梨医大誌』, 16(1), pp.1-7.

- 沢田勝寛 (2002) 「病院における IT 投資の意義と問題点」『神戸大学ワーキングペーパー』, 2002.7 号, pp.1-28.
- 高橋哲也 (2007) 「電子カルテ導入が病院組織にもたらす効果について」『医療情報学』, 27 (3) , pp. 305-313.
- 西野正人 (2012) 「医療の質と病院経営の質の関係性についての研究」『商大ビジネスレビュー』, 2(1), pp.193-208.
- 長谷川友紀 (2009) 「医療 IT 化が質・安全・効率に及ぼす効果に関する実証的研究」『科学研究費補助金研究成果報告書』
- 平岡紀代美 (2014) 「医療の質と経営の質との関係性 - 国立病院機構病院における実証分析 -」『商大ビジネスレビュー』, 4(2), pp.193-212.
- 前田由美子 (2018) 「社会保障と財政について - 国の 2018 年度予算を中心に -」『日医総研ワーキングペーパー』, 409 号, pp.1-57.
- 和田恭 (2010) 「米国における医療分野の IT 導入にかかる動向」『ニューヨークだより 2010 年 9 月増刊号』, pp.1-30
- 中医協 (2006) 「医療の IT 化に係るコスト調査報告書」『第 11 回 診療報酬調査専門組織・医療機関のコスト調査分科会』, pp.1-63



三宅 講太郎 (みやけ・こうたろう)

[生年月] 1973 年 6 月

[出身大学または最終学歴] 1999 年 徳島大学医学部医学科卒業 (MD)、2006 年 徳島大学医学部博士課程修了 (PhD)、2013 年 関西学院大学経営戦略科終了 (MBA)

[専攻領域] 医療情報学、社会情報学、臨床開発、レギュラトリーサイエンス、臨床腫瘍学、消化器外科

[主たる著書・論文]

1. Apoptosis-inducing factor (AIF) is targeted in IFN- α 2a-induced Bid mediated apoptosis through Bak activation in ovarian cancer cells. *Biochimica Biophysica Acta (BBA) - Molecular Cell Research*. 2012, 1823(8):1378-88.

2. Expression of Hypoxia-Inducible Factor-1 alpha, Histone Deacetylase 1, and Metastasis-Associated Protein 1 in Pancreatic Cancer: Correlation with Poor Prognosis With Possible Regulation. *Pancreas*. 2008 36(3): e1-9.

[所属] 東京大学大学院情報学環・学際情報学府 博士課程

[所属学会] 日本医療・病院管理学会、日本情報経営学会、日本外科学会、日本消化器病学会

IT Utilization Impact on Health Care Quality and Productivity: Empirical Analysis on National Hospital Organizations

Kotaro Miyake*

As Japan enters the era of super-aging society, we are in urgent need of fundamental structural change of the healthcare delivery system with lowering the medical cost and improving health quality. In this research, we investigate the impact of IT utilization on the quality and productivity of the National Hospital Organization. Our result shows that IT utilization improved the quality of medical care, which is an index of efficient healthcare delivery. However, there was no decrease of labor's productivity or no increase of labor's share. With respect to hospital function, labor's share increased at small and medium scale hospitals. Value-added to sales ratio decreased at large scale hospital, and it was inversely correlated with TFP. In addition, patient satisfaction was significantly improved in hospitalized and outpatient clinics at large hospitals.

* Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, the University of Tokyo

Key Words : IT utilization, Health Care Quality, Productivity, National Hospital Organization

昭和初期の『婦人倶楽部』の連載小説における女性の教養と職業

— 鶴見祐輔作『母』(1929)を例として —

Women's Cultural Education and Occupation in Serial Novels in the Early Showa Period:

Focusing on *Mother* by Tsurumi Yusuke(1929)

李 承京*

SeungKyung LEE

1. はじめに

1.1 問題の所在—女性の教養とは

「女性の教養」とは、普通どのような時に言及されるだろうか。例えば美人コンテストがあるだろう。美人コンテストでは、参加者の美貌に加え、彼女の学歴や特技、趣味が問題になる。生まれながらの「美」に、努力して身につける「教養」としての学歴、特技、上品な趣味がプラスされ、「真の美人」の選別基準になるのである。小平はミス・コンテストで「教養」が条件になったということは、美に自分の努力という人間性がプラスされたことを意味し、それによって教養は抑圧の御先棒を担ぐことになったと指摘する(小平,2016)。

しかし女性に教養を求めることは、女性も「人間」になれるという発想から生じるものであり、それは前近代の女性観をひっくり返すもの

でもある。元々、教養とは、本を読むことで人間としての理想的成長を目指すことを意味し、その主体はエリート男性に限られていた。それが、近代に入ってから女性や非エリートにも教養が求められるようになったのである。その意味で、女性に教養を求めることを、女性解放の論理として読み取ることもできるのである。

本稿の分析対象である鶴見祐輔の『母』は、1927年5月から1929年6月まで『婦人倶楽部』で連載された長編小説である。『母』は、作者の鶴見が、1929年の単行本序文で「政治思想のプロパガンダとして小説の形を選んだ」と書いたように、女性啓蒙小説である。そのため、鶴見が女性啓蒙の目的のために駆使した教養のレトリックを分析することで、昭和初期の教養

* 東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：教養主義、昭和初期、職業婦人、『婦人倶楽部』

主義と女性の関係が考察できる。文化的ヘゲモニーによって、教養を達成する方法やそこで求められる具体的な資質の内容が変化し、それぞれの時代状況に応じて「新しい」教養や「現在

1.2 先行研究と本稿の立場

先行研究の確認において、まず近代日本の教養主義と修養主義の関係をまとめる必要がある。筒井によると「修養」という用語・観念が登場し、国民の比較的広い層に社会意識として受容され始めた時期は明治 30～40 年代である。この時期は学生数が急増し、限られた「成功」青年だけが立身出世できる時期で、競争で脱落した「墮落」青年や「煩悶」青年のアノミー状況への対応として「修養」を直接・間接に目的とする思想・運動が多様な形で登場した（筒井,1995）。このような修養主義運動の中で野間清治による講談社の設立は大衆雑誌というマス・メディアを動員し修養主義を広げた運動として注目すべきである。

このような大衆を意識した修養主義ムードの中で学生文化としての教養主義が登場する。旧制高等学校や帝大学生の読書実態を分析した竹内洋は岩波文庫というエージェントを中心としたエリート学生文化の成立を考察し、日本型教養主義を明らかにした（竹内,2003）。竹内によると近代日本の教養主義は学歴エリートが「教養」というメッキによって「インテリ」や「知識人」という身分文化を獲得する手段としての意味も持つ。しかし、竹内も筒井も指摘しているように大衆における修養主義（講談社文化）も学歴エリートにおける教養主義（岩波文化）も人々を教育・啓蒙する論理に基づいて成り

の」教養が語られるとみるとき（渡辺,1997）、『母』は、昭和初期の教養論者が女性に新しく求めた教養の有様が確認できるテキストなのである。

立っている点でむしろ類似している。そして、1930 年代になると一部のエリートだけの大正教養主義は国民を視野に入れた昭和教養主義へ転換する。渡辺かよ子は、河合栄治朗らによって再興した 1930 年代の教養論を分析した（渡辺,1997）。渡辺は、昭和の教養論が、それまでの大正教養主義における「個と普遍をつなぐ媒体を持たない抽象的思考への批判から、エリート男性学生だけではなく、女性や非エリートも含む国民全体を射程にのこした国民的教養論に転換」を試みたと指摘した。渡辺の指摘は、昭和になってから女性も教養を持つべき人間として認識されはじめたことを示唆するが、この時期は、「国民的公共性＝国民雑誌」（佐藤,2002）が成立した時期とも重なる。

このような近代日本の教養主義と修養主義の歴史をふまえると、今までの先行研究は特殊なエリート学生文化にだけ焦点をあてており、大正・昭和に大衆的に広まった教養主義の全体像を読み取るには不十分な議論である。つまり「東大生以外」の教養主義の実体を捉えられていないのである。この議論に女性が含まれていないのは当然である。近代女性の教養主義に関する最近の研究の中で小平麻衣子の『夢見る教養』（2016）は、昭和の教養主義におけるエリート男性と女性の不公平な関係を明らかにした優れた成果である。小平は、女性の教養が職業と結

びついて語られる1つの場として文芸雑誌の投稿欄をあげ、装飾的教養としての文学少女ではなく、実用的教養としての文学の職業化を目指した女性読者と、それを妨害した文壇の既成男性作家の関係を考察した。

しかし、小平が分析した『新女苑』は、高等女子学校卒業生というごく少ないエリート女性をターゲットとした雑誌であるため、昭和の大衆女性に求められた一般的な教養の実体をみるには、十分ではない。斎藤美奈子も指摘したように、女学生は特権階級であり、それ以外の女性のほとんどは家計のために働かなければならない女中や女工だった(斎藤,2000)。本稿は『新女苑』が対象とした女学生より幅広い女性階層として職業婦人を考える。斎藤の分類によると、俸給生活者で、ホワイトカラーの職業婦人も特権階級に近いが、昭和に入ってからの手不足によって学歴を持たない女性も職業婦人に編入することになった。また、雑誌の消費ができるほどの経済的な余裕をまだ持たない女中や女工と比べ、職業婦人は相当な消費力を持っていた。そのため昭和の女性と教養主義と大衆雑誌の関係を考察するにあたって、「職業婦人」という集団を考察すべきである。

講談社発行の『婦人倶楽部』はこの職業婦人がいち早く読んでいた雑誌であり、それゆえ女

学生よりは広い女性層がどのようなテキストを読んでいたかが推測できる資料としての意味を持つ。それゆえ、本稿は一部のエリート男性や女性の間で共有されていた教養主義ではなく、大衆雑誌を中心に広まっていく大衆教養主義を把握するため、『婦人倶楽部』を分析対象として選んだ。『婦人倶楽部』は、「発売禁止になったことは一度もなかった」(社会編・明 1959)との証言からもわかるように、国家順応的な雑誌であり、センセーショナルな三面記事で溢れた月並みの婦人雑誌であった。そのため婦人雑誌研究の中ではほぼ取り上げられていなかった。¹ しかし、学歴や専門的能力を必要としない「モダン職業婦人」²のイメージを前面に出した点で、より一般的な女性をめぐる教養主義と職業に関する言説を確認することができると思われる。

本稿は、①『婦人倶楽部』の主な読者層 ②講談社社長の野間清治と作者の鶴見祐輔の連帯による「母」の企画の詳細を考察することで、『母』が連載された当時の『婦人倶楽部』をめぐる社会的な文脈を明らかにする。そして、『母』のテキストを分析し、「理想的な人間」として生きる方法を語るテキストとしての『母』の意味を考察する。

2. 『婦人倶楽部』における『母』の連載

2.1 『婦人倶楽部』の読者層

戦前の婦人雑誌の読者層の資料として戦前の『女性読書調査』がある。戦前の女性読書調査の主な対象となったのは、「職業婦人」「女学生」

「女工」の階層で、この3者は、知的エリートの女学生と大衆の女工、その間の存在としての職業婦人が社会的に好対照をなしていた(永

嶺, 1997)。この中で「職業婦人」³は、戦前期の日本において従来男性の仕事とされてきたやや事務的で専門的な分野や第3次産業の発展に伴い新しく誕生した分野の職業に就いた女性のこと（山崎, 2009）を言うが、この女性層は大衆雑誌を買うぐらいの消費力を持っていた。それゆえ戦前女性読者調査資料分類でも早い時期に読者層として登場する。

永嶺の戦前女性読者調査資料分類にしたがって、1919年から1935年までの雑誌購読状況を見ると、『婦人倶楽部』が、はじめて読書調査

に登場するのは、職業婦人を対象とした1922年の東京市社会局の『職業婦人に関する調査』である。年齢の幅が広い職業婦人を対象とする調査を見ることで、『婦人倶楽部』の読者層がより明確に見える。1931年の東京府社会課による『求職婦人の環境調査』では、雑誌購読の年齢別の傾向が現れているが、『婦人倶楽部』と『主婦之友』の読者層が集計されている。次の表は年齢別読書傾向表を『婦人倶楽部』と『主婦之友』を中心にまとめた表である。

表1：求職婦人の年齢別『主婦之友』と『婦人倶楽部』の購読傾向⁴

年齢		15未満	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	…	30以上	小計	合計	割合 (%)
婦人倶楽部	単	3	24	51	111	190	198	140	91	66	26	10	…	1	939	1260	39.99
	併	0	2	22	29	60	73	39	44	22	18	3	…	2	321		
主婦の友	単	1	13	19	59	113	84	101	46	46	29	21	…	18	587	747	23.71
	併	1	1	6	11	34	27	24	26	10	7	4	…	2	160		

表をみると、『婦人倶楽部』を読む求職婦人の割合が『主婦之友』より高いことがわかる。

1934年に行われた「職業婦人読書傾向調査」の「愛読雑誌調」でも、14歳から17歳までの少年期と18歳から24歳までの青年期は『婦人倶楽部』を最も多く読んでいたが、24歳以降の成人期では『主婦之友』が最も多く読まれていた。『婦人倶楽部』と『主婦之友』は、職業婦人と女学生の両階層で読まれていたことは確かであるが、『主婦之友』は、20代後半の女性が、『婦人倶楽部』は、10代前半から20代前半の女性が読んでいたことがわかる。このような読者層の相違は、当時の『婦人倶楽部』の編集側も把握していた。『講談倶楽部』の編集長だった原田常治は「『主婦之友』の平均年齢は33歳

ぐらいで『婦人倶楽部』の平均年齢はそれより10歳若い」と話している（社会編・昭, 1959）。

以上、戦前の『女性読書調査』をみると、『婦人倶楽部』は10代前半から20代前半の若い女性の間で幅広く読まれていたことがわかった。特に、職業婦人を対象とした読書調査で、もっとも早い時期に『婦人倶楽部』が登場したことには注目しておきたい。戦前期の日本の都市部では、産業化の進展や第3次産業の拡大に伴う安価で柔軟な労働力需要の高まりによって、職業婦人の数は、1920年から1940年にかけて35万人から175万人への5倍に増加した（山崎, 2009）。職業婦人の教養の理想を語った小説『母』が、職業婦人が読んでいた『婦人倶楽部』に掲載されたことの含意に注目しなければなら

ない。作者の鶴見が職業婦人の読者を意識していたかどうかは、確認できないが、当時の『婦人倶楽部』の編集側がすでに読者層を把握して

2.2 『婦人倶楽部』における『母』の企画

1927年の『婦人倶楽部』の1月号から連載がはじまった松岡譲の「憂鬱な愛人」が一連の騒ぎで休載⁶となり、同年5月から鶴見祐輔の『母』が連載され、1929年の6月号で完結した。挿絵は伊東深水が担当した。

『母』の分類表記の変化をみると、1928年の6月号からは「理想小説」として表記されていたことがわかる。編集を担当した加藤謙一は、「理想小説とは、普通の恋愛小説でなく、社長のよくいう人倫五常をおもしろく、感激的に内容にもりこんだもの」と語っている。また、野間が鶴見に対して相当な期待感を持っていたことも表明した。⁷

何故、野間は、小説を書いたこともない鶴見に理想小説を書かせたのか。当時の婦人雑誌の編集方針が新聞小説の分野ですでに声価の高かった大家に、惰性的に執筆させるという安易な企画にならずにいた（前田,2001）ことを考えると、鶴見の起用が革新的だったのは間違いない。野間の決断には、当時の講談社特有の編集方針と作家の関係をめぐるある事情が存在していた。

大宅壮一は、講談社の出版物に対し「もっとも神聖であるべき創作までが、どしどし変質させられるのだから、少しでも個性や芸術的良心をもった作家はやりきれないわけだ」と言い、そのイデオロギー性を批判した（大宅,1935）。大宅が批判したのは、編集側の小説家に対する

それに相応しい小説を依頼していたこと⁵を考えると、鶴見もある程度、職業婦人の読者を意識していたのではないかと思われる。

強引な修正要求で、作家の近松秋江は「不道徳な恋愛を描いたところ、醇風美俗に反するというので数回書き直しを命ぜられた」という。

近松秋江の例を見てもわかるように、講談社の修正要求は、単に売り上げのためではなく、野間のいう「人倫五常をおもしろく、感激的に内容にもりこんだもの」のための要求であった。それが、創作の自由を求める作家と衝突するのは当然である。掛川トミ子は、野間の思想にみえる「反学問主義」を指摘するが、そこには、徳や修養が学問を超越すると考える野間の態度が現れているとする（掛川,1959）。野間が否定していたのが、現代の語感で言うところの「学問」ではなく小説家の「芸術」性であるとすれば、野間の思想は「反芸術主義」としてみることもできるだろう。それゆえ、野間が求めた小説が、自由な創作を求める作家たちより、政治家だった鶴見に適した仕事だったのだ。

さらに野間は、『婦人倶楽部』の内容全体にもしきりに関与しようとしていた。例えば『婦人倶楽部』の編集長の茂木茂は、1937年に「夫の貞操、妻の貞操」の座談会を企画したところ、野間に怒られたことを述べている（社会編・昭,1959）。この座談会は、吉屋信子の新聞連載小説の「夫の貞操」の大ヒットから触発された企画で、売り上げだけを考えると話題性ある企画だったことは間違いない。このような挿話の

中にしばしば指摘された『婦人倶楽部』が『主婦之友』より2、3万部の劣勢をみせた理由、つまり、「『主婦之友』程の思い切った俗悪振りに転化しえない野間清治の雑誌報国主義の障

2.3 『母』作者の鶴見祐輔と野間清治

鶴見祐輔は1885年生まれ政治家、著述家である。鉄道官僚時代から外国出張を経験し、旅行記や随筆を発表していた。1906年に旧制第一高等学校の英法科を首席で卒業し、同年、東京帝国大学法科大学政治学科に入学した。1906年に校長に赴任した新渡戸稲造の弟子でもある。新渡戸が一高に赴任して弁論部や文芸部の活動を通じて教養のある学生文化を推し進めた時期(竹内,2012)を生きた典型的なエリートだったことがわかる。

思想家としての鶴見祐輔の思想は、新渡戸の影響をうけているが、キリスト教やカーライルを初めとする西洋思想から汲みだしたのではなく、日本の固有・伝統的な思想の中から汲みだしたものであり、多分に日本主義・保守主義的要素が強い(松井,1998)。息子の鶴見俊輔は「父親は、勉強だけでの上がってきた人だったんだ。(中略)近代化するには、こういう人間を養成することが必要だったんだ。」と述べている。さらに鶴見祐輔は、このような人間は「自由主義が流行れば自由主義の模範答案を書き、軍国主義が流行れば軍国主義の模範答案を書くような人間」になる(鶴見、上野、小熊、2004)と述べ、典型的な近代知識人としての父を批判した。吉見俊哉は、鶴見の思想における、近代日本の「国家」からの離脱と相対化が、エリート政治家の父に対する不信感に起因するも

害」⁸がうかがえるのである。では、野間が思い切って小説を書かせることをきめた鶴見祐輔とはどのような人物だったのか。

のであると分析する(吉見,2012)⁹。

鶴見祐輔は1920年代から新しく現れた大衆メディアをいち早く活用したメディア知識人でもあった。鶴見は演説が上手く、欧米での演説活動だけではなく、1921年には日本各地で200回をこえる演説をこなしていた(上品,2011)。また、演説、新聞、ラジオの3つの媒体を区別して活用するなど、大衆とのコミュニケーションを得意としていた。講談社は1920年代のニューメディアで登場したラジオが生み出した公共圏を、『キング』のような大衆雑誌を通じて構築しようとした(佐藤,2002)のだが、鶴見はその講談社のねらいにマッチする人物だったことがわかる。それゆえ鶴見は『婦人倶楽部』だけではなく、多くの講談社の雑誌に文章を書いていたのだ¹⁰。

鶴見は、『母』の単行本が出版された直後の1929年7月の『婦人倶楽部』に、評論の「新日本を生む力」を発表した。その中で「日本を救う力を、清純な「母」の愛のうちに求める」と述べ、理想的な母としての日本女性が日本を救うと主張した。また、『母』にたいし「昨年私の著述した英雄待望論の姉妹編」であると述べている。ここで挙げられている『英雄待望論』とは、1928年に単行本の『母』と同じく大日本雄弁会講談社から出版された本で、「日本の国策を提示したもの」(鶴見,1928)であった。

鶴見が1928年と1929年に出した『英雄待望論』と単行本の『母』は、国家主義的観点から性別役割分業に基づいて個人の教養と義務を書いた本としてみるができる。それゆえ、出版社も後の『母』の宣伝において「小説の形をとった新しき女大学とも称すべく」¹¹と記述している。

『母』連載中の1928年1月21日に行われた普通選挙で、鶴見は驚異的な得票数で当選する。野間は「鶴見に対して直接の政治資金は与えていなかったが、その代わりに彼に『母』を書く舞台を提供し、ちょうど選挙にさしかかった

ので、それをことさらに大々的に新聞広告をして、彼の選挙に間接の声援を与えた」という（社会編・昭，1959）。大宅が痛烈に批判した「講談社イデオロギー」（大宅，1935）とは、このようなことを指しているのだろう。

後述するが、『婦人倶楽部』の『母』連載は大成功で終わった。作者の鶴見は当選し、『婦人倶楽部』の販売部数は伸び、ウインウインの結果となったのである。次には、『母』の内容を、①女性に求められた新しい教養②職業婦人に求められる選択③進というエリート男性への帰結の3つの観点から分析する。

3. 『母』¹²の内容分析

3.1 朝子の教養

主人公の朝子は自分のことを「私があまり無教育なものですから…」と語る無学な女性である。しかし朝子は、読書、経済学者や婦人運動家の指導、学校教育を通じて身につけた教養をもって人生の危機を突破していく。彼女の教養がもっとも発揮される時は、夫の病死の後、3人の子供を抱えて職業婦人として働く時である。寮母になった朝子は、働きながらも女学校の生徒たちと一緒に授業に出て「一生懸命に学問」する。【引用】「朝子は初めて、数学というものの興味を知った。（中略）彼女は初めて代数を学び、初めて幾何学の面白さを知った。」¹³

朝子が興味を持つのが、数学であることには注目しておきたい。「頗る打算力に富んでいた」朝子は後に株式の投資で成功する。また、朝子の理性的教養は、当時の婦人たちの「感性豊か

さ」とも比較される。朝子の知人で女学校の校長の長谷川は、女子教育の問題を次のように語る。【引用】「日本の女は、理性の教育をうけていないから、まるでセンチメンタルで、少しのことでも自分の判断がつかない。」¹⁴

小山静子は、明治30年代に確立した良妻賢母思想が、婦人問題の登場と第1次世界大戦を期に転換し、女子教育観の再編をもたらしたと指摘する（小山，1991）。その中でも家庭改良や家事の合理化のための「科学思想の導入」が主張されるが、長谷川が語る「理性の教育」も当時の言説の延長線上にあるものとして考えられる。

例えば、東京女子高等師範学校教授の下田次郎は、「女子の学校は家事の研究を進め、一層有効な家事の教授をなさねばならぬ。これは家庭は勿論、一国の経済と大関係がある」¹⁵と指

摘し、家事教育における科学性を主張する。また、東京教育博物館の館長で、生活改善運動家として活躍した棚橋源太郎も、「各家庭に於いて競って科学的知識を導き入れ、婦人の作業能率を高めて、物資の節約利用に努めることは実に今日の急務である」と主張する。¹⁶ 下田や棚橋の主張は、家事教科の科学的な改良を求めるものであったが、このような姿勢は、学校だけではなく大衆婦人雑誌の実用記事からも読み取れる。

大正・昭和の大衆婦人雑誌は、競って家事の実用記事を掲載した。瀬戸内晴海は『婦人倶楽部』のことを「母はその付録を見て、私と姉の洋服を縫ったり、糸でセーターやオーバーまで編んで着せた」¹⁷と回想している。このように、婦人雑誌の実用記事は、教育機関で家事を習う機会がない大衆女性にとっての教育の場として機能した。それゆえ『婦人倶楽部』の実用記事の執筆にあたっては、載せる項目の実用性を実証実験していたため

相当な手間がかかっていた。¹⁸ 実験によって正確に書かれた型紙の付録や料理記事は、標準化・計量化を通じて作成された1つの知識として、また、それ自体が、科学的・合理的に家事をすることへの規範として読まれていたと考えられる。それゆえ『母』で賞賛される朝子の優れた能力は、昭和の女性に新たに求められた合理性・科学性のシンボルとして読むことができるのである。

一方、日本の婦人が「感性ばかり発達している」と批判した長谷川の言葉どおり、女性の「感性豊かさ」は、特に、「小説を読む女学生」と

結びついて批判的となる。1923年に小説家の島田清次郎が起こした女学生拉致事件は、「小説を読む女学生」の軽率、虚栄が強調された代表的な事件である。1923年5月の『女性日本人』の記事は、事件の女学生を批判しながら「少なくとも教養のある女性として」の自覚をもつことを勧告している。女学生の小説耽読に対する批判的視線は、中野好夫が、1939年9月の「学生論」で、読書が文学書に偏ることからくる感情の過剰、歴史的な物の見方の不足を克服することを主張するまで、昭和の教育言説において主流になっていた。『母』でも、朝子の教養の成長において歴史書や数学や経済の知識は重要な役割りを果たすが、小説は否定的に描かれている。¹⁹

以上、朝子の人生を通じて、当時の女性に求められた新しい教養がどのように表象されていたかを確認した。これらの教養は、脈絡によっては単なる「教育」や「知識」と呼ぶこともできるだろう。しかし、絶えず努力する朝子の姿勢は、単に生計のために学んで働くという次元を越えて、理想的な人間になるため努力するという教養主義的な意味を十分持っている。作者が朝子を通じて読者に伝えたいのは、科学や経済学の断片的な知識を学べということではない。学ぶ対象がどのようなものであれ、精進する姿勢が強調されているのである。この意味で『母』は、それまでの女性に求められていた上品な趣味や話し方のような装飾的な教養ではなく、人間の資格としての教養を女性にも求めたテキストとしてみることができるのである。

3.2 職業婦人の選択

『母』は職業婦人の成功物語でもある。朝子は大胆な株投資をしながら「生まれて初めて、自分の力を意識した」のである。しかし結末で朝子は、仕事をやめて家庭にもどることを決心する。このことに朝子の精神的支柱であった長谷川も賛同する。

【引用】「なんとといっても日本では、女はまだ一本立ちで働きはできませんよ。(中略) 女の境遇の改善せられて、社会の思想のなおるまではやっぱり女の領分は家庭ですわね。」²⁰

朝子の職業婦人としての目的は、子供の学資ができた時点で達成される。その結果、朝子が職業婦人として果たした劇的な成功は、クライマックスのための装置に止まりその大義名分は家庭へ還元されてしまう。この場面から分るのは、職業と家庭の両立という職業婦人をめぐるジレンマである。1924年8月号の『婦人倶楽部』で、評論家の室伏高信は、「職業婦人に真の幸福がありえようとも思わないし、また職業婦人と家庭生活とが両立することのできるものとも思わない」²¹といい、職業婦人を否定する発言をするが、『婦人倶楽部』だけではなく、多くの婦人雑誌には職業婦人の化粧やファッションを風刺的に語る記事が多く掲載された。つまり職業婦人はすべての人から歓迎された存在ではなかったのである。

しかし職業婦人という労働力は「必要な害悪」であるため、家庭と職業の両立を模索する意見も続々提出される。1929年8月号の『婦人倶楽部』の「職業婦人は奥様としてなぜ好かれるでせうか、嫌はれるでせうか」の主題で、いく

つかの評論が掲載されたが、その中で、大妻コタカは、内職の奨励を主張する。内職・副業は、1918年の米騒動を前後する時期から積極的に政策として奨励される(小山,1991)。『母』でも、朝子は「何か家でできる商売をしてみようと思いついた」といい、寮母をやめて薬局運営という内職を選ぶのである。

大正末期から昭和初期の職業婦人の急増は、中間階層家庭の女子の賃金労働化が始まったことを意味する。第1次世界大戦後の急激な経済組織の再編と物価騰貴と不況によって、それまでは働く必要がなかった中間階級の女性も働かなければならなくなった。朝子も、突然の夫の病死によって職業前線に追い込まれた。しかし良妻賢母は、中流以上の階級の女性に要求された規範である(岩下,1969)。そのため職業婦人の存在は、良妻賢母の規範と労働力の必要の間で、矛盾を抱えることになる。内職は、職業婦人におけるこのような矛盾を解消する策として提出されたのである。

このように、良妻賢母の規範は女性が職業を持つ理由をつねに家庭へ帰属させようとする。『婦人倶楽部』を読んでいた職業婦人たちが朝子の選択をどのように受け入れたかは、今のところ確認できない。しかし、『母』の大々的な成功²²からみると、当時の読者たちの共感を得たことは確かである。職業婦人に対する抑圧的なテキストとして読むことができる『母』は、何故成功することができたのか。次には「進」というキャラクターのリアリティーを中心に『母』の成功要因を分析する。

3.3 進という未来のリアリティー

『母』には、朝子の母としての苦勞と息子の進の成長が、並行して描かれている。朝子が夢見る進の未来は、一高と帝大を卒業して「立派な教育をさして（中略）立派な人間」に仕立てることである。しかし、この「立派な人間」とは、単に一高、帝大出身のエリートのことを言っているだけではない。『母』には、3人の一高出身のエリートが登場する。「詩人」の文学青年の大河澄男、「本ばかり読んでいる人」の経済学者の木下一郎、「現金的な立身出世主義」の銀行家の山路進一郎の3人がそれである。だが、大河澄男は病死し、木下一郎は日本社会から背を向けてアメリカへ行き、山路進一郎は悪役として描かれている。

このことからわかるように作者は、この3人を理想的なエリートとして描いていない。そのかわり「英雄伝」が好きで、将来の夢が政治家である進が、理想的なエリート像として提示される。

ここで注目したいのは、進のキャラクターと作者の鶴見の人物像が類似していることである。講談社社員の天田幸男は、「昭和3年、第1回普通選挙で先生が当選して人気でたんです。さらに小説を書いたものだから非常な人気、それで万事が非常に都合よくいった」（社会編・昭,1959）といい、単行本の『母』の成功に、鶴見の政治家としての人気関わっていたことを話した。『婦人倶楽部』の『母』関連記事をもみても、人気政治家としての鶴見の知名度を積極的に活用していたことがわかる²³。鶴

見もまた、1929年6月の『婦人倶楽部』の「『母』の出版について読者へ」で、「この小説を書いている過去2年間の間、私は至るところの読者諸君より、直接間接、熱烈の御激励をうけたことをあつく感謝する」と書いており、彼が連載中に実感していた『母』の人气が、相当なものだったことがわかる。単行本の出版部数の予想でも、鶴見は、「当時日本中を演説して歩いていたから、うけているか否かがわかって」いたため、初版5万を予想した。結局、初版1万部にした講談社側の予測を大きく上回り、24万部がうれて、1930年1月の『婦人倶楽部』の記事によると、『母』は、単行本として340版を突破した²⁴。

結局、政治家を夢見る進のリアリティーは鶴見の政治家としての人気と結びついて獲得できたのではないかと思われる。結末で、朝子は、職業婦人としての自分の人生が「財産のための戦い」であったことに気づく。「独立した人間」としての朝子の理性的な教養と職業は、結末において「財産」という世俗的な価値として否定されるのである。ここにおいて、人間の理想的成長を語る教養のレトリックの主体は、無学の女性の朝子から一高・帝大の未来が待っている男性エリートに進にかわる。それゆえ、病死でフェードアウトする朝子と鶴見という実体性をもって現れる進の並行的配置は、教養主義が語る人間の普遍性が、まだ、女性には開かれていないことを暗示するのである。

4. おわりに

本稿は『婦人倶楽部』の『母』の企画背景とその内容分析を通じて、昭和教養主義のテキストが定義した女性の理想的な教養の有様を明らかにした。マルクス主義や婦人運動から「大衆」を認識した昭和教養主義は、科学的理性、母としての犠牲精神を通じて女性の理想的な教養を語る。一方、朝子の精進する生き方とそれへの補償としての息子の進は、女性も努力すると自立した人間として生きることができるというある可能性もみせてくれる。それゆえ、『母』は、抑圧の物語としても、解放の物語としても読むことができるのである。

以上の分析をふまえると『母』は、昭和期から活発になる「女性の国民化」言説の中で雑誌側が積極的に企画した小説だったことがわかる。佐藤は日本の新しい「国民化」の契機となった1923年の関東大地震の以降から国家の運営に「財産と教養」を持つ「市民」だけでなく女性や非エリートまでを含む「大衆」も参加させることになった（佐藤,2002）と指摘する。すなわちベネディクト・アンダーソンの言う想像の政治共同体としての「国民」に女性も参加させる必要が現れたのであり、このような「想像」のためには政治家の鶴見や雑誌社社長の野間のようなオピニオンリーダーたちによる企画が必要だった。また物語においても朝子の国民

としての可能性は、エリート男性を生んで育てる母の役割に限定されるが、女性にも自立した人間としての道があることを語った点で、当時の共感を得たのではないか。さらにいえば職業婦人という近代的な女性の生き方を経験しはじめた女性たちにとって、職業婦人としての悪戦苦闘する朝子の姿は現実的なメロドラマとして受け入れられていたのではないか。

本稿の分析は『婦人倶楽部』の『母』連載における社会的な文脈や読者層に目配りし、小説の内容分析が不十分だった限界を持つ。また、実際の読者層についてもより詳しい分析が必要である。それには、男性教養知識人が残した数多くのテキストにくらべ、女性のテキストはごく少ないという資料上の制約もある。しかし、女性雑誌の名の無い読者の投稿欄の分析を通じて、文学少女の教養主義への熱望と挫折を明らかにした小平の研究（小平,2016）のように、現在、新しい資料の発見と研究も活発に行われている。それゆえ、今後の課題として、大衆婦人雑誌テキストのメッセージ分析だけでなく、それをめぐる読者のメッセージ受容と変容の過程までを追及し、大衆婦人雑誌の場で行われた男性教養知識人と女性大衆の関係性におけるダイナミックスをより明らかにしたい。

註

- ¹ 『主婦之友』は婦人読者に「主婦」のアイデンティティを与え、『婦人公論』は知識階層の婦人を対象とした。だが、『婦人倶楽部』には、明確な特徴が現れていない。このことが『婦人倶楽部』が目立たなかった理由であると考えられる。
- ² 山崎景子は戦間期の『婦人倶楽部』の職業婦人記事群の分析を通じて、「あるべき理想の職業婦人」イメージの変容を明らかにした。それによると、1920年代までは「あるべき理想の職業婦人」イメージとして「社会的自立」を目指す「伝統的職業婦人」

が優勢であったが、1930年代以降には「人柄のよい」「モダン職業婦人」へ変っていく。「モダン職業婦人」のイメージは、低賃金で制約的な雇用環境に置かれているため、社会的な自立の可能性が低いので、結局、良妻賢母規範に包摂されると山崎は分析する(山崎,2009)。

- ³ 岩下によると「職業婦人」という言葉は第1次大戦後にはじめてあらわれた。「職業婦人」という言葉が指す女子労働者の範囲は明確ではないが、それは従来の紡績女工のような女子労働者とは異なる新しいタイプの女子労働者を指していた(岩下,1969)。
- ⁴ 東京府社会課(1931)『求職婦人の環境調査』
- ⁵ 例えば『婦人倶楽部』での連載を断った吉屋信子にたいし、「少女小説を書いている先生の小説を読みたいと思う年齢層は『主婦之友』に多いか、『婦人倶楽部』に多いか、それを考えたら簡単におわかりになるでしょう」と説得し、『婦人倶楽部』で「女の友情」が連載されたことは有名な話である。(社会編・昭和,1959)
- ⁶ 『婦人倶楽部』の1927年1月号から松岡譲の小説『憂鬱な愛人』が連載された。講談社はこの小説の新聞広告で、作者の結婚問題をモデルにしたものであると、露骨で煽情的に喧伝した。これに対し作者の松岡は文学的作品として書いたものであり手加減をしてほしいと申し入れたが、講談社が聞き入れず、小説は連載4回で打ち切りとなった(『鶴見祐輔資料』119頁から引用)。この事件も、講談社と作家の編集・広告においての意見の不一致によって起こった騒ぎであった。
- ⁷ 野間は「理想小説とは、普通の恋愛小説でなく、社長のよくいう人倫五常をおもしろく、感激的に内容にもりこんだもの」として定義する。また、「このようなものは、普通の作家には書けない、鶴見氏ならば、きっとやるだろう。母性愛、友情、愛恋、発憤、忍苦、等をもりこんだものがほしい」と言って、鶴見に対する期待感をあらわしていた(社会編・昭,1959)。
- ⁸ 静楽寮人『家庭』「各婦人雑誌を批判す」1933年6月号
- ⁹ 吉見は、鶴見俊輔の国家への深い反抗が、父の鶴見祐輔以上に母の和子の厳格さ(明治国家を支える武士のエートス)に起因していると分析する。
- ¹⁰ 鶴見が野間に話したアメリカの『サタデー・イブニング・ポスト』は『キング』創刊の参考になった(社会編・昭,1959)。鶴見と野間の関係は、行動的・政治的側面を重視する点において、利害の一致した結果だと思われる。
- ¹¹ 鶴見祐輔『婦人倶楽部』「『母』の出版について読者へ記者より」1929年6月号
- ¹² 以下は講談社学術文庫出版の『母』(1987)から引用した。
- ¹³ 鶴見祐輔『母』(講談社学術文庫,1987),141頁
- ¹⁴ 鶴見祐輔『母』(講談社学術文庫,1987),71頁
- ¹⁵ 下田次郎『教育時論』「女子の職業教育と実際の教養」1918年9月号
- ¹⁶ 棚橋源太郎『教育時論』「家事科学展覧会の開催」1918年9月号
- ¹⁷ 瀬戸内晴海『婦人倶楽部』「愛惜「婦人倶楽部と私」」1988年4月号
- ¹⁸ 「実用記事は寄稿家の原稿を、そのまま信用して掲載するのが、各誌の例だったが、それではいけないというので、いかなる些末の記事でも、いちいちその原稿によって実験の上、掲載することにした」(社会編・昭,1959)
- ¹⁹ 婦人運動家の長谷川の日本女性教育への批判は、トルストイの『復活』を読んでいる朝子を前にして行われる。また、朝子は、母性愛の覚醒以前は小説を好んで読むが、覚醒以降に小説を読むことはない。
- ²⁰ 鶴見祐輔『母』(講談社学術文庫,1987),465頁
- ²¹ 室伏高信『婦人倶楽部』「職業婦人の家庭は如何にして幸福にすべきか」1924年8月号
- ²² 『母』は、1929年6月の連載終了後に単行本として大日本雄弁会講談社から出版され、24万部もの売り上げを記録した。1929年8月には、新橋演舞場と明治座の両方で帝劇女優によって新派劇として上演される。同年に松竹蒲田によって野村芳亭演出、川田芳子主演で映画化された。大正末から昭和初期にかけて、それまで読みすてにされることが多かった婦人雑誌の通俗小説が、新しい媒体としての映画と結びついて、単行本としてベストセラーに進出した(前田,1973)例として、みることができる。
- ²³ 1929年6月号の「『母』の出版について読者へ」、1929年7月号の「新日本を生む力」(鶴見の評論)、1929年11月号の「母の歌」(鶴見作詞)、1930年1月号の「『母』の映畫化に就て」等が確認される。
- ²⁴ 『母』が1年間で340版を突破したという記事は1930年1月の『婦人倶楽部』17ページで確認される。「映画物語『母』」というこの記事は1929年松竹蒲田によって映画化された『母』の場面と『母』の内容を組み合わせで書かれた。広告の性格も強かったため誇張された部分もあると思われる。



李 承京 (イ・スンギョン)

[専攻領域] メディア、ジェンダー、近代文学
[所属] 東京大学大学院学際情報学府 博士課程

Women's Cultural Education and Occupation in Serial Novels in the Early Showa Period: Focusing on *Mother* by Tsurumi Yusuke(1929)

SeungKyung LEE*

This paper examines how the norm of good wife and wise mother was discussed through the usage of the word “educated” in Yusuke Tsurumi’s *Mother*, serialized in *Fujin Club* from May 1927 to June 1929. The *Fujin Club*, started in 1920 by Dai Nippon Yubenkai Kodansha, was a magazine read by many working women and girl students in their early teens to their early twenties. Through collaboration between Seiji Noma, president of Kodansha, who tried to present the mother as an ideal female figure, and author and politician Yusuke Tsurumi, the series *Mother* was started. It can be considered that Asako, the leading character of *Mother*, who overcomes various crises in life through ideal education obtained through reading and school, could garner the empathy of the women of those times who dreamt of being independent. However, since success as a working woman was for the progressive future of her son, Asako’s success ultimately gets attributed to the norm of good wife and wise mother. However, rather than seeing the series *Mother* of the *Fujin Club* as propaganda, the author would like to consider the significance of the series to lie in its potential as a text through which the Kodansha culture, considered a symbol of anti-cultural education strategically utilized the masses’ desire for cultural education.

* Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

Key Words : Cultural education, *Fujin Club*, the early Showa period, Working Women.

個人レベルのソーシャル・キャピタルの視点から見た 復旧・復興過程研究の論点整理：高齢者に焦点をあてて

A Review of Post-Disaster Recovery and Reconstruction for the Elderly from
the Individual Social Capital Perspective

薛 欣怡*

Hsinyi Hsueh

1. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、広範囲に甚大な災害をもたらした。被災地の復旧・復興のために、多くの支援が被災地に投入され、ボランティアや義援金の募集が日本全国の各地で呼びかけられた。2011年の日本社会を代表する漢字に「絆」¹が選ばれて以来、「絆」という表現での社会関係がよく注目されている。この「絆」と呼ばれる社会関係は、地域社会のソーシャル・キャピタルを指すことが指摘されている（稲葉・大守・金光・近藤・辻中・露口・山内・吉野 2014; 原田 2012）。

日本の災害研究領域において、コミュニティレベルのソーシャル・キャピタルの視点から多くの研究がなされてきている。コミュニティレベルの視点から見れば、ソーシャル・キャピタルとは復旧・復興の困難な壁を乗り越える上でその有効性が議論されていた社会資源の再分配や地域社会における信頼関係と捉えることができる。しかし、個人にとって、個人属性や社会

関係などの特徴による同じコミュニティ内でも、復興格差があることも指摘されている（土屋・中林・小田切 2014）。たしかに個人レベルでの復興格差に関して、平常時の生活満足度や災害後の健康面のみに視点を置く研究は多数あるものの、個人レベルにおけるソーシャル・キャピタルの視点から、災害後の個人への支援分配についての研究はまた少ない。

特に、災害後の個人レベル視点が重要とされる理由は、被災者が災害復興住宅へやみなし住宅へ移転することは多く観察され、これらの移動に伴って、平常時から築き上げてきた地域間の社会関係が分断されたりことにより、被災者個人の社会関係が大きく影響を受けることにある。なかでも、災害時および災害後ともに脆弱性の高い高齢者にとって、平常時から有しているソーシャル・キャピタルの個人差への注視は政府やNPOが災害後の高齢者への包括的な支援策を講じる際に、極めて重要である。

* 東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：復旧・復興期、高齢者、個人レベルのソーシャル・キャピタル、復興支援

このため、本論では、まずコミュニティレベルと個人レベルのソーシャル・キャピタルの視点を第1軸に加えて、高齢者に焦点を当て、災害前と災害後の社会関係の変化を第2軸に置き、災害後の復興支援に与える影響を分析するための前段階として、これまでどのような研究が行われてきたかを整理することを目的とする。本稿の構成としては、第2章で、近年、災害研究領域において用いられているソーシャ

ル・キャピタル論からのアプローチに注目し、上記の枠組と分析を整理した先行研究をレビューする。第3章では、高齢者を主体とした個人レベルのソーシャル・キャピタルを中心に据えて、平常時の社会関係を援用し、既往の研究に対する新たな視点を提示することを目的とする。最後に第4章では、以上の内容をまとめ、今後の研究の課題と展望を示す。

2. 災害研究におけるソーシャル・キャピタル論の包摂

2.1 災害研究におけるソーシャル・キャピタルの効果

ソーシャル・キャピタル概念の定義は多義的かつ曖昧性を残しているものの、各分野で活発な研究を生み出してきた。この潮流を生み出した背景には、1970年代以来、新自由主義の趨勢の中で、従来市民社会が単なる被統治者として与えられてきた役割を転換させ、市民間の自律的かつ自発的な能力を政府の統治能力の低下に対する改善策と位置づけられたことがある(坂本 2010)。たとえば、「市民間の自発的協調関係の成立 (= 社会アクターが有する自治能力) (坂本 2010: 18)」の論説に見るように、ソーシャル・キャピタルの重要性が指摘されている。その後、1980年代に社会の人間関係の希薄化、うつ病や自殺率の高まり、失業や非正規雇用労働者人口の増大などの社会問題が相次いで急浮上した。ここでもソーシャル・キャピタルの観点は新たな公共性や社会の再構築の糸口として提唱されている(坂本 2010; 今田 2014)。

こうした観点に従って、災害領域でも、市民自らがコミュニティのアクターの一員として、

積極的な被害抑止行動を行う主体的な対応者としての位置が賦与された(Murphy 2007; Mathbor 2007)。この論は、多くの既往研究において採用されている。すなわち、被害抑止対策や社会面の復旧・復興は一義的には自治体や政府の責任ではなく、市民やコミュニティを主体とした役割の重要性が再び強調されるようになっており、ここからソーシャル・キャピタル論の概念が災害研究に包摂されてきている。

しかも、前述したように、災害過程のすべての段階でソーシャル・キャピタルは効果があると考えられている。まず、事前段階からいえば、ソーシャル・キャピタルは被害を軽減することに効果があるとされる。Dynes (2002) は個人レベルでは、災害予防に関わる情報や知識不足が被害抑止対策を実行することに影響を与えるとの仮説の上で、ソーシャル・キャピタルが情報の流れを促進する効果を果たしていると主張している。地域レベルでも、地元のリーダーの関与を通して適切な対策や準備、体制の整備が

進み、その結果として災害時にもソーシャル・キャピタルの機能を発揮しやすくなると明言している。つまり、これらの地域や個人のソーシャル・キャピタルの視座に基づけば、災害に耐えられる個人やコミュニティの形成は可能である。

次に、応急段階においても、阪神・淡路大震災では6割以上の住民が共助により救助され、東日本大震災時にも災害時の住民同士の助け合いやボランティア支援活動など、いわゆる冒頭にあげられた「絆」である人間関係を代表するソーシャル・キャピタルの重要性が示されている（原田2012; 稲葉ほか2014）。特に、「自助、共助、公助の有機的な関係性を構築する」（室崎2009）うえで、緊急時に公的援助を補完する機能としてのソーシャル・キャピタルの可能性が期待されている。

さらに、地域社会視点からの復旧・復興という地域全体が共有する目標を達成することは地域内の多くの主体が連携していく必要から見て、ソーシャル・キャピタルは欠かせない一環であるとされる（Nakagawa & Shaw 2004）。立木・林・矢守・野田（2004）が主張している「生活復興7要因モデル」にも、家族や地域の「つながり」の回復は7要因の1つとして挙げられており、「ソーシャル・キャピタルの充実や具体的な地域活動の促進・支援に地道に取り組んでいく必要がある（p260）」と述べられて

いる。

Aldrich（2012）は、同様の視座から災害後にソーシャル・キャピタルの効果による復興状況の差を議論するために、地域レベルのソーシャル・キャピタルに焦点を当て、阪神・淡路大震災時の神戸市の例を取り上げた。被災地の人口が災害前の水準まで回復していくことを復興の定義として、「人口当たりのNPO数」を地域レベルのソーシャル・キャピタル指標として代用し、地域復興の速さと地域レベルのソーシャル・キャピタルは正の関係性にあることを示している（Aldrich 2011, 2012: 訳77-121）。Shimada（2015）も同様に、被災地の人口回復に効果があることを示している。すなわち、どのような災害段階でも、ソーシャル・キャピタルは重要な役割を演じているのである（Meyer 2017）。

しかしながら、ソーシャル・キャピタルには不利な効果も指摘されている。ソーシャル・キャピタルが強い地域は内部志向も強くなり、外部が排除される危険性も高い。また、内部志向が強いとしても、地域との関係が薄い脆弱層には無視される人も出てくる（Aldrich 2012; Kaniasty & Norris 1995）。この問題の解決策として、複数の「弱い紐帯」とのつながりを指摘する（Murphy 2007）観点は、本稿の以下の分析において重要である。

2.2 災害研究におけるソーシャル・キャピタルの理論と課題

古典的理論では、ソーシャル・キャピタルは誰に帰属するのかが焦点の一つとして議論されてきた（筒井2007）。ソーシャル・キャピタル

を公共財であるとみるPutnam（1993）が提唱していた「信頼、規範、ネットワーク」といった3つの側面を用いた研究が主流であることを

反映し、災害研究でも地域社会の復興というマクロ視点で検証している研究が多い。その一方、ソーシャル・キャピタルを私的財であるとみる Bourdieu (1986) や Lin (2001) を採用する研究群もある。Lin の定義ではソーシャル・キャピタルはソーシャル・ネットワークに埋め込まれる資源であるという主張をとっている。近年では、ソーシャル・キャピタルは公共財の特徴を持つが、私的財の特徴も無視せず両論併記する論調が注目を浴びている。Szreter & Woolcock (2004) の説明によれば、この論点では、ソーシャル・キャピタルの構造は水平関係である結束型ソーシャル・キャピタル (Bonding social capital) 及び橋渡し型ソーシャル・キャピタル (Bridging social capital) と、垂直関係である連結型ソーシャル・キャピタル (Linking social capital) という3つの様態がある。図1に示しているように、結束型ソーシャル・キャピタルとは、強い紐帯のなかで接着剤

のような密接に生活を共有している関係を指す。この関係を内部志向と呼び、たとえば家族、近隣、友人が当たる。他方、水平地位にある外部志向の紐帯を築き上げる関係は橋渡し型ソーシャル・キャピタルと呼ばれる。実際には、他地域や他のコミュニティ同士との接続関係によく使われている。

さらに、Szreter & Woolcock (2004) は、スラムに対する NGO の援助の例をあげ、この2つの様態のソーシャル・キャピタルに加えて、第3の「連結型ソーシャル・キャピタル」を概念化した。この連結型ソーシャル・キャピタルは垂直型の関係を意味する。Putnam の理論でも社会関係は水平と垂直構造を土台に構成されることに言及しているが、最近になって明確かつ頻繁に使われるようになった。この連結型ソーシャル・キャピタルは権力や財源を握っている政府や NGO との関係を示していることが多い。

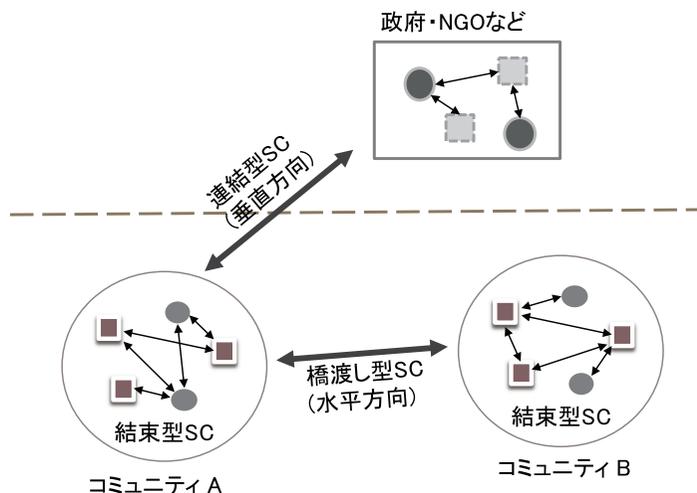


図1. ソーシャル・キャピタルの類型 (Aldrich 2012; Mathbor 2007 参考に筆者作成)

こうした枠組みでは、結束型と橋渡し型の2つの水平構造のソーシャル・キャピタルには、ソーシャル・サポートの側面が含まれている。加えて政治経済学の視点から、水平構造と明確に異なる垂直的社会構造である連結型ソーシャル・キャピタルの概念も補足された (Kawachi, Kim, Coutts & Subramanian 2004)。つまり、現在のソーシャル・キャピタル論では、多様な学問領域からのアプローチを統合する概念になっている (Ritchie & Gill 2007)。

災害領域の研究では、このような枠組みを用いる研究方法が潮流になってきている。コミュニティレベルの視点から主張している論点は、結束型ソーシャル・キャピタルが強いコミュニティでは、災害時の共助により被害を軽減し、災害前から構築されているネットワークや規範、住民間の信頼やリーダーへの高い信頼度から、災害後にコミュニティの移転や復興策など多数の利害関係者の間の合意を早めに達成することを示している (Aldrich 2012; Joshi & Aoki 2014)。そして、橋渡し型ソーシャル・キャピタルが強いコミュニティでは、災害後に新しい復興策への包容度がより高い傾向にあると指摘されている (Nakagawa & Shaw 2004)。すなわち、両者ともソーシャル・キャピタルが高ければ、その関係を活かして、地域レベルの復興の壁を乗り越えることを明示している。

一方、地域レベルに対してよりミクロ視点から、こういったソーシャル・キャピタルの構造の適用も可能である。家族や個人が地域社会のアクターの一員として捉え、ソーシャル・キャピタルの様態によって受けた支援の特徴やネットワークの大きさと支援の関係性に焦点を置く

研究が一般的である。Hawkins & Maurer (2010) は、2005年のハリケーン・カトリーナの被害を受けた世帯主にスノーボール方式でヒアリング調査を実施した。その結果、災害初動期において、結束型ソーシャル・キャピタルからの支援は物資、心理的サポートと経済面で大きい割合を占めており、橋渡し型と連結型ソーシャル・キャピタルからも、情報、資源、生活用品、食料などの支援を受けている。そして、結束型ソーシャル・キャピタルを通じて、橋渡し型ソーシャル・キャピタルと連結型ソーシャル・キャピタルが連携することで最大の効果が引き出せると主張している。

また、家族・近隣住民・友人を結束型ソーシャル・キャピタルと定義する研究が多いが、Islam & Walkerden (2014) はバングラデシュの沿岸部のある村落内の世帯調査を用い、親族と非親族の支援差に焦点を置いた研究を行っている。その中で、家族・親戚である結束型ソーシャル・キャピタルと近隣住民・友人である橋渡し型ソーシャル・キャピタルとに再定義して分析している。その結果、結束型である血縁家族のなかで、成人しているが結婚していない子供は定期的に仕送りしてもらうことが見られる。しかも、彼らからの心のケア、仕事の紹介、食料の確保や家事の手伝いなどのサポートは橋渡し型よりも継続して行われている。同じく結束型ソーシャル・キャピタルと定義されている「姻族」からの支援はよく見られ、食べ物、避難所の提供、家屋修繕の材料、現金、労働力と服など多様な内容に及んでいる。その一方、近隣住民や友人という橋渡し型ソーシャル・キャピタルは、災害時の捜索・救助、食べ物の共有

と掃除の協働作業などの助け合いをしているが、長期的な支援は政府・NGOである連結型ソーシャル・キャピタルに依頼することが多いことを明らかにしている。つまり、3つの種類のソーシャル・キャピタルがそれぞれ特徴のある支援を行なっているのである。

ソーシャル・キャピタルの構造以外に、各ネットワークの大きさや交流頻度も規定因として議論されてきた。Kaniasty & Norris (1995) は被災者のネットワークの大きさは災害後の有形援助 (tangible assistance)、ならびに情報と情緒面の支援と正の関係性を持つと主張している。池田 (2015) は東日本大震災後の情報行動を研究した結果、「日常的な強い紐帯、弱い紐帯と団体活動積極度」としたソーシャル・キャピタルは、災害後の情報の「ニーズを高めると同時に充足を促進する効果を持つ (pp170-171)」と主張している。Wei & Han (2018) も住宅再建のための支援有無を被説明変数とし、2008年四川地震が発生する直前の春節に家族が付き合った人数を説明変数とした結果、付き合った人数が多ければ多いほど、調査当時に住宅再建

が完了していることとの関係性があったと主張している。Durant (2011) も災害前からの社会孤立者は災害後の支援のため、家族との連絡を再開する特徴があると述べている。

但し、多くの研究では、災害後の調査時点のネットワークの大きさに準じており、災害前後の社会関係の変化によるソーシャル・キャピタルの動的な特徴について議論されてこなかった。実際に、災害後に住民たちが分散して避難するため、コミュニティの力が弱くなっていることや、災害後に災害公営住宅に移転することにより従来の社会関係が薄くなっている結果、被災者の孤立化や孤独死などの課題は未だ十分に解決していない (広田 2015)。この部分は災害後の高齢者の特徴を中心に、後ほど 3.2.1 で詳述していく。つまり、災害前後の個人・世帯属性や時間の推移によって、各ソーシャル・キャピタルからの資源が動的に変化しているという特徴があることになる。そのため、災害前後の時点における付き合う人の人数や密接度の要因とその変化は全面的に把握しなといけないことも今後の課題として残されている。

3. 高齢者を主体としたマイクロレベルのソーシャル・キャピタル研究レビュー

前章で災害前後のソーシャル・キャピタルの変化を無視できないということを提起した上で、ここでは、さらに、ソーシャル・キャピタルに動的な特徴があることによって、高齢者に

っては特に著しく影響を与える (稲葉 2009) という論点を加え、高齢者を主体とした個人レベルでのソーシャル・キャピタルを議論していく。

3.1 平常時の高齢者のソーシャル・キャピタル

・ソーシャル・キャピタルと健康及び生活の質 (QOL)

第1章で提起したように、個人におけるソ

シャル・キャピタルの議論は健康面との関係性

を中心として研究されてきた。高齢者は年齢を重ねることにより心身機能が低下していく傾向があり、罹病の確率も他の年齢層より上回っている。老年期の援助において、連結型ソーシャル・キャピタルである行政による介護保険制度は重要な役割を果たしている。本稿で焦点を置いているのは高齢者の災害前からの社会関係であり、ここでは日本の社会保障である連結型ソーシャル・キャピタルについては、贅言を要しない。

その一方、高齢者のソーシャル・キャピタルの研究では、ソーシャル・キャピタルが高い地域や個人は、より良好な健康や生活の質(Quality of life)を達成しているとの研究が多

い。村山(2016)は高齢者個人レベルの視点から、結束型と橋渡し型ソーシャル・ネットワークが高い者が、抑うつ病の罹患率が低い傾向にあることを実証した。コミュニティレベルの議論でも、地域包括支援センターが地域のソーシャル・キャピタルを醸成させることを通じて、地域や個々の高齢者に政策が浸透する効果が期待されている。それ以外にも、家族・近隣住民のソーシャル・キャピタルの効果が顕著であることが示されている(Poortinga 2006; Murayama, Nishi, Matsuo, Nofuji, Shimizu, Taniguchi, Fujiwara & Shinkai 2013; Cramm, van Dijk & Nieboer 2012)。

・ソーシャル・キャピタルとソーシャル・ネットワーク

Putnam(1993)によれば、ソーシャル・キャピタルは「信頼、規範、ネットワーク」といった側面があるが、個人レベルにおけるソーシャル・ネットワークの大きさと使える資源には正の関係性があるという論点に関しては、ソーシャル・ネットワークとしてのソーシャル・キャピタルが使われている(Ryan, Sales, Tilki & Siara 2008; 稲葉 2009)。ついで、この観点から、本稿では高齢期における社会関係の特徴を議論することを目的とする。高齢期の結束型ソーシャル・キャピタルには、子供の独立による、高齢者の家庭内の役割移行、あるいは自身の退職による職場を通じた役割の喪失、配偶者・両親・親友との死別などによる大きな喪失感を持つ出来事が発生してくる(長田 2014)。社会関係は時間によって量的な変化の特徴があるが、この時期に社会関係の中心は家族と親族、特に

子どもに極めて重要な位置が置かれ、加齢しても関係は変動しない(藤崎 1998; 益田 2015)。ただ、子どもとの関係も同居有無で交流頻度や機能的役割という依存状況によって質的な変化が起こる(藤崎 1998; 斎藤 2008)。

高齢者にとっては、近隣・友人の存在が「気心の知れた仲だと感じる方」と受け止められている(古谷野・矢部・西村・高木・浅川・安藤 2007: 59)。また、性別でみると、女性高齢者では家族・近隣・親しい友人である結束型ソーシャル・ネットワークが、職場に依存していた男性高齢者より強い。一方、男性高齢者では職場で知り合いになった友人である橋渡し型ソーシャル・キャピタルの方が強い(前田 2004; 古谷野ほか 2007)。この特徴を踏まえ、男性は退職前には、地域の人・近隣の人との付き合いの役割をほぼ女性に任せることであるが、退職後

に社会関係を再構築せざるをえないことを経て、近隣住民との交流の比率を高める（河合

2009; 小山 2012)。すなわち、性差に留意する必要があると考えられる。

・ ソーシャル・キャピタルとソーシャル・サポート

同じく資源を獲得するアクセスに焦点を置く研究では、ソーシャル・サポートとソーシャル・キャピタルの違いもよく議論されている。稲葉(2007)によれば、ソーシャル・サポートの最初の定義は「個人によって有益な効果を示す対人関係中の要因としてソーシャル・サポートは指定され、その具体的な対応物が経験的に探索されていたのである (p64)」。つまり、個人が経験したライフイベントによるストレスを緩衝するための対人関係中の要素を測定し、より良好なメンタルヘルスを維持することを目標とする観点でソーシャル・サポートが用いられている。この議論では、ソーシャル・サポートがどのようなニーズを支援できれば、ストレスの緩衝効果を引き出せるのかということに注目する。そのため、ソーシャル・サポートのアプローチでは、個人の主観的健康感、心理状態などを取り扱い、個人と深く関係性を持っている「強い紐帯」の関係性に焦点を置く研究が多い。

その一方、ソーシャル・キャピタルからのアプローチでは、個人が持っている社会関係に埋め込まれる資源を議論するため、対人関係の要

素に関心を払い、「弱い紐帯」の関係性も包括されている。個人レベルの視点から捉えれば、重なり合う部分もあるが、ソーシャル・キャピタル論で重視している「集合的効力感」である地域の文脈がソーシャル・サポートでは取り扱われていないことになる（原田 2016）。また、Gray (2009) の指摘では、ソーシャル・サポートはソーシャル・キャピタルの従属変数としての結果と位置付けられるにとどまっている。同じく、Ryan et al. (2008) は、ソーシャル・キャピタルはソーシャル・サポートへのアクセス方法と定義する。

これらの議論を踏まえると、本稿では、ソーシャル・キャピタルは復興支援へのアクセス方法を定義したうえで、支援源の議論は強い紐帯に限らず弱い紐帯も無視できないと考えられる。本稿であげられた連結型・橋渡し型・結束型ソーシャル・キャピタルといった3つの様態の概念で言い換えれば、橋渡し型ソーシャル・キャピタルの重要性も重視すべきであることがわかる。

3.2 災害時の高齢者のソーシャル・キャピタル

「平成 29 年版高齢社会白書」によると、2016 年に高齢化率は 27.3% に達する。そのため、災害領域における高齢者への支援策を講じないといけない時代であると言える。ここでは、災害

時の高齢者において、平常時に醸成していた社会関係あるいはソーシャル・キャピタルが、発災後にどのような効果を果たしているのかを中心として議論する。

3.2.1 脆弱性の顕在化とソーシャル・キャピタルの関連

日本での災害事例から見ると、阪神・淡路大震災では、65歳以上の死者数が3,172人と49.5%を占めており（兵庫県2016）、東日本大震災の例でも60歳以上の死者数が10,360人と全体死者数の66.1%を占めている（内閣府2013）。高齢者が持つ災害時の脆弱性は議論の余地がないと言える。バルネラビリティ論では、高齢者の脆弱性を心身機能低下、老朽家屋や密集地への集住などの危険な居住環境や、対人関係の縮小といった論点で議論されてきている（Durant 2011）。高齢者の特徴として、心身機能低下の影響で避難行動の遅れや困難があるため避難行動要支援者となる危険性が高く、平常時から情報メディアが限られる傾向にあり、その意味において情報弱者である（田中2006; 和気2013; 室崎2014）。退職による経済能力の低下、加齢による心身機能の低下、ソーシャル・サポートの欠損などの特徴が見られるため、災害時に他の年齢層と比べて脆弱である（Meyer 2017）。経済状況の制約から老朽化した住宅に暮らしていること、あるいは老朽化した住宅の建て替えや修繕工事を行なおうとする意欲の低下など（田中2006; 室崎2015）、危険な環境に置かれやすい。災害前の被害抑止策に影響を与えるだけではなく、災害後、復旧・復興のためのローンも困難である（Bolin & Klenow 1982）。そして、このような経済面・心身機能の低下もソーシャル・キャピタルに負の影響を及ぼすと指摘されている（Meyer 2017）。

さらに、社会面から見ても、老年層世代では社会関係が希薄化しやすく、その結果、緊急時

に若年層や近隣の救助・支援が届かなかったことが指摘されている（室崎2015）。災害後、特に阪神・淡路大震災の際に、顕在化した課題のひとつが孤独死の問題である。政策面の視点からいえば、災害後、迅速性および公平性を優先したため、避難所・仮設住宅・災害公営住宅へと、高齢者優先という方針のもとで、個々の世帯毎に元々の居住地とは離れた地域へ移転することになった（越山2012; 塩崎2014）。しかし、被災高齢者にとって、長年築き上げた既存の地域の文脈が分断され、元居住地と移転先の移動距離が遠いため、以前のような社会的接触が減少した結果、孤立レベルが高くなったと述べられている（塩崎・田中・目黒・堀田2007）。さらに、移転先が臨海部の仮設住宅や大規模な団地であったことが孤独死の発見が遅れた原因であったことも指摘されている（田中・高橋・上野2010）。また、東日本大震災においても、孤独死は2016年末までで計243人に上っており、特に、仮設住宅で発生したことが多かった（河北新報2017）。東日本大震災では、応急仮設住宅以外のところでの避難生活を余儀なくされた被災者の数が少なくないため、孤独死の発生は阪神・淡路大震災の際に仮設住宅に相次いで発生した形と異なり、今後色々な形で関連死や孤独死が表れることが懸念されている（塩崎2014）。すなわち、孤独死が懸念されている現在、高齢者を主体とした研究は多方面からの包括的アプローチが不可欠であり、ソーシャル・キャピタルは共通の理論的な枠組みとして活用できると考えられる。

3.2.2 災害後の支援からみた高齢者のソーシャル・キャピタルの特徴

ソーシャル・キャピタル論では資源はどのように取り扱われるのかという視点から、高齢者が災害後、復旧・復興のために、獲得した支援

を中心とし、各種のソーシャル・キャピタルがどのような役割を演じているのかをレビューする。

・連結型ソーシャル・キャピタルからの公的支援

ここまで述べたように、高齢者は災害に対する脆弱性が高いという特徴が顕在化しているため、災害時の連結型ソーシャル・キャピタルである公助支援は諸制度の充実が図られてきた。災害時の避難支援についての2006年「災害時要援護者の避難支援ガイドライン」、2012年改正された「避難行動要支援者の避難行動支援に関わる取組方針」、避難所の生活のために、2008年に定められた「福祉避難所設置・運営に関するガイドライン」である。災害後の被災者支援は、一般的な「災害救助法」や「被災者生活再建支援法」などの支援策に加えて、高齢者に向けての支援策も多方面に展開されている。

他方、2006年介護保険制度の改正から実施

されている「地域包括支援センター」を核に、地域コミュニティを基盤として30分以内に必要医療・介護・保健・福祉・生活支援などのサービスが一体的に提供される日常生活圏域を基本とし、災害後も継続的な支援が展開されることが図られている(飯島2014)。しかしながら、災害後には避難所→応急仮設住宅→災害公営住宅の流れで数回移動し、介護サービスの利用数やニーズの変化も見られる(高梨・清水2015)。高齢者を対象とした公的支援は、各段階で多職種の連携で支援する方針に進んでおり(松岡2012; 石崎2017)、災害後の各段階に応じて支援を継続し連携できることも今後の課題として、無視できない点が指摘されている(黒田2012)。

・結束型および橋渡し型ソーシャル・キャピタルからの私的支援の補足

復旧・復興においては、このように災害後の公助が大きな役割を占めている。しかし、大災害が発生した際に、公助の手から漏れる、あるいは支援格差があることも事実である(松岡2012; 佐藤2013)。高齢者について、他人からの支援を拒否することや自己尊厳を維持するために、支援の要請がしにくい傾向も指摘されている(Fernandez, Byard, Lin, Benson & Barbera 2002; 近田2016)。また、みなし住宅の入居者においてはニーズがあっても支援が少な

い(菊地・三澤・大塚・三浦2014)など、公助の隙間に落ちていく人も少なくない。

さらに、公的支援を受けたとしても、この効果には限界がある。兵庫県生活復興調査の平成13年の報告書では、災害後に精神面、物資面、情報面の支援を誰に依頼したか尋ねた結果、精神面および物資面の支援は家族に強く依存していたことが明らかになった。Sadri, Ukkusuri, Lee, Clawson, Aldrich, Nelson, Seipel & Kelly (2018)の研究でも、「家族や友人」と「近

隣」からの復興支援は公的支援より効果的であるという結果が検証された。すなわち、公的支援を活かすことに加えて、災害後の私的支援に注視する必要性もあることになる。

第2章で述べたように、災害後のソーシャル・キャピタルの効果が期待されていることから、コミュニティベースのソーシャル・キャピタル研究が盛んである。しかし、同じ地域の構成員であっても、高齢者へのソーシャル・ネットワークや資源配布が均一ではなく、排除されることもある (Lager, van Hoven & Huigen 2015; Kaniasty & Norris 1995)。また、ソーシャル・キャピタルの時間的かつ空間的な特徴によって、ソーシャル・キャピタルから提供できる資源も異なる (Ryan et al. 2008; Fussell 2006)。そのため、災害後の資源へのアクセスを確保することが重要であることが指摘されている (Fernandez et al. 2002)。しかしながら、高齢者を主体としたソーシャル・キャピタル研究は、災害前と同様な着眼点で高齢者のメンタルヘルス中心となっており (岩垣・辻内・増田・赤野・小牧・福田・持田・石川・山口・猪股・根ヶ山・小島・熊野・扇原 2017)、社会面や生活面などの研究は十分と言えない。

高齢者における私的支援に関する研究は不足しているが、これらの研究からいくつかの高齢者の特徴が見られる。Kilijanek & Drabek (1979) の研究では、支援源を 1) 親戚、2) 友人、3) 宗教団体、4) 赤十字、5) 救世軍、6) 他のボランティア組織、7) 行政、8) 見知らぬ人、9) 仕事関係の人といった 9 つの社会関係に分けている。60 歳以上の高齢者のうち、2 割弱の者は支援源がなく、7 割強程度の者が上記 9 種類

の支援源のうち、1～4 種類の支援源を使っており、他の年齢層と比較すると、支援源が限定されたり単調であることなどが指摘されている。

そして、災害時における橋渡し型・結束型ソーシャル・キャピタルからの私的支援に着目すれば、日頃深い交流がなされているネットワークは、緊急時にも助け合うことが可能である (孟 2013)。実際に、東日本大震災による被災を受けた高齢者が、災害時や病気の際に、家族に依存する割合は、8 割を超えていることが指摘されている (遠藤 2015)。つまり、限られた研究に留まっているが、高齢者にとって、災害後の結束型ソーシャル・キャピタルが重要な役割を担っていることが窺える。

阪神・淡路大震災では、6 割以上の被災者が共助によって救われていた (日本火災学会 1996: 239-240)。また、冒頭に述べた東日本大震災の時に、家族や近所の助け合いが大きな役割を果たしており (中林・土屋・三浦・小田 2017)、住民間のつながりや社会的紐帯の重要性が指摘されている (Tatsuki & Hayashi 2002)。しかしながら、高齢者の特徴から見れば、災害前に有する生活支援ネットワークは、日頃の移動範囲が限られているため範囲が縮小し、結束型ソーシャル・キャピタルである家族と狭い範囲の近隣住民とが中心となることが予想される。実際に、災害後の社会参加や他人との交流機会もさらに減少する傾向にある (杉澤 2016; 近藤 2014)。

このように、公的支援には限界があることを踏まえ、高齢者がどのように自身が保有する資源を使い、受けられるあるいは受けられない

ソーシャル・キャピタルの特徴や実態を把握したうえ、公的支援と私的支援を併用し、最大の

効果を引き出すことは、復興格差を低減していくうえで重要な視点であると言えよう。

4. 今後の研究の課題と展望

本稿では、災害領域におけるコミュニティレベルからの研究をレビューした結果、今までの議論はコミュニティレベルのものが多く、しかし個人レベルでのソーシャル・キャピタルの差による支援の差があることを踏まえ、個人の視点が重要であることを論じた。特に、災害後の移転や高齢期に入ってから社会関係の縮小によってソーシャル・キャピタルが変動するため、災害後の支援の欠如や社会的に孤立しやすいことに関する論点も加えて論じ、第二軸として分析してきた。

被災高齢者への包括的な支援策の視点からは、ソーシャル・キャピタルからの私的復興支援についての研究がまだ欠如しているため、今後は復旧・復興時における高齢者のソーシャル・キャピタルの構造と効果の検証が課題とな

る。そのための具体的な研究課題として、復旧・復興のための必要な支援を災害後の資源とし、家族・近隣住民である結束型ソーシャル・キャピタル、他地域の友人や単なる仕事関係の人との関係である橋渡し型ソーシャル・キャピタルと行政との関係である連結型ソーシャル・キャピタルにわけ、高齢者と非高齢者のソーシャル・キャピタルからの支援の特徴と関係性を比較して検証することがあげられる。また、ソーシャル・キャピタルは動的な特性を持つが、今回レビューした既往研究では、災害前後の研究が限られるため、今後の課題として、結束型、橋渡し型と連結型ソーシャル・キャピタルの関係における災害前後の変化も議論する必要がある。

註

- ¹ 公益財団法人日本漢字能力検定協会が応募した結果、2011年は「絆」であった。
http://www.kanken.or.jp/project/edification/years_kanji/2011.html 参照：2017年10月13日。

参考文献

- Aldrich, D.P., 2012, "Building Resilience: Social Capital in Post-disaster Recovery." The University of Chicago Press. 訳：石田祐・藤澤由和, 2015, 災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か, ミネルヴァ書局.
- Bolin, R. & Klenow, D., 1982, Response of the Elderly to Disaster: An Age-Stratified Analysis. *The International Journal of Aging and Human Development*, 16 (4), pp283-296.
- Bourdieu, P., 1986, The Forms of Capital, pp241-258. Richardson, J., 1986, "Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education." Westport, CT: Greenwood.
- Cramm, J.M., van Dijk, H.M. & Nieboer, A.P., 2012, The Importance of Neighborhood Social Cohesion and Social Capital for the Well Being of Older Adults in the Community, *The Gerontologist*, 53 (1), pp142-150.
- Durant, T.J., 2011, The Utility of Vulnerability and Social Capital Theories in Studying the Impact of Hurricane Katrina on the Elderly, *Journal of Family Issues*, 32 (10), pp1285-1302.

- Dynes, R., 2002, "The Importance of Social Capital in Disaster Response" Preliminary Paper #327, University of Delaware Disaster Research Center.
- Fernandez, L.S., Byard, D., Lin, CC, Benson, S. & Barbera, J.A., 2002, Frail Elderly as Disaster Victims : Emergency Management Strategies, *Prehospital and Disaster Medicine*, 17 (2) , pp67-74.
- Fussell, E., 2006, Leaving New Orleans : Social Stratification, Networks, and Hurricane Evacuation. <http://understandingkatrina.ssrc.org/Fussell/>.
- Gray, A., 2009, The Social Capital of Older People, *Ageing & Society*, 29 (1) , pp5-31.
- Hawkins, R.L. & Maurer, K., 2010, Bonding, Bridging and Linking : How Social Capital Operated in New Orleans following Hurricane Katrina, *The British Journal of Social Work*, 40 (6) , pp1777-1793.
- Islam, R. & Walkerden, G., 2014, How Bonding and Bridging Networks Contribute to Disaster Resilience and Recovery on the Bangladeshi Coast, *International Journal of Disaster Risk Reduction*, 10, pp281-291.
- Joshi, A. & Aoki, M., 2014, The Role of Social Capital and Public Policy in Disaster Recovery : A Case Study of Tamil Nadu State, India, *International Journal of Disaster Risk Reduction*, 7, pp100-108.
- Kaniasty, K. & Norris, F.H., 1995, In Search of Altruistic Community : Patterns of Social Support Mobilization Following Hurricane Hugo, *American Journal of Community Psychology*, 23 (4) , pp447-477.
- Kawachi, I., Kim, D., Coutts, A. & Subramanian, S.V., 2004, Commentary : Reconciling the Three Accounts of Social Capital, *International Journal of Epidemiology*, 33 (4) , pp682-690.
- Kilijanek, T.S. & Drabek, T.E., 1979, Assessing Long-Term Impacts of a Natural Disaster : A Focus on the Elderly, *The Gerontologist*, 19 (6) , pp555-566.
- Lager, D., Van Hoven, B. & Huigen, P., 2015, Understanding Older Adults' Social Capital in Place : Obstacles to and Opportunities for Social Contacts in the Neighborhood, *Geoforum*, 59, pp87-97.
- Lin, N., 2001, "Social Capital : A Theory of Social Structure and Action by Nan Lin" , Cambridge University Press. 訳 : 筒井淳也・石田光規・桜井政成・三輪哲・土岐智賀子, 2008, ソーシャル・キャピタル—社会構造と行為の理論—, ミネルヴァ書房.
- Mathbor, G.M., 2007, Enhancement of Community Preparedness for Natural Disasters : The Role of Social Work in Building Social Capital for Sustainable Disaster Relief and Management, *International Social Work*, 50 (3) , pp357-369.
- Meyer, M.A., 2017, Elderly Perceptions of Social Capital and Age-Related Disaster Vulnerability, *Disaster Medicine and Public Health Preparedness*, 11 (1) , pp48-55.
- Murayama, H., Nishi, M., Matsuo, E., Nofuji, Y., Shimizu, Y., Taniguchi, Y., Fujiwara, Y., Shinkai, S., 2013, Do Bonding and Bridging Social Capital Affect Self-Rated Health, Depressive Mood and Cognitive Decline in Older Japanese? A Prospective Cohort Study, *Social Science & Medicine*, 98, pp247-252.
- Murphy, B.L., 2007, Locating Social Capital in Resilient Community-level Emergency Management, *Natural Hazards*, 41 (2) , pp297-315.
- Nakagawa, Y. & Shaw, R., 2004, Social Capital : A Missing Link to Disaster Recovery, *International Journal of Mass Emergencies and Disasters*, 22 (1) , pp5-34.
- Poortinga, W., 2006, Social Relations or Social Capital? Individual and Community Health Effects of Bonding Social Capital, *Social Science & Medicine*, 63 (1) , pp255-270.
- Putnam, R.D., Leonardi, R. & Nanetti, R., 1993, Making democracy work : civic traditions in modern Italy. Princeton : Princeton University Press. 訳 : 河田潤一, 2001, 哲学する民主主義 : 伝統と改革の市民的構造, NTT 出版.
- Ritchie, L.A. & Gill, D.A., 2007, Social Capital Theory as an Integrating Theoretical Framework in Technological Disaster Research, *Sociological Spectrum*, 27, pp103-129.
- Ryan, L., Sales, R., Tilkki, M. & Siara, B., 2008, Social Networks, Social Support and Social Capital : The Experiences of Recent Polish Migrants in London, *Sociology*, 42 (4) , pp672-690.
- Sadri, A. M., Ukusuri, S.V., Lee, S., Clawson, R., Aldrich, D., Nelson, M. S., Seipel, J., Kelly, D., 2018, The Role of Social Capital, Personal Networks, and Emergency Responders in Post-disaster Recovery and Resilience : A Study of Rural Communities in Indiana, *Natural Hazards*, 90 (3) , pp1377-1406.
- Shimada, G., 2015, The Role of Social Capital after Disasters : An Empirical Study of Japan Based on Time-Series-Cross-Section

- (TSCS) data from 1981 to 2012, *International Journal of Disaster Risk Reduction*, 14, pp388-394.
- Szreter, S. & Woolcock, M., 2004, Health by Association? Social Capital, Social Theory, and the Political Economy of Public Health, *International Journal of Epidemiology*, 33, pp650-667.
- Tatsuki, S. & Hayashi, H., 2002, Seven Critical Element Model of Life Recovery : General Linear Model Analyses of the 2001 Kobe Panel Survey Data, *Proceedings of 2nd Workshop for Comparative Study Urban Earthquake Disaster Management*, pp23-28.
- Wei, J. & Han, Y., 2018, Pre-disaster Social Capital and Disaster Recovery in Wenchuan Earthquake-Stricken Rural Communities, *Sustainability*, 10 (6) , pp2046-2062.
- 飯島勝矢, 2014, 被災地域における地域包括ケアシステム, *老年医学*, 52(2), pp125-129.
- 池田謙一, 2015, 震災から見える情報メディアとネットワーク, *東洋経済新報社*.
- 石崎雅人, 2017, 「高齢者介護のコミュニケーション研究—専門家と非専門家の協働のために」, ミネルヴァ書房.
- 稲葉昭英, 2007, ソーシャル・サポート・ケア・社会関係資本, *福祉社会学研究*, 4, pp61-76.
- 稲葉陽二・大守隆・金光淳・近藤克則・辻中豊・露口健司・山内直人・吉野諒三, 2014, 「ソーシャル・キャピタル『きずな』の科学とは何か」, ミネルヴァ書房.
- 稲葉陽二, 2009, 定年後のソーシャル・キャピタル: 会社縁から地縁・血縁への変化, *経済社会学年報*, 31, pp139-145.
- 今田高俊, 2014, 第1章信頼と連帯に支えられた社会を構築する—社会関係資本の視点から, pp17 - 51. 辻竜平・佐藤嘉倫, 2014, 「ソーシャル・キャピタルと格差社会: 幸福の計量社会学」, 東京: 東京大学出版会.
- 岩垣徳大・辻内琢也・増田和尙・赤野大和・小牧久見子・福田千加子・持田隆平・石川則子・山口摩弥・猪股正・根ヶ山光一・小島隆矢・熊野宏昭・扇原淳, 2017, 福島原子力発電所事故により県外避難する高齢者の個人レベルのソーシャル・キャピタルとメンタルヘルスとの関連, *心身医*, 57, pp173-184.
- 遠藤薫, 2015, 東日本大震災後の日本社会における(地域)へのまなざし 2015年5月全国調査による(生死観)と社会関係資本, *学習院大学法学会雑誌*, 51(1), pp155-166.
- 長田由紀子, 2014, 家族のライフサイクル—個人の一生と家族の一生—, pp366-367, 日本老年行動科学会監修, 2014, 「高齢者のこころとからだ事典」, 中央法規.
- 河北新報 2017年3月4日, <震災6年>孤独死被災3県 243人, http://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201703/20170304_13042.html. 参照: 2017年10月13日.
- 河合義和, 2009, 「大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立」, 法律文化社.
- 菊地和則・三澤仁平・大塚理加・三浦久幸, 2014, 東日本大震災における被災高齢者のニーズ—地域包括支援センター調査から—, *老年医学*, 52(2), pp137-140.
- 黒田裕子, 2012, 仮設住宅状況・医療・福祉避難所支援—被災地の現場からの一声—, *復興* 5号, 4(1), pp39-46.
- 越山健治, 2012, 第6章住宅再建と地域復興, 「検証東日本大震災」, 関西大学安全社会安全部編, pp134-150, ミネルヴァ書房.
- 古谷野亘・矢部拓也・西村昌記・高木恒一・浅川達人・安藤孝敏, 2007, 地方都市における高齢者の社会関係—気心が知れた他者の特性—, *老年社会科学*, 29(1), pp58-64.
- 小山弘美, 2012, パーソナル・ネットワークからみた高齢者の孤立と地域の役割, *社会論考*, 33, pp1-27.
- 近田真美子, 2016, 被災者・支援者の境遇と<ことば>の役割, *地方自治職員研修*, 49(8), pp23-25.
- 近藤尚己, 2014, 東日本大震災復興期における高齢者の健康状態および社会参加状況に関する調査結果, *老年医学*, 52(2), pp147-151.
- 斎藤雅茂, 2008, 高齢者の社会的ネットワークの経年的変化—6年間のパネルデータを用いた潜在成長曲線モデルより—, *老年社会科学*, 29(4), pp516-525.
- 坂本治也, 2010, 日本のソーシャル・キャピタルの現状と理論的背景, *ソーシャル・キャピタルと市民参加*, pp1-31.
- 佐藤翔輔・今村文彦・林春男, 2013, 東日本大震災における被災地からの人的支援量の関連要因に関する分析, *地域安全学会論文集*, 19, pp1-11.
- 塩崎賢明・田中正人・目黒悦子・堀田祐三子, 2007, 災害復興公営住宅入居世帯における居住空間特性の変化と社会的「孤立化」: 阪神・淡路大震災の事例を通して, *日本建築学会計画系論文集*, 72(611), pp109-116.
- 塩崎賢明, 2014, 「復興<災害>—阪神・淡路大震災と東日本大震災」, 岩波書店.
- 杉澤秀博, 2016, 老年学におけるソーシャル・キャピタルに関する研究の意義と課題, *老年社会科学*, 37(4), pp465-473.
- 高梨信之・清水陽平, 2013, 高齢者支援の視点からみる, 岩手陸前高田の現実と未来: 復旧から復興, そして復讐へ, *作業療法ジャーナル*, 47(12), pp1324-1330.

- 立木茂雄・林春男・矢守克也・野田隆, 2004, 阪神・淡路大震災被災者の長期的な生活復興過程のモデル化とその検証: 2003年兵庫県復興調査データへの構造方程式モデリング(SEM)の適用, 地域安全学会論文集, 6, pp251-260.
- 田中淳, 2006, 災害弱者問題について, 月刊消防, 28(3), pp98-103.
- 田中正人・高橋知香子・上野易弘, 2010, 応急仮設住宅における「孤独死」の発生実態とその背景—阪神・淡路大震災の事例を通して—, 日本建築学会計画系論文集, 75(654), pp1815-1823.
- 土屋依子・中林一樹・小田切利栄, 2014, 被災者に復興感からみた東日本大震災の生活復興過程—大船渡・気仙沼・新地の3カ年の被災者調査から—地域安全学会論文集, 24, pp253-261.
- 筒井淳也, 2007, ソーシャル・キャピタル理論の理論的位置づけ: 効率性と公平性の観点から, 立命館産業社会論集, 42(4), pp123-135.
- 内閣府, 2013, 平成25年版高齢者社会白書(全体版), https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/zenbun/25pdf_index.html, 参照: 2017年8月20日.
- 中林一樹・土屋依子・三浦春菜・小田切利栄, 2017, 津波被災者の生活復興感からみる東日本大震災6年間の復興プロセス—2012年から2017年—, 2017年日本災害復興学会予稿集, pp75-78.
- 日本火災学会, 1996, 1995年兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書, pp239-240.
- 原田謙, 2016, 社会学の系譜から地域の文脈効果を再考する: 集合的効力感に着目したソーシャル・キャピタル研究, 老年社会科学, 37(4), pp447-455.
- 原田博夫, 2012, 東日本大震災とソーシャル・キャピタル(社会関係資本), 社会関係資本研究論集, 3, pp5-20.
- 兵庫県, 2016, 阪神・淡路大震災の死者にかかる調査について(平成17年12月22日記者発表), https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk42/pa20_000000016.html, 参照: 2017年10月10日.
- 広田純一, 2015, 第2講恒久住宅への移行とコミュニティづくり, pp22-36. ひょうご震災記念21世紀研究機構研究調査本部, 2015, 「災害時の生活復興に関する研究—生活復興のための12講—」.
- 藤崎宏子, 1998, 高齢者・家族・社会的ネットワーク, 培風館.
- 前田尚子, 2004, 友人関係のジェンダー差—ライフコースの視点から—, 老年社会科学, 26(3), pp320-329.
- 益田勉, 2015, キャリア・ネットワークと後期キャリア発達, 生活科学研究, 37, pp27-40.
- 松岡千代, 2012, 被災高齢者の健康・生活ニーズと看護支援, 老年社会科学, 33(4), pp606-612.
- 村山洋史, 2016, ソーシャル・キャピタルの多面性—地域保健活動でいかに醸成を目指すか—, 老年社会科学, 37(4), pp456-464.
- 室崎益輝, 2009, 災害後の復興のあり方について, 災害復興研究, 1, pp1-7.
- 室崎益輝, 2013, 阪神・淡路大震災後の住宅再建と居住問題, 災害復興研究, 5, pp107-113.
- 室崎益輝, 2014, 高齢社会における災害対策の課題, 公衆衛生, 78(9), pp633-637.
- 室崎益輝, 2015, 第2章被災地は安全になったのか—一次に向けての減災の課題—, pp29-41. 「震災復興学—阪神・淡路20年の歩きと東日本大震災の教訓」, ミネルヴァ書房.
- 孟憲晨, 2013, 奄美大島災害時の「老老支援」に関する考察: 西仲間集落豪雨災害の高齢者支援を事例にして, 南太平洋研究, 33(2), pp119-135.
- 和気純子, 2013, 震災と高齢者—地域包括ケアと福祉コミュニティ形成—, 学術の動向, pp27-33.

薛 欣怡 (せつ・しんい / Hsueh, Hsin-Yi)

[生年月] 1987年2月

[出身大学または最終学歴] 国立台湾大学建築と城郷研究所 修士課程修了
(Graduate Institute of Building and Planning of National Taiwan University)

[専攻領域] 災害社会学、都市計画論

[主たる著書・論文]

「被災者への支援とソーシャル・キャピタルの関係性についての実証的研究—台湾における2009年の台風8号の被災者を例とした二次分析—」, 日本災害復興学会論文集, 第12号, pp30-45, 2018.

[所属] 東京都大学院 学際情報学府 学際情報学専攻 社会情報学コース、田中淳研究室 博士課程

[所属学会] 日本災害復興学会、日本災害情報学会、地域安全学会、自然災害学会

A Review of Post-Disaster Recovery and Reconstruction for the Elderly from the Individual Social Capital Perspective

Hsinyi Hsueh*

The burgeoning interest in the role of social capital in disaster recovery started 20 years ago. Especially, after the Great East Japan Earthquake, social capital has been used to explain disaster resource distribution including physical supplies and volunteers from all over Japan. In Japanese, it is called the power of “Kizuna” which was chosen as the most representative word in 2011. Actually, in the disaster research field, it has been proven that the speed of recovery is greater in stricken areas with higher community-based social capital. However, this boom lacks an individual social capital perspective. Notably, previous research shows that older adults represent a highly vulnerable population during disasters, but how they use their social capital to achieve recovery is seldom discussed. In this study, I targeted the elderly as a research subject and tried to reorganize the correlation between individual social capital and disaster support.

First, this article reviews previous research about social capital theory and how this theory has been used in disaster research. After reviewing the theory, the research frame of social capital is defined as bounding social capital, bridging social capital and linking social capital. Secondly, the study uses this research frame to present features of the elderly from individual social capital perspective of the elderly in post-disaster, and found out that the elderly are highly independent in bounding social capital and linking social capital. Finally, this article points out that future research will use a comprehensive view on how to support the elderly in post-disaster.

*Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo.

Key Words : post-disaster, the elderly, individual social capital, reconstruction support

政治転換期中国における インディペンデントキュレーターの実践

The Social Practices of Independent Chinese Curators in the Post-Mao Era

陳 海茵*
Haiyin Chen

1. 問題の所在

ヨーロッパとアメリカで興隆した現代美術は2000年以降、その専売特許をメキシコシティ、リオデジャネイロ、ナイロビ、ニューデリー、ソウル、東京、北京、上海といった多様な都市に移し、アジア最大規模の美術市場を有する中国は今や画廊数、作品数、取引金額ともにアメリカと肩を並べるようになったⁱ。こうした状況の中、先進国以外の地域における美術の生産、流通、消費をめぐる人々の活動についての社会学的研究は増えているとは言い難い。

本稿は、グローバル化の進展とともに現代美術の主要都市となった中国・北京を取り上げ、その中でも、美術の潮流を決定する重要な役割を果たすインディペンデントのキュレーター（中国表記：策展人）という職業に着目するⁱⁱ。今日のキュレーターは展示の企画構想から運営管理まで、仕事の随所で多くの知識や人的資源、経済的資源を動員するという点で美術業界において影響力が強く、アートの現場では常に

中心的存在に位置づけられているⁱⁱⁱ。

中国の場合、社会主義的市場経済政策によってアートマーケットが出現した1990年代頃からインディペンデントで活動する批評家やキュレーター（策展人）が制度レベルで普及し始め、芸術的表現をめぐる政府の指導方針や芸術組織の配置、労働システムといった中国特有の社会制度と絡み合いながら急速に発展してきた。しかし、キュレーターという専門的職種の中国での機能の仕方について、これまで芸術社会学の研究対象からしばしば見過ごされてきたように思える。本稿は、中国でキュレーターという職業が萌芽した1980年代の中国の美術業界の構造変化と、具体的な出来事としての「中国現代芸術大展」を分析することで、中国における最初のインディペンデントキュレーターたちの活動における「制約」と「戦略」を明らかにする。

毛沢東時代までの中国では、博物館や美術館は政府の指導下にあり、思想的に正しいとされ

* 東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：アートワールド、芸術社会学、中国現代美術、卓越化、キュレーター。

る芸術品を掲げることが展示施設の役割とされてきた (Ho 2017: 26-7)。しかし1980年代初頭から鄧小平時代の「改革開放」政策が始まると、美術分野では欧米の流派の展覧会が開かれるようになり (例えば、アメリカンポップアートの旗手であるロバート・ラウシェンバーグの巡回展や中小規模の印象派の展示など)、外国から輸入された文学、音楽、哲学に影響を受けた様々な芸術表現が中国の若者を中心に人気を集めた。特に1985年前後には全国で大小100を超える現代美術の自主グループができ、各地で自主展覧会も開かれるほどに現代美術のブームは盛り上がりを見せた。そしてついに1989年には国家美術館を会場とした全国展「中国現代芸術大展 / CHINA AVANT-GARDE」が開催され、これは今日まで中国現代美術が国内外ともに公認された記念碑的イベントとして記録されている。

この全国展「中国現代芸術大展 / CHINA AVANT-GARDE」が注目に値するのは、その展示作品群が中国美術史にとって重要であるだけでなく、特殊な政治社会環境の中で作品メッセージの難解な現代美術の展覧会を成り立たせる行為そのもの、及びそれを担った人々の職業実践、つまり中国におけるキュレーター制度や美術業界の構造を考える上でも画期的な事例なのである。実際、「中国現代芸術大展 / CHINA AVANT-GARDE」は途中から過激な芸術家による銃撃パフォーマンスによって2度中断に追い込まれたり、中心的なキュレーターが職務を解任されたりと、センセーショナルな結末を迎えて一部報道では「天安門事件の前哨」とも言われた。本展の作品内容の詳細な記録と分析

は、美術史家・高名潞 (Gao Minglu) が2008年に編纂した The '85 Movement: An Anthology of Historical Sources などが詳しいのでここでは詳述しないが、本稿は以下の問いから出発することを以下に明記しておく。

中国において展示を企画する (=キュレーティング) という行為は、国家による現代アートの受容—美術の新しい表現様式に対する包摂と排除—というプロジェクトの初期に導入されたものだとすれば、当時のキュレーターは国家の介入と前衛美術の自律的発展の緊張関係をめぐってどのように折り合いをつけていたのだろうか。

上記の問いを分析するために、本稿では素材として1989年の「中国現代美術大展」にキュレーターとして関わった者達が展覧会直後に執筆した回顧記事や手記、対談記事など、書籍や展覧会カタログ、美術雑誌に所収され中国国内でもアクセス、入手できるものを用いた。日本語訳は全て筆者による。筆者によるインタビューではなく当時のテキスト資料のみを用いているのは、1989年当時の出来事をより鮮明に記憶していた時期に記されたテキストの方が、回顧的に語り直すインタビューよりも分析に適していると判断したためである。何故なら、現在置かれている政治社会状況において当時のことを語ってもらう場合、「過去」の出来事を「現在」の状況や知識を元に再構成することが意識的にせよ無意識的にせよ生じかねず、特に言論に対する社会の「空気圧」が時期によって変わってくるという環境要件も考慮すると、よほどの不足が無い限りは当時のテキストに限定した方が適切な資料選択になると判断した。

本稿の議論の流れは以下の通りである。まず2章で芸術作品に評価・価値を付与したり分類したりする人々の実践に焦点を当てた芸術社会学分野の先行研究について敷衍し、本研究の理論と方法を検討する。3章では、本稿で扱う中国の初期キュレーターの誕生背景と社会的属性を2つのパートに分けてそれぞれ明らかにする。3-1で中国における現代美術展の出現の背景にある政治的・社会的文脈について、3-2で現代美術展のゲートキーパーとして当時の雑誌

編集者が台頭したことについて論じる。4章では、雑誌編集者が1989年の「中国現代芸術大展」のキュレーターとなって作品と作家を選別したり自らの判断を正当化したりする際の「制約」と「工夫」を明らかにする。最後に、国家と芸術の関係性をめぐる欧米中心の芸術社会学の議論や既存の芸術社会学を相対化する試みとしての本研究の特異性について議論し、その意義と今後の展望を明らかにする。

2. 先行研究：芸術分野における人々の評価と価値付けの実践

本節では芸術の生産、流通と消費をめぐる人々の意味づけの実践についての芸術社会学の先行研究を敷衍した上で、本研究が取る方法論的立場を述べる。

芸術社会学の古典である P. Bourdieu (1993) の理論を応用した多くの後発の事例研究について、M. Lamont ら (2012, 2015) は以下のように批判している。

ブルデューの研究の到達点はフランスの美術の場を対象に、文化生産という営みの独特な構造を生み出した歴史的な偶発性を伝えてくれたことにある。つまり芸術の自律性とは、超越的で普遍的なものではなくむしろ特殊な条件下でのみ発生するものである。にもかかわらず、後発研究の多くは上記のポイントを見過ごしたまま様々なケースへと適用させてきた。すなわち、評価者のアイデンティティ実践 (Self-concept) や評価プロセスそのものに内在する行為のダイナミズムを捉えられ

ずに来てしまったのだ。(Beljean, Chong and Lamont 2015: 39-40)

ここではブルデューが用いた数量的手法一すなわち、個々の文脈や実践の詳細を括弧に入れたかたちで人々の文化的嗜好性の力学を客観的に明らかにするというやり方一ではなく、個別の実践やそれぞれの文脈から生じる主体的な意味づけの実践を掬い取って分析の俎上に乗せることの必要性が説かれている。Lamont は、Sociology of Valuation and Evaluation (以下 SVE と略す) と呼ばれる一連の実証的研究を通じて、同一ジャンルの芸術活動において一それがジャズであれコメディであれ一評価者の下す判断や意思決定はア priori に均質性や客観性を持つわけではなく、主観的なダイナミズムを有することを指摘した (Beljean, Lamont 2015: 41)。

SVE の芸術分野への応用として、O. Velthuis (2003) は絵画などの芸術品の価格が決められ

る時、そこには経済的なメカニズムとは別に、画商や批評家といった芸術関係者たちの相互行為や職業規範といった文化的・社会的なメカニズムがあることを析出した。例えば画商が絵画を買い付ける際には習慣として作品サイズの大小を価格の判断基準とすることで取引交渉をスムーズにしたり、売れる数量よりもいかにその後値崩れを起こさせないかが商売人としての評価につながるという認識の前提に立って作品を選んだりしているという。

上記のようなSVEによる芸術社会学研究に付け加えて、Lamontは以下の論点への着眼を促している。それは、特定の文化活動を産業全体から見た時、個々の独立した生産者や批評家ではなく、経済社会学者や組織研究者が行ってきたようなやり方で、正式な組織（Formal organization）や、組織間どうしの関係性、組織内部の力関係が価値づけ行為に及ぼす影響へ言及する必要性があるということである（Beljean, Chong and Lamont 2015: 43-44）。

これについては、P. DiMaggio（1991）が1920～40年代アメリカの演劇やファインアートの発展を、美術館、高等教育、カーネギー財団、業界団体AAM（American Association of Museum）といった周辺環境の動きとの関連から分析した実証研究が示唆的である。そこでは、生産者であるアーティストの活動とは別

に、それを取り巻く資源、消費者、規制機関、および競合他者といった「組織フィールド（organizational field）」が持つ力学の重要性が指摘された（DiMaggio [1991]2012: 267-292, Baumann 2001: 405）。同論文では、業界が成熟するに連れてフィールドが構造化され硬直化しがちである一方、異なるアクター間の価値認識をめぐる闘争やコンフリクトによってフィールドそのものに革新や変化が生まれることを考察した。

本研究が中国という地域をケーススタディの対象として扱う意義と独自性を簡潔に先取りすると、人々の評価行為や組織のコンフリクトが国家の統治体制や国家政治の思想方針と整合性を保つことに前提した場合、いかなる配慮や工夫が行われるのかという点が議論されることである。つまり本稿の独自性は政治的な正当性と芸術的価値づけの妥当性を両立させることが不可避免的に求められた場合に、人々はそこで生ずる緊張関係をどのように緩和させたり、回避したりするのかという疑問にアプローチすることにある。

ここまで敷衍してきた芸術社会学としてのSVE研究や組織研究の分析枠組みを用いて、次節以降では芸術家以外の人々が芸術の生産や流通、消費で行う様々な価値づけ行為とそれを可能にする外的条件を実証的に議論していく。

3. ポスト文革期中国の文化政策と美術機構

本節では、まず3-1で鄧小平の指導による「改革開放」政策が文革中の美術機構の構造に風穴を空けたことと、1985年前後の中国美術業界

の特徴的を粗描する。3-2では、現代美術のゲートキーパーとして雑誌編集者が台頭し、1989年の「中国現代芸術大展」でキュレーションを

任されるほどにまで影響力と存在感を増した社

会的背景について概説する。

3.1 70年代までの美術業界の構造と80年代からの開放政策

改革開放以前、社会主義国家の建設と発展に奉仕することが芸術活動の中心的役割だった。そのため、中国の美術館は国家や地方政府の建設方針によって建てられ、「体制」公認の作家や作品を展示する「会場」としてのみ機能し、別名では「展覧館」とも呼ばれていた。この点で、欧米諸国における美術館（ミュージアム）と異なって独自の思想や理念を掲げたり、独自で特定の芸術流派を支持したりすることが難しく、会場の使用权を提供するにも「体制」の厳しい審査許可を得る必要があった。

1985年以前、公に展示される美術作品は何重もの審査を通過する必要があった。ボトムには美術館や美術家協会、美術学院、画院、文芸連合会^{iv}があり、トップには文化部^vと宣伝部が創作物の公開権を握っている。審査基準は保守的で、党主導の芸術の画一性と受動性を体現している。ある画家の作品が全国美展で入選したり、官制雑誌『美術』に掲載されたりすると、その人は中国美術家協会の一員になることができ、…中略…厳格な戸籍制度がある中国でそれはまさに農村出身者にとっての一大出世を意味する。…中略…しかしその後は状況が変わって自分の好きなように絵を描くことができるようになった。(彭徳:「新潮美術論」『艺术当代』2015年第3期)

引用文末尾の「その後は状況が変わって…」というのは、文化大革命および毛沢東体制が終

息し、1978年から鄧小平新体制が「市場の開放政策」と「政治と文化芸術の分離」へと方針を転換したことを指す。つまり、社会主義革命の宣伝に関わらない芸術の享受がようやく認められたのだ。

開放の号令によって1980年から大学教育が復活し、ヨーロッパやアメリカの近現代美術や哲学思想の書籍が中国国内で流通し始め、1985年をピークに全国各地で美大生や教師、批評家らによって抽象表現主義、ポップ、ダダイズム、シュルレアリスムなど欧米のモダニズム表現を学び実験する動きが盛り上がり、「現代派」の美術を創作する人口は爆発的に増加した(通称「85美術運動」、「85新潮美術」)^{vi}。

こうした作風の急速な多様化にも関わらず、美術館の持つ体制従属的な立場性と展示会場としての役割制限は依然として続き、現代美術を積極的に押し拡げることには加担できなかった^{vii}。したがって作家にとっては、「西側」から輸入された作風の多くが官方の展示施設である美術館の保守的な審査基準をなかなか通過できず、さらに縦割りの組織体制の中で芸術家個人が美術館と直接交渉できないなど、作品の展示をめぐる諸課題に直面していた。表1から分かるように、90年代以前は現代美術のための展示経路が整備されておらず、1979年に行われた中国最初の現代美術展である「星星美展」のときは芸術家自身が展示を野外で「強行」した(牧1998, 陳2017)。

表 1 : 藍慶偉 (2007) による図式化

	1979年「星星美展」	1989年「中国現代展」	1992年「広州ビエンナーレ」
運営人員	芸術家自身	臨時の運営委員会	専門的なキュレーター職
展示組織	芸術家サークル	美術家協会と出版社	美術館主導
資金動員	完全個人出資	出版社と個人出資	企業による協賛

こうした状況のなか、芸術家と美術館の橋渡しとして機能したのが国家や地方の芸術出版機構である。出版機構は社会主義体制における職業割り当て制度である「単位」(=職場)の一つで、多くの芸術系大学生の卒業後の進路として選ばれ、国家御用の雑誌編集者や芸術評論家

も所属している。次項では、美術雑誌が中国現代美術の組織フィールドのなかで主要なプレイヤーであるキュレーターを生み出すこととなった背景と、本研究の事例に登場するキュレーター達の属性を明らかにする。

3.2 美術雑誌の増加とキュレーターとしての雑誌編集者

「改革開放」以降、文革の抑圧から解放された人々は言論の自由や民主主義の必要性を訴えるために自ら壁新聞を発行したり、あるいは雑誌を自主出版したりして意見の表明を行った。彼らは「中国社会が没落した本当の原因を明らかにするためには、勉強しながら討論を続け、そうして得られた知見をさらに多くの人に見せて議論してもらい、社会のなかで検証しなければならない」(路 1983: 113) と主張して、『四五論壇』、『沃土』、『今天』など複数の論壇雑誌を発行した。

同じく文革中に停刊を余儀なくされていた『美術』、『美術研究』といった伝統的な美術雑誌も、姉妹誌として『世界美術』、『新美術』、『美術史論』、『中国油絵』といった雑誌を新たに創刊し、外国美術書籍の翻訳や論評、新人作家の紹介などを積極的に行った。「改革開放」後に美術大学を卒業した者たちは、就職配属先として出版社を希望することも増え、広い視野と専門知識を備えた編集者となって雑誌に記事を書

くことが普及しはじめた。

いち早く現代美術分野の論評で地位を確立した編集者には、栗憲庭^{リー・シェンティン}と高名潞^{ガオ・ミンルー}が有名である。彼らは当初、最も権威的な雑誌である『美術』に勤めながら、前衛的な創作に取り組む若手芸術家たちと寝食を共にしながら芸術について議論を交わし、そして彼らの作品を熱心に紙面上で紹介して現代芸術家の知名度と正統性の獲得に尽力した。当時の中国の美術家協会や美術館からはまだほとんど理解を得られない現代派の若手芸術家も、しばしばまず彼らに「発掘」してもらうことが自分たちの将来を左右すると認識していた。

栗憲庭^{リー・シェンティン}と高名潞^{ガオ・ミンルー}のように、「改革開放」以降に若手芸術家と伴走しながら論評記事を書いていた雑誌編集者は、1985年頃から徐々に若手グループ展の会場探し、芸術家どうしの人脈の紹介、自主展覧会の紹介文の執筆など、展覧会におけるキュレータ的な役割を非公式な形で担い始めるようになった。こうした小規模な自

表 2：代表的な展示運営委員

	出生	学歴	当時の所属	1989年以後
ガオ・ミンルー 高名潞	1949	中国芸術研究院研究科修士	『中国美術報』 『美術』兼任	渡米 / ハーバード大学美術史博士
リー・シェンティン 栗憲庭	1949	中央美術学院中国画専攻	『美術』のちに 『中国美術報』	インディペンデント批評 / キュレーター
フェイ・ダーウェイ 費大为	1954	中央美術学院美術史専攻	『美術研究』	渡仏 / キュレーター
ホウ・ハンルー 侯瀚如	1963	中央美術学院修士	美大修士	渡仏 / キュレーター

主展の増加を受けて、1989年によく国家直属の中国美術館を会場とした大規模な現代美術展「中国現代芸術大展 / China Avant-Garde Exhibition」が許可され、かねてより現代美術の様々な展覧会の実施に動いていた栗憲庭や高名潞らがキュレーターとして任命された(表2)。評論家の栗憲庭は展示作品の選定と配置を担当し、費大为と侯瀚如は国内外メディアへの広報、最高責任者として美術史家の高名潞が資金調達と官方機関との交渉を担当した。こうした分業制について、ある参加画家は「4人は同等の発言権を持っていて、重大な問題で衝突し

たりもした」(藍庆伟 2007.10『画刊』)と振り返る。

次節では、本展の概要を簡潔に紹介した上で、美術館に所属しないインディペンデントなキュレーターたちが国家の展示施設としては最高権威である中国美術館において現代美術の展覧会を作る際の実践について詳述していく。つまり、彼らがどのような点に準拠して作品や作家の選定と評価しているのか、また国家プロジェクトとの関連においてどのように自らの判断を正当化しているのかについて分析していくことにする。

4. 分析：展覧会をつくる際の「制約」と「工夫」

4.1 コンセプトをめぐるキュレーター間の分岐：「回顧」vs. 「前衛」

『中国美術報』の紙面を通じて中国美術館による展覧会の通知文が公開されると、1985年から盛り上がっていた「現代派」の作品が国家最高の展示会場で公開されることが正式に決定された。

“中国現代芸術展”は、国内社会、および海外の文芸界に向けて、現代美術の観念と精神を伴った芸術作品を展示するための、初の大

型で網羅的な展覧会である。近年の美術界における主要な芸術思潮と、探索実践の諸相に対する関心・議論・批評を集中的に反映し、中国文化の発展における現代美術の価値と意義を提示する。(「中国現代芸術展 展示通告第一号」『中国美術報』1988.10.31付、下線は引用者による)

通知文は、本展がどのような作品をどのよう

なテーマのもとで展示するのかを明確に指示するものではなかったが、「近年の主要な…芸術思潮…集中的に反映し」という過去を回顧するニュアンスが用いられている点には注意を向ける必要がある。なぜなら、本展の方向性を実質的に決定する現場のキュレーターの間、上記の通知文の解釈をめぐって以下のような葛藤と対立があったことが、当時の振り返りを通じて明らかになっている。

ファン・ディアン

范迪安：「中国語が意味するところの“現代芸術展”とみなすのか、英訳版の“Avant-Garde展”とみなすのかという二択の困難に直面しました。何故なら、中国の現代化は20世紀半ばで一度中断されて、80年代から再始動しているから“現代展”をやるならば一定の回顧性と総括性を帯びますから。…中略…しかし、一部の画家はすでに“現代性”では満足できず更にラディカルな“前衛性”へ傾倒していたからです。」

タン・ホンキン

唐庆年：「この種の前衛性とは言い換えれば事件性のことですね。この意味でパフォーマンス・アートが果たした役割は目を見張るもので、マスメディアが放っておくはずがありません。」（高名潞編，1989: 126）

ここでは、展示全体のコンセプトの方向性をめぐって「回顧＝総括」と「前衛性」の2つの分岐があったことが伺える。高名潞を筆頭とする「回顧＝総括」派は、1978年の改革開放から1985年までの7年間で醸成された「新潮美術運動」を一つの区切りとして考え、視覚効果を重視したモダニズム美術の影響を受けた様式の

作風を代表とするこれらの作品は、抽象的でありながら表現技法の卓越化や精神世界の純粹な探求を理念とする点において特徴的だった上に、美術論壇の中でも高い評価を確立していた。いっぽう、1987年以降、いわゆるポストモダンの美術も中国で少しずつ広まりを見せはじめ、社会批評的な要素を含んだ作品や、既成物や身体を使用した表現、ビデオやインスタレーションなどより広範で形式に縛られない表現方法に取り組みだしていたのである。彼らは当時の中国では現代美術界限の内でもまだ評価が定まらず、「前衛性」を帯びていたために、展示に彼らを含めることには一定のリスクがあったことが推察できる。最終的なコンセプトの決定について、展示構成の責任者である栗憲庭は「本展覧会は実質的には総括性の強い回顧展であった。キュレーターから参加者までみんなが中国芸術最高の殿堂に入るための条件を満たすため、そして自分たちを伝統と化すために、妥協することを惜しまなかった。」（栗[1989]2000: 239）と指摘し、他のキュレーター達が政府の許容範囲を付度していたことを皮肉った。

では、一部キュレーターによる「付度」に対して、栗憲庭は展示を作るプロセスでどのような打開策を講じたのだろうか。

私が思うに、「現代展」とは必ず前衛性を伴うべきものであるし、展覧会そのものも受動的であってはならない。しかし、パフォーマンスや性的な表現が禁じられた今、私は前衛性の実現は不可能だと思いました。しかし、キュレーターや実行委員という役目を引き受

けてしまった以上、その責任を果たさなければならぬので、展覧の意義をもっぱら「社会性」、すなわち展覧会のもつ思想開放的な側面によって社会・観衆を刺激し、既存の文化習慣や審美感を揺さぶるところに見出そうと考えた。(栗憲庭 [1989]2000: 259、下線は引用者による)

上記の引用文からわかるように、栗憲庭^{リー・シェンティン}によれば展覧会の意義を「社会性」へとシフトさせたことは、美術史的な意義の実現よりも、芸術の鑑賞がわからない一般大衆にとっても響くような強烈インパクトを与えて文化習慣や審美感を揺さぶりをかけ注目を集めるという「事件性」と同義的に語られている。

「パフォーマンス芸術において、私は水面下で彼らを許可しました、例えば^{カン・ムー}康木の歩行計画とか^{ジャン・ヤン}張念の孵化とか。^{ワン・ダーレン}王徳仁の避妊具を使ったものに関しては、中国は性について非常に敏感な国であるため、避妊具を芸術言語の核心にするのは容易に誤解を招きかねません。そこで、私は王徳仁に手紙で方針を変えるか、適切な処理をするよう助言しました。私は他の運営委員の誰とも相談しなかったのは、口外しないことでこれを完遂するためです。展覧は運営委員の私的所有物ではなく、あくまで社会の審美感を変えていくことが目的ですから。」(栗憲庭^{リー・シェンティン} [1989]2000: 259、下線は引用者による)

そして、展示をつくる過程で秘密保持を貫くことで、現場に即興性を作り出し、前もって展

覧内容を方向付けようとする「体制」への抵抗を試みたのだ。^{リー・シェンティン}栗憲庭が作った展示空間を見た^{ガオ・ミンルー}高名潞は、以下のように当時の様子を語っている。

目を刺激する色彩、奇怪な造形や形象、抽象的かつ人々の豊富な想像力を掻き立てるような表現主義的作品たちは、芸術家の生命に対する渴望や人類の魂に対する召喚を表わしている。千奇百怪の観念芸術から、生活の中で見たことのあるモノまでもが、一斉に高雅な美術館に押し入ってきた。麻縄、ガラス、箸、塗料、ゴム手袋、風船、避妊具など何でもあった。しかも、洗足（脚を洗う）やエビの叩き売りといった日常的光景を再現したパフォーマンスまでもが、突如として芸術の聖地に現れたのだ。人びとが物質や材料が実際の用途を離れて美術品として鑑賞されることを悟った時、彼らは生き生きとした生命力を感じ、あるいは現実と関連した社会的意義と文化的含意を認知するだろう。(高 [1990]2008: 616)

特に^{シャオ・ルー}肖魯らが行った電話ボックスへの拳銃発砲パフォーマンスは、絵画や彫刻を主とする美術の既成観念に支えられた1985年新潮美術の「回顧」というコンセプトの持つ安定感や保守性を一瞬にして打ち壊し、政府当局や美術関係者のみならず、マスコミを通じて一般大衆に広く衝撃を与えた。これを受けて、^{リー・シェンティン}栗憲庭はこの展覧会を総評するとき、「新潮美術の“臨界点”を一步前進させた」(栗憲庭 [1989]2000: 259)と評価しているのである。そして、この“臨界点”を模索することこそが、現代の精神であり、

中国芸術の特徴であると述べたのである。

ここまでの議論をまとめると、1989年「中国現代芸術大展」という展覧会において美術館上層部が「回顧＝総括」といった方向性の制約を課したのに対し、一部のキュレーターは「前衛性」という方向を密かに打ち出していた。そして展示責任者として栗憲庭は、「前衛性」を半ば独断的に裏のコンセプトとして据え置いた

4.2 「評価を回避すること」の正当性：「開催時期」の不当性をめぐって

本展覧会は1986年から着想し当初は1987年の開催を予定していたが、上層組織の判断が二転三転し最終的な許可の交付は1988年にずれ込んだ。栗憲庭は、「中国現代芸術展（China Avant-Garde Exhibition）」の展示企画委員として招聘されたと知った時のことを以下のように振り返っている。

1987年以降の現代芸術は、85年の様式をすでに乗り越えていて、それでいて、しかし次にやってくる趨勢を決定づけるにはまだ至っていません。したがって、1989年2月に展覧会を組織するのは、あまり適切なタイミングだとは思わないのです。85年を総括するには遅すぎるし、未来の方向性を提示するには時期尚早であるため、委員会のなかでもきつと意見が割れるでしょう。（栗 [1989]2000: 258-9）

上記の発言で栗は「遅すぎる」や「時期尚早である」という言葉を使って展覧会開催のタイミングに言及することで、展示をつくる役目の困難さを示している。そしてタイミングの悪さ

ことで、パフォーマンス・アートや過激でコンセプチュアルな表現を「事件性」と「社会性」の大義名分のもとで展示リストに加えたのだ。結果論になるが、栗氏のリスクを恐れないやり方により、1960年代以降欧米で主流だったポストモダンの表現もいち早く中国の美術界に取り込まれ、1990年代からようやく国際的な同時代性を獲得することになるのである。

に起因する「総括」と「提言」の二重否定は、それらの言葉に通底する「物事に良い／悪いという判断を与えること」への回避につながっていく。

ポスト文革期の「85新潮美術」を網羅的に世界的に紹介したいと考えた高名潞は、「総括 summary and review」という基本方針を掲げて「本展覧が現代的かあるいは前衛的かということとはもはや問題ではなく、重要なのは、大局において穏健と妥協を見出すことであり、一過性の農民運動と化すのではなく、第二回、第三回と続くことで美術史に刻まれるべき」と発言していた（高 1999）。

これに対して、栗憲庭は「前衛性を帯びた現代美術というのはそもそも回顧展に適していない」（栗 [1989]2000: 258-9）と発言した。すなわち、1989年時点ですでに終息しつつある「85新潮美術」を「総括」しようとしても、ムーブメントが起こっていた当時の前衛的で新規的な空気感までは回顧できない、前衛性や新規性が現代美術にとっては不可欠である以上「回顧」には適さないという論理なのである。したがって、美術館と上層部の合意である「総括」とい

うコンセプトとは異なった自身の価値判断を正当化する際に、栗は「遅すぎる」という時期的な不適切さを持ち出したのである。広報を担当した費大為^{フイ・ヂー・ウェイ}も、「壮大で、集合的な民族主義、あるいはヒューマニティズムは1980年代末においては既に意義を失っている」（武 2014: 180）と時期的な不適切さに言及した。

政治の局面が美術館の審査に影響を与え、展覧会の開催時期が大幅に遅れがちな1980年代中国において、「開催時期を問題にすること」は現代美術のあり方を考える上で重要な論点になる。なぜなら、80年代末から流行した多くの実験的な表現様式（パフォーマンス、インス

5. 結論と課題

本稿は、西洋美術の文脈から生まれたキュレーターという職業役割が中国のアート・シーンに導入された最初の出来事に着目し、1980年代の中国美術業界の組織構造とキュレーターを担う人々が、フィールドの内側から様々な制度的、組織的、政治的な制約をラディカルに乗り越えようとする実践を記述してきた。

本節ではこれまでの議論を簡潔に振り返り、そして芸術社会学のグローバルな議論への接合と今後の展望を論じていきたい。

1980年代の中国では、美術館に展示される作品に対して、複雑な審査過程と厳格な審査基準が設けられていた。しかし、新指導者・鄧小平による文革の反省と「改革開放」への方針転換は学生や文化人たちの間に言論の自由を求める機運を高め、雑誌や新聞の創刊を活発化させただけでなく、そこで勤務する編集者や評論

タレーション、ビデオアート）は、現代中国の同時代性の中で生まれた作品であり、その「鮮度」こそが現代アートの本質でもあるのに、美術館や上層部の審査プロセスを経て数年後に作品が公開されても意味がなくなってしまう。したがって「開催時期を問題化すること」は、すなわち、権威的な美術館によって認められた本展覧会そのものが「時代遅れ」な企画であると定義づけることによって、ここへ招待されていない作家たちの中に本当の「現代アート」の担い手がいる、という想像の余白を可能にしているのだ。

家、学者の地位をも上昇させた。その結果、新興美術ジャンルとしての現代美術は美術雑誌や新聞紙という公的組織との結びつきが強まり、雑誌編集者がゲートキーパーとなって1989年に国家美術館への入場権を獲得した。この重要な出来事である1989年「中国現代美術大展」では、雑誌編集者がキュレーターとして活躍し、表向きの「回顧」というコンセプトとは別に、裏で「前衛性／事件性」を指向した展示のデザインが実施された。そして自らの意思決定について、中国社会において権力を持った人間がある特定の評価を下すことそのものの政治的危うさを示唆することで、社会のリアルタイムの文脈に即した判断基準の正当化を試みていたことがわかった。

H. Becker (2008: 165-191) は、アメリカにおける国家による芸術への介入は、その時代の政

権の文化政策と近い一部の市民の利益を積極的に支援をしたり、政権の持続に不利益な特定の集団を抑制するために規制が行われたりすることを論じた。しかし、社会主義政治体制を有する国家の場合、基本前提として表面上は市民と国家は価値観と利害関係において矛盾があるとはならない。したがって、表向きでは合意的態度を取りつつ裏側でオルタナティブを追求しなければならないので、時としてこれはリベラルな国家よりも一層したたかなラディカルさが求められるとも言えるかもしれない。

本稿で扱った「中国現代美術大展」を例にとれば、これは国家政府が1985年をピークにして起こった「85新潮美術運動」という非公式なムーブメントを正統な美術史の新しい1ページとして承認するというある意味慈悲深い儀式でもあった。しかし、包摂の裏に存在する排除を予見した芸術家やキュレーターは、このプロジェクトを批判的に利用することを選んだ。つまり、キュレーターがあらかじめ決定権を持たない「開催時期の決定」という制約を批判する

ことで、政治や芸術の役割といった神学論争を迂回して展覧会のあり方を議論可能にしたのである。栗憲庭による即興の実行は結果的に社会から大きな注目を集めるきっかけとなり、まさに転換期を迎えている中国社会に一石を投じる役割自認がキュレーターという職業行動をよりラディカルなものにさせている。

本稿は、1989年「中国現代美術大展」という局所的な事例を精査するとどまったが、1990年から2000年代にかけて中国のアート・シーンでは民間美術館や外国資本による投資、国際的なアートイベントが増加し、現代美術の活動空間が大幅に広がりキュレーターという職能がより普遍的かつ欧米と類似した職業制度として根付いていった。今後の展望としては2000年代前後の高度経済成長期におけるキュレーター制度の定着過程、及び画廊、オークションといった様々な新規アクターとの関連性などについて定量的データも交えながら議論を深めていきたい。

註

- ⁱ The Contemporary Art Market Report 2016, <https://www.artprice.com/artprice-reports/the-contemporary-art-market-report-2016/market-geography> (最終確認日 2018/01/07)
- ⁱⁱ ヨーロッパとアメリカを中心に発展した現代美術領域の職業による役割分担は、今日の中国美術業界に浸透し、同じような意味合いで使用されている。しかし、ここで強調しておかねばならないのは、本稿で扱う1980年代は共産主義革命終了直後であり、西洋の美術職業制度と中国の職業制度の間に大きな差異があり、特にインディペンデントな批評家や美術館所属のキュレーターは「職業」として存在していたわけではなかった。
- ⁱⁱⁱ 現代のキュレーターのあり方を世界中に広めたハラルド・ゼーマンやハンス・ウルリッヒ・オプリスト、ニコラ・プリオーといった重要人物をはじめ、ヨーロッパやアメリカを中心にキュレーターに関してその思想的背景から専門的实践などについて、美術史や批評分野で多くの研究議論が蓄積されてきた (Smith 2012, オプリスト 2013, 大森 2014, 長谷川 2013)。そして、中国国内にも現代美術に関わった重要な批評家やキュレーターが執筆した文章は多く蓄積されてきた (高 1999, 2008, 栗 2000 など)。キュレーターの職能とは、「博物館や美術館という場所に結びついた職能」(成相 2015: 46)でありながら多種多様な作品や作家を一つのまとまった文脈に再編しプレゼンする個人芸的な側面も併せ持ち、作家、出資者、施設、観客などと関わって現場に介入しながら、メタ的な視点から展示を作り上げることで業界全体にインパクトをもたらすのである。
- ^{iv} 中国文学芸術界連合会の略称。1949年に成立し、全国ならびに各地方、自治区の文学芸術関連組織に従事する人々からなる、

名義上非政治的性質を有する社会団体。その下部組織に「全国美術家協会」が位置しており、主に芸術や文学といった特定の分野で働く人々の権利を保障し、活躍機会の均等を維持する組織とされている。しかし、こうした非政府団体の活動に対して党政府は支援・保護する方針をとっており、ほぼ全ての社会団体—もちろん美術家協会も含まれる—の運営費や職員給料は国家政府からの補助金でまかなわれている。

- v 文化部とは、古典美術や詩歌、彫刻、建築、音楽などに詳しい知識人層によって構成され、国家直屬の美術館や大規模な芸術集団、および地方自治体の文化施設を管轄していた。文化部の呼び声で展覧会が開かれたり、芸術教育の場としての国立美術学院が創設されたり、さらには専門技術を持った芸術家が創作に従事できる場としての「画院」が1957年に作られた。
- vi この時期に登場した、中国現代美術史を牽引した代表的な作家や作品の特徴については本稿の論点ではないため割愛するが、詳細については牧陽一（1998）を参照されたい。
- vii その証拠に、中国で現代美術を所蔵する美術館は1990年代の私立（民間）美術館の登場を待たねばならなかったし、公立の現代美術館は2010年ようやく第一号として上海PSAがオープンしたばかりである。

参考文献

- Baumann, Shyon, 2001, "Intellectualization and Art World Development: Film in the United States", *American Sociological Review*, 66 (3) : 404-426.
- Banks, Patricia Ann, 2011, "Cultural Socialization in Black Middle-Class Families", *Cultural Sociology*, 6 (1) : 61-73.
- Becker, S. Howard, [1982] 2008, *Art Worlds: 25th Anniversary Edition, Updated and Expanded*, 2nd ed., Berkeley: University of California press.
- Beljean, Stefan, Phillipa Chong and Michele Lamont, 2015, "A post-Bourdieuian sociology of valuation and evaluation for the field of cultural production", Laurie Hanquinet and Mike Savage ed., *Routledge International Handbook of the Sociology of Art and Culture*, Oxford: Routledge, 38-48.
- 陳海茵, 2017, 「中国現代アートとアクティビズムにおける「政治」の多義性: ポスト文革期の前衛芸術グループ「星星画会」を事例に」『年報カルチュラル・スタディーズ』創文企画, (5) : 97-118.
- Chong, Phillipa, 2013, "Legitimate Judgment in Art, the Scientific World Reversed? Maintaining Critical Distance in Evaluation", *Social Studies of Science*, 43 (2) : 265-281.
- Davis Deborah S, Richard Kraus, Barry Naughton, and Elizabeth J. Perry eds., 1995, *Urban Spaces in Contemporary China: The Potential for Autonomy and Community in Post-Mao China*. Cambridge University Press.
- DiMaggio, Paul, [1991] 2012, "Constructing an Organizational Field as a Professional Project: U.S. Art Museums, 1920-40", Walter W. Powell and Paul J. DiMaggio ed., *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, Chicago: University of Chicago Press, 267-292.
- 高名潞、唐庆年、范迪安 and 周彦, 1989, 「前卫艺术与文化现实 关于“中国现代艺术展”的谈话」『读书』(5) : 128-134.
- 高名潞, 1991, 『中国当代美術史』, 上海出版社。
- 高名潞, 1999, 「疯狂的一九八九—“中国现代艺术展”始末」『倾向』(1)。
- 高名潞, 2011, 「高名潞就‘89现代艺术大展枪击作品《对话》给肖鲁的回信」, 北京: 博宝资讯网 2018年2月28日取得, <http://news.artxun.com/gaominglu-1595-7971721.shtml>。
- 高名潞編, 2008, 『85美術運動 Vol.1-2』, 広西師範大学出版社。
- 贾方舟, 2013, 「从编辑到策展人」『艺术当代』(3)。
- 費大为, 1999, 「当代艺术的展览和展览策划」『美术观察』, 1999 (5) : 74-77。
- Lamont, Michèle, 2012, "Toward a comparative sociology of valuation and evaluation", *Annual Review of Sociology*, 38 (1) : 201-221.
- 藍庆伟, 2007, 「历史与责任—对中国早期策展人和策展人产生的历史考察」『画刊』(10)。
- 栗憲庭, [1989] 2000, 「我作为中国现代艺术展策展人的自供状」『重要的不是藝術』, 江蘇出版。
- 路林, 1983, 「發刊与停刊—回憶参加『探索』工作的過程」金生編『魏京生与探索』臺北幼獅文化事業公司, 111-120。
- 吕澎, 1992, 『中国现代艺术史: 1979-1989』, 湖南美术出版社。
- Maanen, Hans Van, 2010, *How to study Art Worlds: On the Social Functioning of Aesthetic Values*, Amsterdam: Amsterdam University Press.

牧陽一, 1998, 『アヴァン・ギャルナー中国の現代アート』, 木魂社。

Obrist, Hans-Ulrich and Walter Hopps ed., 2008, *A Brief History of Curating (Documents)*, Zurich: JRP Ringier Kunstverlag
Ag. (= 2013, 村上華子訳『キュレーション「現代アート」をつくったキュレーターたち』, フィルムアート社)。

Ho, Denise Y., 2017, *Curating Revolution: Politics on Display in Mao's Chin, UK: Cambridge University Press.*

大森俊克, 2014, 『コンテンポラリー・ファインアート：同時代としての美術』, 美術出版社。

Pachucki, Mark, Sabrina Pendergrass and Michèle Lamont, 2007, "Boundary processes: Recent Theoretical Developments and New Contributions", *Poetics* (35), 331-351.

Velthuis, Olav, 2003, "Symbolic meanings of prices: Constructing the value of contemporary art in Amsterdam and New York galleries", *Theory and Society*, 32:181-215.

武漢, 2014, 「1989 “中国現代芸術大展” 研究 (節選)」王璜生主編『大学与美術館』, 中国青年出版, 175-191。



陳 海茵 (ちん・かいん)

[出身大学または最終学歴] お茶の水女子大学文教育学部卒業、東京大学大学院学際情報学府修士課程修了

[専攻領域] 文化社会学、カルチュラル・スタディーズ、現代中国研究

[主たる著書・論文]

「中国現代アートとアクティビズムにおける政治の多義性：ポスト文革期の前衛芸術グループ星画会を事例に」

『年報カルチュラル・スタディーズ』Vol.5, 創文企画, 2017年

[所属] 日本学術振興会特別研究員 DC1、東京大学大学院学際情報学府博士課程

[所属学会] 日本社会学会、カルチュラル・スタディーズ学会

The Social Practices of Independent Chinese Curators in the Post-Mao Era

Haiyin Chen*

This paper aims to consider the conventions and constraints among the independent curator's working strategies in post-Mao China, by using the theoretical frame of "Art Worlds" by H. Becker and "distinction" by P. Bourdieu.

In 1980s China, it was necessary to be permitted by a public organization to use exhibition facilities. The examination condition was severe on modern Western art, which made recommendations by editors and the critics vital to held legitimate exhibition. Young critics made an effort to promote new trends in party's official magazines, which enabled them to get influential positions in "Art Worlds" in China where Deng Xiao-Ping's new market policy has just enacted.

The magazine editors and the critics got curatorship during the first exhibition about China's Avant-garde art in 1989, and they also made their unique evaluating strategies in order to create symbolic value against mainstream party-led art world. They set argument focusing on "date" of the exhibition so that they could avoid troubles about political issues. Besides, they recognized the role of the curator in two different types; an employee on site or an academic researcher, which influenced diversification of curatorship after the 1990s.

* Graduate school of Interdisciplinary Information Studies, University of Tokyo

Key Words : Art Worlds, Sociology of Art, Chinese Contemporary Art, Distinction, Curator.

Is My Car Evil? A Review of Non-Anthropocentric Theories of Moral Agency

Tommaso Barbetta*

Introduction

January 22, 2018. It is Monday morning and a huge firetruck is stationing in the middle of the Interstate 405, in California. A car, travelling at 100 km/h, proceeds right toward the truck without slowing down. Nothing obstructs the view of the driver. There is no malfunctioning in the electrical system and the hydraulic brakes are fully operative, ready to be activated. Yet, the driver does not push the brake pedal. The car continues its run, getting closer and closer to the firetruck parked in the centre of the road. The impact seems now inevitable. The vehicle crashes into the back of the red truck. The metallic front of the car folds in on itself. Surprisingly, the driver is safe. This time nobody got injured.¹

More than 1 million people die every year in traffic accidents all over the world (WHO 2015). However, quite curiously, this banal collision caught the attention of some of the most popular newspapers around the globe. Why was this relatively harmless incident taken so

seriously by the press? One of the reasons is that, apparently, the man sitting at the driver seat was not actually driving the car during the accident. But not because he fell asleep at the wheel, nor because he was distracted by a notification from his smartphone. He deliberately chose not to drive. Indeed, someone else was driving the car in his place. But here is the issue: that someone, the entity that was really behind the wheel during the accident, was not a human being. It was the “autopilot”. It was a piece of software.

Nowadays smart technologies substituting us and acting for us are everywhere. We are quickly getting used to delegating everyday tasks to a multitude of artefacts. Artefacts that constantly mediate our experience of reality and help us in the process of making decisions. Yet, from a moral point of view, we do not really know how to consider all these entities.² What can be said about the above-mentioned software that destroyed a car and that could

* University of Tokyo, Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, ITASIA D2

キーワード : Actor-network theory, Information ethics, posthumanism, moral agency, responsibility, morality of technology.

have killed its owner? Is it responsible for the accident? Is the company that designed it responsible? Or should we rather blame the human driver, who was supposed to - but presumably did not - keep his hands on the steering wheel and be vigilant in order to take control of the car before the collision. And what about the algorithm that in 2012 made Knight Capital lose 440 million USD in 45 minutes?³ Can it be blamed for the disruption of the company? Nobody designs trading algorithms with the intention of breaking a company apart or causing a market to crash, but that is nonetheless what they ended up doing in some cases (MacKenzie 2014, 3). On the surface, (quasi-)autonomous technologies appear to behave as if they could make decisions and act on their own. However, the lack of intentions - besides those delegated by humans - behind such Boolean logic, has led consequentialists to cast serious doubts over the significance of recognizing the actions performed by artefacts as morally charged (Peterson and Spahn 2011). Due to their devotion to the idea of *intentionality*, standard ethical theories have been unable to recognize the moral implications of information and communication technologies (ICT) such as the one adopted by the above-mentioned autopilot.

Outside the field of ethics, over the last 30

1 Instrumentalism

years several non-anthropocentric theories of agency have emerged. In particular, actor-network theory (ANT) has provided an effective framework for the assessment of the role played by artefacts, and other kinds of non-human entities, in our society.⁴ However, it is not yet clear if and how a notion of agency detached from intentionality, such as that of ANT, could be translated to ethics. Once it is freed from intentionality, is moral agency a characteristic of a specific category of entities, such as humans, living beings or algorithms, or could it be ascribed to anything? Furthermore, how could the question of responsibility be reframed in order to fit an ontology according to which agency is always distributed among multiple actors?

After a brief overview of the instrumentalist approach to technology embraced by standard anthropocentric moral theories, the present paper investigates these questions by reviewing the literature of ANT (along with its postphenomenological adaptation). Furthermore, in the final sections, the article turns to information ethics (IE), a non-anthropocentric ethical theory influenced by computer science, whose different definition of moral agency might help us to solve some of the difficulties of an ANT-informed ethics.

From the point of view of standard contemporary ethical theories, such as deontology, contractualism and consequentialism, it would be incorrect to consider an artefact as a moral agent. In standard ethics by definition an action is moral only as long as it is initiated by some kind of intentional state of mind, i.e. only if it is the product of a conscious reason (Himma 2009, Koops et al. 2010). Given this definition, there is no way my car could be a moral agent since, due to the limits of our current technologies, a computer cannot possibly have intentional states of mind.

By accepting intentionality as a necessary condition for moral action, standard ethical theories therefore set a clear separation between human entities, which reflect, make decisions and have intentions and free will, on the one hand, and purely neutral artefacts, on the other. To rephrase the (in)famous slogan of the American National Rifle Association: cars don't kill people, people kill people. An artefact – be it a car or a gun - is only a mere instrument, and as such it has always different possible uses. It is ultimately the human user who determines what to do with it (Pitt 2014). Responsibility lies always in a human.

Because of their commitment to the idea of moral responsibility, standard ethical theories are incapable of recognizing many of the pressing moral issues of our information society. First of all, a strong anthropocentric

approach seems to ignore the existence of artefacts that are able to learn from the environment, correct themselves and make decisions that were not intended either by their producers, or by their users. Take the case of the autopilot mentioned in the introduction, which relies on a computer vision system: this system was built on an artificial neural network where code is not entered line by line by human programmers and whose output is often obscure to the original creators themselves. It would be inaccurate to hold a human programmer responsible for the individual choices made by such kinds of software (Matthias 2004).

Moreover, standard ethical theories seem to downplay the role of technologies in mediating the state of mind of individual humans. The increasing adoption of neuromarketing strategies attests the widespread awareness among commercial corporations of the influence that ad-hoc physiological stimuli might have on the behaviour of consumers. For example, the layout and atmospherics of most casinos are designed to make customers move following specific patterns and keep them playing as long as possible (Schüll 2012). This kind of artificial environment is by no means neutral. Rather, it actively manipulates the perceptions of its users. What we call addiction is not the unidirectional product of the harmful decisions made by an (genetically) impaired brain. It is a relational phenomenon involving a human and

an environment often - but not necessarily - designed to make use of his limitations.

The following sections investigate advantages

2 Actor-network theory

Developed in the early 1980s in the field of sociology of scientific knowledge, ANT is a heterogeneous set of linguistic categories that initially emerged to trace the active role of non-human entities in the analysis of scientific practices (Latour 1983). The common ground, shared by the social scientists adopting this analytical framework, is a non-anthropocentric view of reality based on the concept of network. According to Bruno Latour, the author who more than anyone else has unfolded the philosophical consequences of ANT, the

2.1 Principle of symmetry

ANT is based on the idea that there is an ontological symmetry between humans and non-human entities. This is sometimes referred to as the “principle of generalized symmetry” (Callon 1986). Human beings, biological organisms, material objects and abstract entities are all part of the same reality. Given this principle, a common terminology, one which is not biased by the previously mentioned human vs. non-human dichotomy, is needed by social scientists. “Actor” (or “actant”) is the term used to express the minimum unit of our reality. An actor is literally anything that

and disadvantages of the adoption of a notion of agency influenced by ANT, focusing on the moral issues raised by the crash.

best way to take into consideration how a heterogeneous set of non-human entities, from microbes to airbags, participates in our collective life is to adopt a “network-like ontology” (Latour 1996, 370).

The next sections investigate the ethical implications of this ontological stance. Following a review of the key concepts of symmetry and mediation, the article discusses how the notions of “prescription” and “distributed agency” might inform a moral analysis of non-human entities.

acts, any node that contributes to a network. An actor is defined by its action, and since “there is no other way to define an action but by asking what other actors are modified, transformed, perturbed or created” (Latour 1999, 122), it follows that an actor is necessarily defined by its relations with other actors within a network.

According to John Law (1992), from an analytical standpoint this symmetrical approach leads us to a radical rejection of any difference in kind between humans and objects. Humans are not at the centre of the universe anymore.

They are equal to any other entity. However, it would be a mistake to read ANT's analytical norms as moral norms. Indeed, justifying a moral symmetry on the basis of an ontological symmetry would be logically flawed: the fact that reality is in a certain way does not imply that we ought to act accordingly - something which was pointed out already by Hume (1896). "We need, I think, to distinguish between ethics and sociology. The one may - indeed should - inform the other, but they are not identical. To say that there is no fundamental difference between people and objects is an analytical stance, not an ethical position. And to say this does not mean that we have to treat the people in our lives as machines." (Law 1992, 383). Law is - rightly - afraid of the consequences of a misinterpretation of the principle of symmetry. Yet, he leaves the door open for a possible contribution of ANT to ethics.

In an article titled "Morality and Technology", Latour (2002) takes on this task and attempts to elaborate an ANT-informed

2.2 Mediations

In ANT the way actors interact with each other is referred to as mediation. Two actors, two nodes of a network, always interact with each other by the means of a third actor (Latour 1996, 378). Given an actor A and an actor B, their interaction necessarily occurs through the mediation of an actor C. This third actor C is a "mediator" (Latour 1996, 373). In

view on ethics. In the article, Latour openly criticizes standard ethical approaches that divide technology and morality into two separated realms, that of means, on the one hand, and that of ends, on the other. Artefacts cannot be reduced to mere means, since they lay the conditions for our actions, and thus mediate our behaviour. According to Latour, what we call "human" cannot exist independently from the technological mediations it is intertwined with (Latour 2002, 252). "Generalizing the notion of affordance, we could say that the quasi-subjects which we all are, become such thanks to the quasi-objects which populate our universe" (Latour 2002, 252-253). We, as quasi-subjects, are free either to accept or reject the programmes of action - the affordances - embodied by the artefacts surrounding us, but nonetheless our behaviour is necessarily mediated by them. A moral approach informed by the relational ontology of ANT, is therefore one that focuses on technical mediations.

the case of non-autonomous cars, for example, human drivers control the wheels using the steering wheel. At this level of abstraction, the steering wheel is a mediator. However, the steering wheel is merely an interface and there is a series of other mediators between it and the wheels: e.g. a steering column, several sensors, an electronic control unit and a motor,

all translate the mechanical torque of the steering wheel operated by the driver into the actual steering. Moreover, it has to be remarked that this is not a one-dimensional chain, but a heterogeneous network. By assuming different levels of abstraction, we would recognize that different kinds of entities mediate the way we control a car: roads and traffic signals obviously play a part, but also the voice of a car navigation system telling us what to do, as well as the interiorized gaze of the authority that keeps us from breaking traffic rules. Modifying any of these actors might produce a different driving experience and different subjectivities.

The autopilot illustrates how the introduction of a new mediator might change the way humans perceive the environment and act. The control of the car is delegated to software, which dissociates the body of the human driver from the movement of the vehicle. The car keeps driving on its own. However, the self-driving systems currently available have not

2.3 Prescription

Initially employed by Madeleine Akrich (1992), the notion of prescription conceptualizes one of the key insights of ANT: i.e. the idea that humans are able to inscribe programs of action into things and act at distance. In the process of creation of an artefact, designers envision the way the artefact is assumed to interact with us and inscribe such vision in it.

yet reached full autonomy and from time to time require the human driver to take control of the vehicle. The human driver is now supposed to assume the role of “drive monitor”, ready to take control of the car whenever the software is perceived to be doing something wrong. Given this new role, it seems that in our example both the human and the software made a mistake. The human was wrong since he did not correct the autopilot. Yet, it has been demonstrated that the high level of automation of current software lets humans disengage from the driving task, to such an extent that they become potentially less attentive and therefore unable to take control when necessary (Banks et al 2018). Until recently, driving has been a bodily experience: drivers received a feedback at every movement, and contextual cues activated habitual responses. The autopilot does not just change the car; it also changes the human driver as a subject. The way we look and feel the road is different.

“Like a film script, technical objects define a framework of action together with the actors and the space in which they are supposed to act” (Akrich 1992, 208).⁵ Software is the most obvious example of prescription - it literally is a collection of scripts encoded by a programmer -, but the concept can be extended to any kind artefact even outside the realm of ICT. Latour

gives the example of the speed bump (Latour 1999, 185), a very simple technology used to make drivers slow down. In this case the script is materially built into the road.

The notion of prescription has several ethical implications. Scripts might be implemented to produce “moral delegations” (Latour 1999, 217). Designers can inscribe moral instructions into technologies, in order to make users behave accordingly. This commonly occurs through patterns of punishment and rewards. The acoustic signals and visual messages produced by a car, telling the driver to fasten his seatbelt - or, in more recent cars, to hold the steering wheel while a self-driving system is enabled -, are examples of moral delegation.

Building on this notion, the postphenomenologist Peter Paul Verbeek stresses the necessity for a proactive approach to technology. Given “that technologies inevitably play a mediating role in the actions of users” , what we need to do is to moralize our technological environment (Verbeek 2006, 377). But who is supposed to moralize our technologies? According to Verbeek, the script approach “reveals a specific responsibility of the designer, who can be seen as the inscriber of scripts” (Verbeek 2006, 362). It is thus the duty of designers to anticipate technological mediations and moralize technology in accordance.

Design becomes a political matter and has fundamental moral implications. However, we

should not forget that designers do not act autonomously. They are part of larger networks. Designers typically operate inside organizations and follow decisions taken elsewhere - e.g. the product planning department. Moreover, the notion of “good” is context-dependent and might diverge fundamentally depending on the aims of the organization in which designers operate. From the point of view of a car maker, the best autopilot is not necessarily the safest one. Indeed, at the current technological stage, the safest autopilot would probably be one that needs the human driver to never release the steering wheel and be constantly attentive. However, this would undermine the convenience of the system itself, making it less appealing to consumers, something which the CEO of the company that manufactured the car mentioned in the introduction clearly recognizes: “This is crux of matter: can’t make system too annoying or people won’t use it” .⁶ A few months after the accident the same company released a software update that strongly increased the frequency of the “hold the steering wheel” alert signals whenever a driver is not touching the steering wheel.⁷ As far as we know, a different prescription might have made the driver take control of the car in time, thus avoiding the accident. Yet, blaming the designers for letting the driver get too complacent would be inaccurate, since it neglects the larger network that determined

such design in the first place and erases the

2.4 Distributed agency

While the concept of mediation is used to deconstruct the interaction between two actors, the idea of distributed agency (Callon and Muniesa 2005) allows us to analyse an event, such as the incident described in the introduction, as a network composed by a sum of microtransactions.⁸ The concept in itself does not define a special kind of agency: in principle, any action can be seen as distributed across a network.

Jane Bennet's analysis of the North American blackout that occurred in 2003 is a clear example of how this concept can be applied (Bennet 2005). According to Bennet, the blackout that affected 45 million people cannot be reduced to one individual cause and no singular entity can be held responsible for it. Human omissions, the growing demand for electricity by a collective of consumers, legal deregulations, economic transactions, the movement of electrons, etc. - the effects of all these actions put together have collectively contributed to the blackout. Once they intersect, a broad set of small - apparently negligible - actions performed by different kinds of entities, might generate huge consequences.

While the analytical advantages of the notion of distributed agency are fairly clear, the moral implications are more complicated. The idea of responsibility is at stake here. In the case of

agency of the human behind the wheel.

the crash, claiming that it is the assemblage composed by the driver plus the sensors plus the software plus the engineers plus the stationary firetruck and so on, that is responsible for the collision of the car ends up emptying the notion of responsibility of its meaning, transforming it into a useless category. It seems that ultimately nobody should be recognized as responsible: neither the manufacturing company, nor the engineers that developed the software, nor the owner of the car, nor the law, nor the software itself. Bennet goes as far as to claim that the idea of "strong responsibility" is empirically false (Bennet 2005, 463). However, even this assumption does not necessarily imply an incompatibility between the concept of distributed agency and moral analysis. "A distributive notion of agency does interfere with the project of blaming, but it does not thereby abandon the project of identifying (what Arendt called) the sources of harmful effects" (Bennet 2005, 463). Bennet is quietly suggesting that moral analysis does not necessarily coincide with responsibility-assignment. An idea that - as we will see - is also at the centre of Floridi's work on information ethics.

2.5 Ethical issues of ANT

As Verbeek has stressed in his work, the idea that technological mediations shape our perception of reality and frame our behaviours is a major contribution of ANT to the field of ethics (Verbeek 2005, 2006). According to Verbeek, this insight encourages a proactive approach to ethics: given that purely autonomous humans do not exist and that our moral decisions are necessarily mediated by technologies, the new task of ethics is that of moralizing our material environments. But what moral orientation should designers follow in this quest for moralizing technologies? What actors should they consider as the moral patients of their work? Humans, biological organisms, organizations? ANT cannot tell us what is good and what is wrong, or how we are supposed to act in specific situations. This is because ANT does not assess which entities should be considered as moral patients - i.e. the objects of moral action. This is not necessarily a limit, since ANT does not aim at producing a normative theory of ethics. Rather, it is supposed to provide an agnostic tool-kit for ethical analysis, which, in principle, could be adopted by different ethical theories. According to ANT's flat ontology, any theory of ethical

patientness would in fact be equally contingent.

The limit of ANT is not so much the lack of a definition of moral patients, but rather the lack of a clear definition of the category of moral agents. An army of drones and a tsunami are both actors that could kill people, but are they both also moral agents? Following Verbeek's phenomenology, it could be argued that ultimately the discriminant between these two forms of agency is human intentionality. From this point of view, things behave morally whenever they are human products: drones are moral agents, while a tsunami is not. Such a definition, however, seems to contradict the principle of symmetry by assuming an a priori distinction between human and non-human actors. Due to this contradiction, this definition partially falls back into a weak form of anthropocentrism and does not offer a persuasive explanation for the behaviour of artefacts that do not follow the script of their creators.

In order to avoid the ghosts of anthropocentrism a different definition of moral agency is needed. The next sections explore how IE has tackled this same issue and has produced a coherent definition of moral agency.

3 Information Ethics

Information ethics (IE) has its origins in the late 1990s, when Luciano Floridi proposed it as

the theoretical counterpart of computer ethics - a subject that at that time was largely

neglected by moral philosophers (Floridi 1999). IE has emerged within the broader field of philosophy of information. Developed in the context of the expansion of ICT, philosophy of information has two fundamental aims according to Floridi: clarifying the nature of what we call information, on the one hand, and investigating the possible philosophical applications of frameworks and methodologies developed in the field of computer science, on the other (Floridi 2011a, 14).

Like ANT, IE is also informed by a non-anthropocentric understanding of reality. However, their ontologies are based on entirely different assumptions. ANT is a relational ontology. Being necessarily means "being in relation" to something. IE, instead, is based on an informational ontology, and claims that

3.1 Moral agents

Adopting the method of levels of abstraction (LoA)¹⁰, IE draws a distinction between the category of "moral patients" and that of "moral agents". As already mentioned, IE considers every informational entity populating the infosphere as a moral patient. However, it specifies that not every informational entity is necessarily also a moral agent. Moral agents are a subclass of the larger category of moral patients. In contrast to ANT, IE clearly defines what kind of actions and what kind of entities can be morally qualifiable. According to Floridi and Sanders (2004), to qualify as a moral agent,

information is the lowest common denominator shared by any entity (Floridi 2010, 94). This ontological assumption leads Floridi to define IE as an extension of ecological ethics: "all entities, qua informational objects, have an intrinsic moral value" and therefore have to be taken into account as moral patients (Floridi 2010, 89).⁹ Thus, in contrast to ANT, IE provides a clear definition of the category of "moral patients". Adopting the concept of *infosphere* - the informational adaptation of the idea of the biosphere - Floridi goes as far as to claim that, since every informational entity is a moral patient, the general moral principle according to which any action should be oriented to is that of avoiding entropy - i.e. loss of information.

an entity must be:

1. Interactive: it has an input and an output, through which it interacts with the environment.
2. Autonomous: it has relative control over its internal condition, so that it can perform an action without the direct command of other actors.
3. Adaptable: it can learn - i.e. it can change the internal rules that determine its actions, in response to interactions with the environment.

Before examining the implications of these

criteria, it is necessary to clarify that the definition of autonomy presented here does not coincide with that repudiated by ANT. Floridi's definition of autonomy does not imply the possibility of pure autonomous decisions, nor does it imply the existence of some kind of transcendental subjectivity or free will. It is a quasi-autonomy: a partial control that a system can exert on its internal state. Moreover, depending on the LoA that we choose, a (quasi-) autonomous system can be decomposed into a network. For example, "depending on the LoA adopted, the autopilot can be considered as a single actor that performs the operation of flying an airplane or as a set of interacting actors that execute the subtasks of that operation" (Turilli 2011, 377).

Let us now examine the implications of such a definition of moral agency. First of all, in IE moral agency is not limited to individual humans, but can be attributed to biological organisms, to organizations, and to IT-artefacts, provided that they follow the three criteria just mentioned. However, actions of entities that do not meet these criteria, such as a tsunami or a speed bump, cannot be accounted as moral. Can an autopilot software be considered a moral agent from this perspective? It depends. If it is capable of making decisions and learning from the environment - e.g. using reinforcement learning -, yes. However, what if the car is not able to autonomously change its internal rules, but collects data that is then used to train the

software through supervised-learning? Even though the car would ultimately be able to change its internal rules by downloading and updating the software, and even though the code would be written mostly by machines rather than human programmers, in this case the individual vehicle would not be considered a moral agent. However, we can adopt a higher LoA, and look at the car as part of a larger system that includes the neural networks adopted, as well as the engineers that tweak the software, monitor its learning process and release updates. At this LoA, the car could be considered as part of a larger moral agent.

A second implication is that intentionality is not accounted as a necessary condition of moral agency. This leads us back to Bennet's comment concerning "strong responsibility" (see 2.4). Bennet claimed that, if agency is distributed across a network, it is not possible to appoint individual actors as morally responsible for an event. A notion of moral agency without intentionality encounters the same obstacle. An autopilot might be able to take autonomous decisions, but can it be blamed for its mistakes? Even if that was the case, due to the lack of self-consciousness, attributing legal personhood to IT-artefacts and punishing them in case of wrongdoing seems completely meaningless - if not impossible (Koops et al. 2010). This dilemma makes us face what Matthias has called the "responsibility gap" (Matthias 2004), a condition of increasing

distance between human creators/users and IT-artefacts, where nobody is liable for the wrongdoing of a machine.

Floridi is able to solve this apparent deadlock by drawing a distinction “between *moral responsibility*, which requires intentions, consciousness and other mental attitudes, and *moral accountability*” (Floridi 2011a, 88). A distinction, which, according to the author, finally frees normative ethical theory from the shadow of anthropocentrism and, most importantly, from the “regress of looking for the responsible individual when something evil happens” (Floridi 2011a, 88). However, while

Conclusion

Focusing on the example of a self-driving car, this article has reviewed the possible advantages, as well as the limits, of an ANT-informed theory of ethics, and has briefly illustrated the alternative definition of moral agency provided by IE. Despite their different ontological foundations, ANT and IE have encountered similar challenges in the development of a non-anthropocentric moral approach and have often reached comparable conclusions in tackling some of these issues.

ANT lets us recognize artefacts as moral agents and gives us the tools to deconstruct any event into a network. It allows us to investigate how artefacts concretely mediate our ethical decisions - e.g. in terms of

arguing that responsibility-oriented ethics has been unable to acknowledge the role of artificial agents, Floridi does not dismiss the concept of responsibility in toto. In IE humans have responsibilities towards the whole infosphere. They bear “ecopoietic responsibilities” (Floridi 2011a, 91) - i.e. they are responsible for the creation and the well-being of the environment. Similarly to what is suggested by ANT, humans have a peculiar position in the moral outlook of IE: they are not the only moral agents in this world, but they are nonetheless special due to their ability to create artefacts.

prescriptions. However, it also runs the risk of falling into a bottomless relativism according to which nothing/nobody can ever be blamed. IE seems to avoid this relativist deadlock by providing a narrower definition of moral agency, which focuses exclusively on autonomous entities capable of learning from the environment and changing their internal rules. Ultimately, both ANT and IE attempt to shift the focus of ethical analysis from *moral responsibility* to *moral accountability*. The two theories would argue that, while a self-driving car cannot be responsible for an accident, it could, nonetheless, be a source of harmful effects: i.e. it could be seen as morally accountable. However, both ANT and IE have

not been clear enough in distinguishing and defining these two concepts. How does “weak” responsibility differ from moral accountability, and do these two concepts imply the existence

of two different kinds of moral agency - e.g. human vs. non-human moral agency? These are issues that need further investigation.

- ¹ Peter Valdes-Dapena, 2018, “Tesla in Autopilot mode crashes into fire truck.” *CNN*, <http://money.cnn.com/2018/01/23/technology/tesla-fire-truck-crash/index.html>, accessed 01/09/2018.
- ² In this text the terms morality and ethics are used interchangeably.
- ³ Matthew Philipps, 2012, “Knight Shows How to Lose \$440 Million in 30 Minutes” , *Bloomberg*. <https://www.bloomberg.com/news/articles/2012-08-02/knight-shows-how-to-lose-440-million-in-30-minutes>, accessed 01/09/2018.
- ⁴ The focus on ANT and Information Ethics (IE) is motivated by their explicit reference to non-human moral agency. Due to the lack of space this paper does not consider the moral implications of other posthumanist approaches.
- ⁵ It should be stressed that in contrast to technological determinism, scripts can be more or less flexible. Users of technologies might resist against scripts by rejecting or by hacking them (Oudshoorn et al. 2002).
- ⁶ Elon Musk, 2018, *Twitter*. <https://twitter.com/elonmusk/status/1005879049493725186>, accessed 01/09/2018.
- ⁷ Fred Lambert, 2018, *Electrek*, <https://electrek.co/2018/06/11/tesla-autopilot-update-nag-hands-wheel/>, accessed 01/09/2018.
- ⁸ A similar idea can be found in the work of several authors influenced by ANT. Latour (1999) uses the term “composition” , while Bennet (2005) talks about “agency of assemblages” and “distributive agency” .
- ⁹ According to Doyle (2010), it is unclear why informational entities would have an intrinsic moral value.
- ¹⁰ For a detailed explanation of the method of levels of abstraction see Floridi (2011b).

Bibliography

- Akrich, Madeleine. "The de-scription of technical objects." In *Shaping Technology/Building Society: Studies in Sociotechnical Change*, edited by Bijker and Law, 205-224. 1992.
- Banks, Victoria, and A. Eriksson, J. O'donoghue, N. Stanton. "Is partially automated driving a bad idea? Observations from an on-road study." *Applied ergonomics* 68 (2018): 138-145.
- Bennet, Jane. "The Agency of Assemblages and the North American Blackout." *Public Culture* 17, no. 3 (2005): 445-65
- Callon, Michel. "Some elements of a sociology of translation." *Power, action and belief: a new sociology of knowledge?* London, Routledge, 196-223, 1986.
- Callon, Michel, and Fabian Muniesa. "Peripheral Vision." *Organization Studies* 26, no. 8 (2005): 1229-1250.
- Doyle, Tony. "A Critique of Information Ethics." *Knowledge, Technology & Policy* 23, no. 1-2 (2010): 163-75.
- Floridi, Luciano. "Information ethics: On the philosophical foundation of computer ethics." *Ethics and information technology* 1, no. 1 (1999): 33-52.
- Floridi, Luciano, and J.w. Sanders. "On the Morality of Artificial Agents." *Minds and Machines* 14, no. 3 (2004): 349-79.
- Floridi, Luciano, ed. *The Cambridge handbook of information and computer ethics*. Cambridge University Press, 2010.
- Floridi, Luciano. *The philosophy of information*. Oxford University Press, 2011a.
- Floridi, Luciano. "The method of levels of abstraction." *The Philosophy of Information*, 2011b.
- Floridi, Luciano. "Distributed morality in an information society." *Science and engineering ethics* 19, no. 3 (2013): 727-743.
- Himma, Kenneth Einar. "Artificial agency, consciousness, and the criteria for moral agency: What properties must an artificial agent have to be a moral agent?" *Ethics and Information Technology* 11, no. 1 (2009): 19-29.
- Hume, David. *A Treatise of Human Nature*. Oxford: Clarendon Press, 1896.
- Koops, Bert-Jaap, Mireille Hildebrandt, and David-Olivier Jaquet-Chiffelle. "Bridging the accountability gap: Rights for new entities in the information society." *Minn. J.L. Sci. & Tech.* 11 (2010): 497.

- Latour, Bruno. "Give me a laboratory and I will raise the world." *Science observed* (1983): 141-170.
- Latour, Bruno. "Where Are the Missing Masses? The Sociology of a Few Mundane Artefacts" (1992).
- Latour, Bruno. "On actor-network theory: A few clarifications." *Soziale welt* (1996): 369-381.
- Latour, Bruno. *Pandora's hope: essays on the reality of science studies*. Harvard university press, 1999.
- Latour, Bruno. "Morality and technology." *Theory, culture & society* 19, (2002): 247-260.
- Law, John. "Notes on the theory of the actor-network: Ordering, strategy, and heterogeneity." *Systems practice* 5, no. 4 (1992): 379-393.
- MacKenzie, Donald. "A sociology of algorithms: High-frequency trading and the shaping of markets." *Unpublished paper* (2014).
- Matthias, Andreas. "The responsibility gap: Ascribing responsibility for the actions of learning automata." *Ethics and information technology* 6, no. 3 (2004): 175-183.
- Oudshoorn, Nelly, Ann Rudinow Saetnan, and Merete Lie. "On gender and things: Reflections on an exhibition on gendered artifacts." In *Women's Studies International Forum*, vol. 25, no. 4, pp. 471-483. Pergamon, 2002.
- Peterson, Martin, and Andreas Spahn. "Can technological artefacts be moral agents?" *Science and Engineering Ethics* 17, no. 3 (2011): 411-424.
- Pitt, Joseph C. "Guns Don't Kill, People Kill" ; Values in and/or Around Technologies." In *The moral status of technical artefacts*, pp. 89-101. Springer, Dordrecht, 2014.
- Schüll, Natasha Dow. *Addiction by design: Machine gambling in Las Vegas*. Princeton University Press, 2012.
- Turilli, Matteo. "Ethical Protocols Design" , in *Machine ethics*. Edited by Anderson, Michael, and Susan Leigh Anderson, 375-397, Cambridge University Press, 2011.
- Verbeek, Peter-Paul. *What things do: Philosophical reflections on technology, agency, and design*. Penn State Press, 2005.
- Verbeek, Peter-Paul. "Moralizing Technology: on the morality of technical artifacts and their design." In *paper for workshop, Utrecht University (24 pp)*, 2006.
- World Health Organization. "Global status report on road safety 2015" .



Tommaso Barbetta (とまぞ・ばるべつた)

[生年月] 1990年5月

[出身大学または最終学歴] ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学 アジア・北アフリカ研究家修士課程修了

[専攻領域] STS, プラットフォーム・スターディーズ

[所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程

Is My Car Evil? A Review of Non-Anthropocentric Theories of Moral Agency

Tommaso Barbetta*

Smart-technologies substituting us and acting for us have become increasingly ubiquitous over the last decade. We are quickly getting used to delegating everyday tasks to a multitude of artefacts. Artefacts that constantly mediate our experience of reality and help us in the process of making decisions. However, from a moral point of view, we do not yet know how to consider all these entities.

In the social sciences, Actor-network Theory (ANT) has provided a consistent framework for the analysis of non-human agency. This has been theoretically possible thanks to the detachment of the notion of agency from that of human intentionality. However, it is not clear if and how a notion of agency detached from intentionality could also be embraced by the field of ethics. What is the usefulness of ascribing moral agency to non-human entities? Would such a new notion of moral agency be a characteristic of one specific category of entities, or could it be ascribed to anything? Furthermore, how could the question of responsibility be reframed in order to fit a non-anthropocentric ethical approach?

The paper focuses on the crash of a self-driving car, an example which is used to review advantages and limits of an ethical framework informed by ANT. Moreover, the article illustrates the alternative non-anthropocentric approach of Information Ethics (IE), highlighting the potentials of its narrower definition of moral agency. Ultimately, the paper shows that, despite their different ontological foundations, ANT and IE reach comparable conclusions in the moral analysis of the car crash: both these theories leave in fact the door open for the assessment of the moral agency of a self-driving system. This is possible due to a conceptual shift from the idea of *moral responsibility* to that of *moral accountability*, terms which, however, still lack a fully consistent definition.

* University of Tokyo, Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, ITASIA D2

Key Words : Actor-network theory, Information ethics, posthumanism, moral agency, responsibility, morality of technology.



フィールド・レビュー

FIELD REVIEWS

即興的モノづくりのための インタラクティブなファブリケーション技術

寛 康明

1. オンサイトでオンデマンドな即興的モノづくり

デジタルファブリケーションと呼ばれる、モノづくりの新しい道具や環境およびコミュニティの創世が注目されて久しい^[1]。3Dプリンタやレーザーカッターなど工作機械を介してデジタルデータを実体化し、逆に実体の形状等をデジタルデータとしてコンピュータに取り込むなど、デジタルとフィジカルの環境を行き来するのがデジタルファブリケーションの醍醐味である。

この中で、これからのモノづくりは大量生産大量消費のモデルから、ニーズを多様に反映する多品種少量生産へと向かうと言われる^[1]。そこでは、事前に大量に製造されたものから気に入ったものを選び手に入れるという従来の流通形態から、個々の状況やニーズに基づいて必要なものを必要なだけ（オンデマンドで）作るという方向へとシフトする。さらに、その状況

やニーズ自体が刻々と変化することを踏まえると、今・その場で作るという、より即興的なオンサイトファブリケーションの重要性が高まると考える。HCI（Human Computer Interaction）の領域では、従来のデジタルファブリケーション装置に加えて、現場の空間や既存のオブジェクトに合わせてモノを作るためのツールや持ち運べる工作装置など^{[2][3][4]}が提案されている。建築分野でも、吉村がポストファブリケーションという言葉で、プレファブリケーションとの対比の中でオンサイトでのモノづくりの重要性を説いている^[5]。

これらの背景の上で、本稿では、状況やニーズに合わせてその場でものを作るというオンサイトでオンデマンドなモノづくりを「即興的モノづくり」と呼び、これを推し進めるためのファブリケーション技術のあり方を考える。

2. 即興的モノづくりを可能にするための技術

2.1 造形プロセスの時間短縮

現場で即興的にモノをつくるという中で、まず造形プロセスにかかる時間短縮は欠かせない。例えばデジタルファブリケーションの代表

的工作機械である3Dプリンタは、一般的なものであれば手のひらサイズの物体を出力するのに未だ数～十数時間の時間を要する。これを短

縮できれば現場の限られた時間の中で試行錯誤の回数を増やすことが可能になる。

HCI 分野における先駆的な取り組みとして、Mueller らは Low-Fi Fab と称して、この問題に取り組んでいる。これは文字どおり粗く作る部分と丁寧に作る部分を切り分けながらプロトタイプする手法である。具体的には、手作業によるブロックで構成されるパーツと 3D プリンタで出力されるパーツを組み合わせる^[6]、3D プリントにおいてワイヤフレームのみで出力する部分ときちんと面や中身まで出力する部分を切り分ける^[7]などの手法が代表的である。

上記の取り組みは既存の 3D プリンタの出力時間を短縮するための工夫である。もちろん 3D プリンタ自体の機材としての性能改良の試みも続いており、数十分というオーダーで高速に物体が出力できるものも出てきている。その上で、筆者らのグループでは、既存の 3D プリンティングの方法にとらわれず、ディスプレイ

に映像を表示するように、物体を瞬時に出力できるようにする未来を見据え、新たなモノづくり手法やモノとの関わり方を思索したいと考えている。そして、それをプロトタイプするために我々のグループでは独自のアプローチで造形時間の短いファブリケーション手段の提案を行ってきた。

その中の例としてまず、山岡と開発した ProtoMold^[8](図 1) は、バキュームフォーム(真空成型)という造形手法に注目し、コンピュータ的に形状制御されるピンアレイを型(モールド)として用いる。従来の真空成型は型自体を造形するのに 3D プリントと同様の時間がかかるため、多様な形状を試作するという用途にはあまり適していない。しかし、本システムでは動的なピンアレイと組み合わせることで形状を即座に変更し、かつ真空成型の特徴を活かし数秒でプラスチック板に 2.5 次元の形状を刻むことができる。



図 1. ProtoMold

鈴木らを中心に研究を進める立体造形装置 Dynablock^[9] は、物理的で離散的な多数のボクセルを用いて、それらの結合・非結合を制御することで大きなオブジェクトを構成するという手法を用いる(図 2)。同様のアプローチを

取る先行研究も存在するが^([10] [11] など)、本システムはブロック自体に機械的・電氣的な仕掛けが要らない点、装置がスケラブルに構成できる点、造形が数十秒程度から可能であるという点が特徴として挙げられる。ブロック同士は各

面に取り付けられた磁石を利用して接合し、ステージ内部に多数配されたピンにより個々のブロックを押し出し、組み立てていく。さらに、

一度組み立てたオブジェクトを再度切り離してステージ内部のブロック群へと戻すこともできる。詳細については文献^[9]を参照されたい。

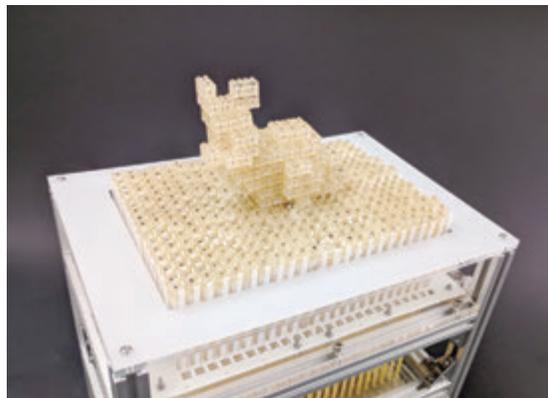


図 2. Dynablock

2.2 インタラクティブ設計と素材循環

上で紹介した装置は、ピンアレイの解像度やブロックの数などその精細さという点では未だ改良の余地を残しているが、数秒～数十秒程度の時間で実際に立体的なモノが出来上がるという体験は新鮮であり、これらの装置の応用の可能性は広いと考えている。一方で、即興的なモノづくりを展開するには、造形のみならず設計や材料の手配などにかかる手間や時間も減らし、またオンサイトならではの空間性や身体性、素材、時にはユーザーの手作業などもうまく設計の過程で活かすような工夫が必要になる。

設計に関しては、既存のCADの多くはGUIベースで、設計は画面の中、造形は機械の中というように空間的にも時間的にも工程が分かれることが多い。これに対し、WillisらのInteractive Fabrication^[12]は工作機械と直接的にインタラクションし、設計と造形のプロセス

を重ねる手段を提案し、HCI分野に多くのインスピレーションを与えた。上述した筆者らの研究でも直接的なインタラクションを考慮に入れた設計をしており、例えばProtoMoldでは既存のオブジェクトやジェスチャなどを用いた身体的・物理的なインタラクションを通じた設計が可能である。特に、今後造形装置のさらなる高速化が進むことで、ユーザと機械のみならず、ユーザと素材とのリアルタイムで直接的なインタラクションの設計も興味深い研究対象となる。

また、即興的なモノづくりにおいて高速なプロトタイピングを展開するにあたり、材料の廃棄を減らし、再利用を可能にする素材循環の設計も重要な課題である。Dynablockではブロックという分解回収可能な機構を採り、ProtoMoldでは材料自体の熱可塑性を用いて一度成型した

プロダクトを平らなシートの状態に戻すことができる。これらによってプロダクトとマテリアルの間は可逆的になり、必要な時に必要な形を

作り、その後また戻すというサイクルが促進される。

3. まとめと今後の展望

本稿では、デジタルファブリケーションの隆盛と共にその場で即興的に作るモノづくりの必要性の高まりを論じ、それを支える、高速な造形、直接的インタラクション、そして素材循環性を持つファブリケーション技術について筆者の研究室のプロジェクトを例に議論した。

この数年新たに注目を集めるのが、プログラマブルマター (Programmable Matter)、あるいはアクティブマター (Active Matter) と呼ばれる領域である。これらは、形態や機能をプログラム可能な方法で意図的に変えることができる物質、およびそれに関連する科学・工学・デザインを中心とした研究領域である^[13]。本稿でテーマにした、即興的なモノづくりも、突

き詰めていけば新しい素材としてのプログラマブルマターの実現形態・応用領域の一つだと位置付けられる。今回は形状の即興的な変更についての議論が主であったが、筆者らのグループでは他にも、動的に色や硬さ、形を変化させる素材の研究を進めている。機械・ソフトウェア・材料・デザインなどそれぞれのアプローチでの検討を学際的にうまく取り込みながら研究を進めることで、モノの多様な要素を動的に変化させ、さらには新しい作り方・使い方・表現を含めたモノの価値やそれにまつわる新たな体験価値を開拓する取り組みへとつなげていきたいと考えている。

謝辞

本稿で紹介した筆者の関わる研究プロジェクトは JST ERATO 川原万有情報網プロジェクトの支援を受けたものである。山岡潤一氏、鈴木遼氏などをはじめ、共同研究者に感謝する。

参考文献

- [1] Neil Gershenfeld. 2007. Fab : The Coming Revolution on Your Desktop--From Personal Computers to Personal Fabrication. Basic Books, Inc., New York, NY, USA.
- [2] Harshit Agrawal, Udayan Umapathi, Robert Kovacs, Johannes Frohnhofen, Hsiang-Ting Chen, Stefanie Mueller, and Patrick Baudisch. 2015. Protopiper : Physically Sketching Room-Sized Objects at Actual Scale. In Proceedings of the 28th Annual ACM Symposium on User Interface Software & Technology (UIST '15) . ACM, 427-436. DOI : <https://doi.org/10.1145/2807442.2807505>
- [3] Huaishu Peng, Amit Zoran, and François V. Guimbretière. 2015. D-Coil : A Hands-on Approach to Digital 3D Models Design. In Proceedings of the 33rd Annual ACM Conference on Human Factors in Computing Systems (CHI '15) . ACM, 1807-1815. DOI : <https://doi.org/10.1145/2702123.2702381>
- [4] Thijs Roumen, Bastian Kruck, Tobias Dürschmid, Tobias Nack, and Patrick Baudisch. 2016. Mobile Fabrication. In Proceedings of the 29th Annual Symposium on User Interface Software and Technology (UIST '16) . ACM, 3-14. DOI : <https://doi.org/10.1145/2807442.2807505>

org/10.1145/2984511.2984586

- [5] 吉村靖孝, 林厚見: 「ポストファブ리케이션」とそのデザイン, <http://10plus1.jp/monthly/2017/05/issue-01.php> (2019年1月31日確認)
- [6] Stefanie Mueller, Tobias Mohr, Kerstin Guenther, Johannes Frohnhofen, and Patrick Baudisch. 2014. faBrickation: fast 3D printing of functional objects by integrating construction kit building blocks. In Proceedings of the SIGCHI Conference on Human Factors in Computing Systems (CHI '14). ACM, 3827-3834. DOI=<http://dx.doi.org/10.1145/2556288.2557005>
- [7] Stefanie Mueller, Sangha Im, Serafima Gurevich, Alexander Teibrich, Lisa Pfisterer, François Guimbretière, and Patrick Baudisch. 2014. WirePrint: 3D printed previews for fast prototyping. In Proceedings of the 27th annual ACM symposium on User interface software and technology (UIST '14). ACM, 273-280. DOI: <https://doi.org/10.1145/2642918.2647359>
- [8] Junichi Yamaoka and Yasuaki Kakehi. 2017. ProtoMold: An Interactive Vacuum Forming System for Rapid Prototyping. In Proceedings of the 2017 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems (CHI '17). ACM, 2106-2115. DOI: <https://doi.org/10.1145/3025453.3025498>
- [9] Ryo Suzuki, Junichi Yamaoka, Daniel Leithinger, Tom Yeh, Mark D. Gross, Yoshihiro Kawahara, and Yasuaki Kakehi. 2018. Dynablock: Dynamic 3D Printing for Instant and Reconstructable Shape Formation. In Proceedings of the 31st Annual ACM Symposium on User Interface Software and Technology (UIST '18). ACM, 99-111. DOI: <https://doi.org/10.1145/3242587.3242659>
- [10] 関島 慶太, 増田 恒夫, 田中 浩也. 2015. デジタル・マテリアルを用いた分解組立可能な立体形状試作システム, 日本VR学会論文誌, 20巻, 2号, p. 97-105. DOI: https://doi.org/10.18974/tvrsj.20.2_97
- [11] J. W. Romanishin, K. Gilpin, S. Claici and D. Rus. 2015. 3D M-Blocks: Self-reconfiguring robots capable of locomotion via pivoting in three dimensions, 2015 *IEEE International Conference on Robotics and Automation (ICRA)*, pp. 1925-1932. doi: 10.1109/ICRA.2015.7139450
- [12] Karl D.D. Willis, Cheng Xu, Kuan-Ju Wu, Golan Levin, and Mark D. Gross. 2010. Interactive fabrication: new interfaces for digital fabrication. In Proceedings of the fifth international conference on Tangible, embedded, and embodied interaction (TEI '11). ACM, 69-72. DOI=<http://dx.doi.org/10.1145/1935701.1935716>
- [13] Thomas A. Campbell, Skylar Tibbits, Banning Garrett. 2014. The Next Wave: 4D Printing - Programming the Material World, Brent Scowcroft Center on International Security, Atlantic Council, http://www.atlanticcouncil.org/images/publications/The_Next_Wave_4D_Printing_Programming_the_Material_World.pdf



寛 康明 (かけひ・やすあき)

[生年月] 1979年10月5日

[専攻領域] コンピュータ・ヒューマン・インタラクション、現実拡張、メディアアート

[主たる著書・論文]

仲谷 正史, 寛 康明, 三原 聡一郎, 南澤 孝太: “触楽入門 - はじめて世界に触れるときのよう”, 朝日出版社, (2016)

J. Yamaoka, R. Niiyama, and Y. Kakehi. 2017. BlowFab: Rapid Prototyping for Rigid and Reusable Objects using Inflation of Laser-cut Surfaces. In Proceedings of the 30th Annual ACM Symposium on User Interface Software and Technology (UIST '17). ACM, 461-469.

V. Kan, E. Vargo, N. Machover, H. Ishii, S. Pan, W. Chen and Y. Kakehi. 2017. Organic Primitives: Synthesis and Design of pH-Reactive Materials using Molecular I/O for Sensing, Actuation, and Interaction. In Proceedings of the 2017 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems (CHI '17). ACM, 989-1000.

[所属] 情報学環 先端表現情報学コース / 文化人間情報学コース 准教授

[所属学会] ACM、日本バーチャルリアリティ学会、ヒューマンインタフェース学会

CONTENTS

Opening essay

“Rebooting Memories”

Memory Inheritance Based on Communication Emerged by FLOWING Records

[Hidenori Watanabe] — i

Faculty Papers

A Course in Information Semiotics: Synthesis and Perspective

[Hidetaka Ishida] — 1

The Simplicity in the *Inside of a Cage* (1957):

the “Invention” of Television by Ben Wada and Tadashi Iijima

[Keisho Kihara] — 27

Refereed Papers

IT Utilization Impact on Health Care Quality and Productivity:

Empirical Analysis on National Hospital Organizations

[Kotaro Miyake] — 45

Women's Cultural Education and Occupation in Serial Novels in the Early Showa Period:

Focusing on *Mother* by Tsurumi Yusuke(1929)

[Seung-kyung Lee] — 61

A Review of Post-Disaster Recovery and Reconstruction for the

Elderly from the Individual Social Capital Perspective

[Hsinyi Hsueh] — 75

The Social Practices of Independent Chinese Curators in the Post-Mao Era

[Haiyin Chen] — 91

Is My Car Evil? A Review of Non-Anthropocentric Theories of Moral Agency

[Tommaso Barbetta] — 107

Field Review

Interactive Fabrication Technologies for Improvisational Prototyping

[Yasuaki Kakehi] — 123

東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究 No.96

発行日 平成 31 年 3 月 29 日

編集・発行 東京大学大学院情報学環

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

製作 株式会社創志企画